

川柳塔

平成十八年八月一日発行
創刊大正十三年 通卷九五一号



日川協加盟

No. 951

八月号

第12回 川柳塔まつり

《同人総会》

と き 10月8日(日) 午前10時～11時
ところ ホテル・アウィーナ大阪 3F 生 駒
(近鉄上本町・地下鉄谷町九丁目下車・TEL 06-6772-1441)
議 事 平成17年度事業経過報告・同決算報告・会計監査報告
平成18年度事業計画・同予算案・役員人事・その他

《各賞表彰式・記念句会》

と き 同 日 午前11時開場・午後1時開会
ところ ホテル・アウィーナ大阪 4F 金 剛 中・西
表彰式 路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・茴香の花賞・一路賞・
各地柳壇賞の表彰式を午後1時から行います。
おはなし 「さぶりせんりゅう」 新 家 完 司 氏
兼 題 「やわらかい」 (兵庫) 長 浜 美 籠 選
「遊 ぶ」 (奈良) 坊 農 柳 弘 選
「 白 」 (鳥 取) 鈴 木 公 弘 選
「 奥 」 (青 森) 福 士 慕 情 選
「ド ラ マ」 (和歌山) 古久保 和 子 選
「ま つ り」(事前投句・9月5日締切) 河 内 天 笑 選

◎各題2句・欠席投句拝辞

出句締切 正午・午後5時終了予定

会 費 2,000円(記念品呈)・当日いただきます。

《懇 親 宴》

と き 同 日 午後5時半～7時半
ところ ホテル・アウィーナ大阪 3F 葛 城
会 費 7,000円
宿 泊 ホテル・アウィーナ大阪 8,000円(朝食付)

◇事前投句および懇親宴・宿泊の申込みは本誌同封のハガキに明記の上、
9月5日(火)までに本社事務所宛お願いします。

◇懇親宴・宿泊のご送金(句会費をのぞく)は同封の払込用紙でお願い
致します。

◇記念句会・懇親宴には同人・誌友にかかわりなく、一人でも多くの方々
のご参加をお待ち申し上げます。

主催 川 柳 塔 社

「八月に思う」

河内 天笑

昭和十六年四月、小学校が改まった国民学校に入學。同年十二月大東亜戦争が始まった。昭和六年の満州事変にはじまり日中戦争、太平洋戦争へと続く十五年戦争の最終段階だ。薩摩・長州の両藩閥を中核として形成された軍閥政治は内閣・議會から独立して強大な地位と権力を保ちつつ日本の帝國主義と侵略政策を推進した。日中戦争が長引く中、東南アジアではイギリス・オランダ・アメリカ等の連合国と摩擦をくり返して真珠湾攻撃へと突入した。大本営からは真実が発表される事は無く、国民は「欲しがりません、勝つまでは」のスローガンのもと、耐乏生活を強いられた。

戦局は最初の一年は攻勢を続けたが、ミッドウェー（ハワイ諸島の北西にある小島）より反撃に転じた連合軍はガダルカナル（南太平洋ソロモン諸島南東部）、レイテ島（フィリピン中部）、サイパン島、硫黄島、沖縄本島、そして遂に本土空襲から広島・長崎への原爆投下に至った。八月十四日ボツダム宣言の受諾、同十五日の玉音放送を耳にするに至り、九月二日の無条件降伏調印をするまでに二百五十万の戦没者と百万を越す一般国民の尊い命が失われた。

作家の大岡昇平氏（一九〇九—一九八八）がレイテ島で敵兵と出くわした際「もう自分一人だから『軍隊』ではない。

人を撃つのは気が進まない」と言つて自ら捕虜になる道を選んだ。とても勇気の要る事だ。昭和二十六年、フィリピンでの戦争体験に基づいて一兵士の人間生存の極限に迫る大作『野火』を、その後『浮虜記』『レイテ戦記』を発表、戦争の悲惨さ空しさを後世に伝えている。

六十一年を経た今、改めて戦争の愚かしさと尊い命を失つた事実を胆に銘じ、再び戦争を起こしたり巻き込まれる事のない様、考え方を徹底しなければならぬ。

北朝鮮のミサイル発射以来、何回も各界の要員や政治家がそれぞれの立場で意見を述べているが、「やられる前にミサイル基地を攻撃する事も考慮にある」云々を真顔で発言する政治家の居る事に驚かされた。こんな行為は「専守防衛」でない事を一部の政治家は認識していない。

戦争を刻明に記憶している75歳以上が人口の1割を切った今、かつての戦争を風化させないための努力を惜しんではないと思う。

自選句

天笑

この世へは歌を歌いに來たのです

ク

この世へは孫の顔見に來たのです

ク

この世へは虹をつかみに來たのです

ク

小学生あつという間に七十二

ク

あの世へもあつという間に行くでしょう

ク



座右の句

人の世や嗚呼にはじまる広辞苑

(薫風)

私の句

一人乗るエレベーターが怖いです 宮本 三喜夫

川柳塔 八月号 目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「恩原高原」

■巻頭言「八月に思う」

遠くて近い記憶

川柳塔（同人吟）

川柳塔の川柳讃歌

自選集

水煙抄

愛染帖

俳風柳多留——一篇研究

檸檬抄「引く」

河内 天笑 …… (1)

福本 英子 …… (2)

河内 天笑 …… (4)

木津川 計 …… (52)

板尾 岳人 …… (57)

新家 完司 …… (83)

仁部 四郎・藤田 泰子 共選 …… (88)

遠くて近い記憶

福本 英子

過日NHKの課外授業で、子供たちに戦争が日本にもあった話を伝えないと、今の平和が続いてゆかれなくなるかと語られる女の先生を見て、私も今のうちに遠い記憶を探りながらペンをとることにしました。

昭和二十年七月九日の深夜に和歌山市の空襲が始まりました。

連日の警報に疲れ家族が眠り込み、サイレンが鳴り続けているのに誰も起きてきません。両親と妹二人を大声で呼び起こして庭の防空壕へ、父は警防団員でそのまま外へ飛び出して行きました。

どれ程時間が過ぎたのか、余り静かなのでそつと入り口の扉を押し上げてみると、家の中のあちら、こちらに火がついています。

戦争が始まるまでは筆筒屋だったので、木材を乾燥させるための板二階がありました。

その当時、軍からの依頼で弾薬箱や大きい砲弾箱を造っていました。

その板二階にも火が見えたので、慌てて皆を呼び出しました。丁度私の目の前で焼夷爆弾が防空壕の入口へ落ちてきました。火を消さない

「ポーズ」	神原 文選	(90)
「一路集」「紙」	猪川由美子選	(90)
「投げる」	山田耕治選	(91)
初歩教室「ごろごろ」	三宅 保州	(92)
秀句鑑賞「同人吟」	藤村 亜成	(94)
「水煙抄」	谷 口 義	(96)
■エッセー 役人のにぎにぎ	穴 吹 尚 士	(97)
七月本社句会		(98)
各地柳壇（佳句地十選／板山まみ子）		(102)
柳界展望		(116)
八月各地句会案内		(118)
各賞選考規定		(120)
■編集後記（ひとこと／田中正坊）	楓葉・希久子	(122)

座右の句

ふところにバラと銀河とエンピツと

（天 笑）

私の句

神さまの仕掛けできまる余命表

國 見 蘭 香

と壕から出られません。すぐ側の用心のバケツ二杯の水を投げ込み、中の三人を助け出しました。

ほつとする間も無く揃って家の外へ出ると近所に人影がありません。すぐ非常用の荷物を括りつけてある自転車と二人掛かりで押して大通りへ出ました。非常の時には逃げる道を決めてありましたが、そちらの方は道路両側がもう燃えていて進めません。仕方なく引き返し、和歌山城公園へ向かいましたが岡口門入り口のお店と、向かい側の公会堂にも火の手が上っていてもう逃げ場がありません。自転車を堀へ投げ入れました。自分達も石垣を伝って降り、脛まで泥の中へずぶずぶ、胸まで泥水に浸りました。暫く爆音に聞き耳を立てていると、堀端の松の木に凭れていた男の人が自転車ごと飛ばされてきました。まるで地獄です。

その時ひと際回りが明るくなり顔を上げると和歌山城が炎えています。あまりに綺麗で今までの怖さを暫く忘れ、見とれていました。

どれ程時間がすぎたのか、夜が白んできて辺りを見回すと、つい先程まで妹の横にいた小学六年生の近所の坊やが亡くなっています。直撃だったのか誰も気付きませんでした。

私も背中に火傷して泥水を被っていたのです。堀端で坊やのおばあさんが「代りたい」と泣き崩れていたのが目に焼きついています。



河内天笑選

寝屋川市 森

茜

青梅へ赤穂の塩をなじませる
野菜サンドのパン湿らせているトマト
食べ頃の退廃的なメロンの黄
スイートピーわずか小瓶を満たすなり
あじさいの雨もいっしょに壺へ挿し
砂浴びの雀ついでに種もはね

砂川市 大橋政良

薬一本浮いて流れてひとりぼっち
風の野に晒すほうけた路のとう
罪一つ背負って生きる放浪記
歩調合うまでの妥協にかぶる波
身辺整理もつたないで進まない
思いきりテーブル叩く負け惜しみ

八尾市 高杉千歩

要支援ゆるりそろりと梅雨晴れ間
ロボットが欲しいな老いが切実に
同意書へ自己責任の判を捺す

まごころが届くピンクのラッピング
その日まで元気でいようストレッチ
未完の絵溜めて八十路へ暑い夏

藤井寺市 太田扶美代

今すぐに着てみたくなる花模様
うぬぼれて川の深さを読みそこね

黄昏の恋ならきつと黄金色

春の味苦みエグみも幸のうち

物忘れ不意に自分が怖くなる

新ジャガホコホコ今日の厨はバラダイス

西宮市 西口いわゑ

轟音を立ててくずれた恋もある

モカ香る野暮な話はやめにする

千手観音人も仮面をいくつつ持つ

オンザロックと肩を並べている麦茶

青空にふわり浮かんだ鬼の顔

一つ忘れ一つ悟ってまろく生き

和歌山市 喜田 准一

肩こりは三度首を振っておく
くどい話は袈裟斬りにしたくなる
風船とステント嵌めて生き返る
バツカスの神も奨める休肝日
子育てのように野菜をつくる母
強がりに男の美学垣間見る

鳥取市 塔 寛子

その日までおしゃれですわと言われたく
筆忠実が途切れてからの老姉のこと
インターネットとやらがワタシをよせつけぬ
のさばった小判草消す葉撒く
教基法我が家はばあちゃん法でいく
白髪をおしこめベレーの夏を出る

河内長野市 山岡 富美子

八月忌かえらぬ人を待つカンナ
雨しとど内輪話を聞く介護
新聞を読んで解らぬ事が増え
ガードされスキップ出来ぬ通学路
切っ先をさらりとかわす年の功
褒められた仁王の頬がゆるんでる

西宮市 牧 潤 富喜子

言葉なし児童受難のテレビ消す
扇風機ないと困るしあれば邪魔
何ほどの事も出来ぬがやって見る

無料と言う電話を恐いものとする
思い切る坂は手ぶらの方がいい
蝶が舞う花を寢床にしたらしい

西宮市 秋元 てる

初咲きと黄バラ一輪誕生日
お座成りの拍手ににこり大人だな
花が散る死なねば逢えぬ友ばかり
真つ白なページだ愚痴は止めておい
我慢など古くさい事しない世だ
そういうものだ決めてしまえば悩みなし

富田林市 片岡 智恵子

運転と電話どちらかやめなさい
一枚の絵馬に書けない欲の数
電話では照れて言えないのでメール
ふくよかな人の苦勞は伝わらず
孫はにきび祖母は小じわが気にかかり
飛行音のんびり聞けるのも平和

堺市 石堂 潤子

サイタサイタ遠き佳き日を曝書する
どの子とも住まず七十路を謳歌する
金婚の記念撮影風みどり
奈良町の菓子舗に備長炭も売り
負けん気の友をやんわり受け止める
鳴高音心通わぬ人と居て

竹原市 石 原 淑 子

紫陽花の恋の予感の七変化

一言を反芻してます今日無口

任せろと危なっかしい人が言う

傷口を晒し仲間にしてもらう

子離れてやつとがずっと水入らず

竹原市 岩 本 笑 子

ふとん干す梅雨空どこへ行ったのか

天と地と時々雨と握手する

ミニトマト今年も二本だけ植える

青梅の今年もシソを揉んでいる

同病と知って話の尽きぬ椅子

竹原市 森 井 菁 居

主役の座下りた蛙に寒の冷え

わらぶきの屋根が近頃見当らぬ

プライドを捨てた大樹に風そよぐ

言いたい事はつきり言うて手を握る

どんでん返し食うて泣くのはこつち持ち

竹原市 時 広 一 路

全人類たった一つかこの指紋

約束は守るものだ四季の花

男の中に女一人か昼の月

効くものと思わなければ栄養剤

風鈴が聞いて聞いてと呼んでいる

竹原市 正 畑 半 寛

千年の風古いとは言わせぬぞ

バスツアーいつも二人でひとり旅

やさしさをひとり息子に教えられ

私はここにいますとトンビ鳴く

雲ひとつ流れ仏の顔になる

美祢市 安 平 次 弘 道

振り切ってはみたが妥協を強いられる

兵糧は尽きた道草など出来ぬ

一滴の水にも映る黄信号

モノクロの時間が胸を通り過ぎ

分岐点にあるのは可能性だろう

宇部市 平 田 実 男

ケーキ入刀へお腹の子がはしゃぎ

すれ違うほうも二人の縄電車

信用というお宝を子に譲り

よく見えぬ聞えぬ振りも老いの知恵

鍬を振るより肩が凝るモーニング

東かがわ市 神 保 坊 太 郎

演劇に勧善懲悪おしえられ

死にたいはその場のハズミで出た言葉

色づくど吾が物でなしサクランボ

五十年ぶりネと初恋手を握り

ローンに追っかけられている車

東かがわ市 原 賢

雑草は舗装の隙間見逃さず
少子化で過疎の分校幕降ろす
負け犬にならぬと老いて辞書を買う
賞味期限切れた自慢も得意顔
傷心の友を救った軽い嘘

東かがわ市 清 川 玲 子

ハッピーな風に送られ初出勤
ベン先にコント一つがうかび出る
百円の客にも笑顔見せる店
昔からの仕来り守る白い壁
腕白の頃のべんとう麦の飯

東かがわ市 川 崎 ひかり

無縁墓陸軍中尉の字も風化
脇役も楽しからずやかすみ草
美味しい物食べると笑いこみあげる
通勤の朝の車は殺気立つ
さい帯血赤ちゃん初のボランティア

東かがわ市 伊 勢 八重子

郷愁にカメラを向ける千枚田
愛してる方が何時でも待たされる
姑の世話ありがとうで皆忘れ
親切と思えど時には嫌がられ
子等四人苦勞の遺産かと思う

東かがわ市 池 内 かおり

へそくりが出来た昔がなつかしい
母の日のメールお前も母なのに
酔うて寝る何とかかわいい人かいな
晩酌の許可もうれしい病み上り
ふところは足りているかと子に問われ

東かがわ市 成 重 放 任

今年こそ会わせてほしい彥星と
願いごと出てこぬ内に流れ星
ドラマなく今日も一日暮れてゆき
無農薬何度も聞いて野菜受け
梅雨の間を競って並ぶ洗いのもの

高知県 赤 川 菊 野

敗戦忌信じてました神風を
逆に回る時計があれば家も売る
飯の世は線香花火のようなもの
年金がもし残ったら誰にやろ
思い出が爆発しそう胸の内

高知県 小 澤 幸 泉

ふるさとの湖底に亡父の声を聞く
勲章が本当はほしい一句詠み
散り際を知らぬオヤジの太い足
末席を汚す男がよくしゃべり
老眼鏡あの世の友をさがし出し

高知市 小川 てるみ

一本の道にもあつた選択肢
振り返る茨道にも花が咲き
第二章あつと言う間のひと昔
日帰りのツアーも捨てたものでない
シュレッター心の疵はまだ消えず

松山市 宮尾 みのり

偏屈なほどピーマンの自己主張
女とは水に流せぬ過去ばかり
いい方にとると予言も生きてくる
油性ペン枯淡の境地にはなれぬ
スローライフ鐘の余韻に合う歩幅

松山市 高橋 宏臣

もう一度夢をみたいが不眠症
満腹になるとゆらゆらする秘密
机上論生きる答は透明で
新聞をまるめて捨てる白昼夢
泣きやんで空のひとさわ澄んだ青

松山市 古手川 光

横文字の氾濫昭和遠くなり
役人の遺憾は詫びてなどいない
お隣の番犬うちも見えてくれる
赤字赤字言うてる店が潰れない
太陽のリズムで暮らす過疎の老母

大洲市 中居 善信

腹ん中晒す友達ならひとり
田んぼには田の哲学が置いてある
レトロな店でひよいと見つけた叩き独楽
山と積む机の前が落ちつける
恋をする希望は捨ててない古希で

西予市 黒田 茂代

浦島草昔の名前で咲いてます
素手で蠅運動神経未だ安泰
生き恥を避けて身を焼く夏の虫
気の小さい字書くわたしのごつい指
ドラマより怖い事実があり過ぎる

唐津市 久保 正剣

そのうちに地球は火の刑水の刑
やすらぎや一片のメモ白くあり
人間の誇りはチャンキオケサにも
神様は知ってるはずだDNA
横車押すと誰かが蹴躓く

唐津市 山口 高明

外面の良い宰相で困りもの
福祉課はみんないじわるそうな顔
大学を出てもホストで夜の街
君が代は千秋楽にうたう歌
期待せぬ方が落胆せずに済み

唐津市 宗 水 笑

小走りの形に縮む母の背な
額の父お前の中にあると言ふ
秀才のかき上げ用の長い髪
神さまをあてにするなど言う左脳
政治家の破顔大笑無理がある

唐津市 坂 本 蜂 朗

鏡台の前真剣な妻の劇
医師の指示妻同伴で聞いた悔い
大局的見地で妻に勝ち譲る
形勢を読んでる妻が負けて勝つ
へそ出しを見たがる老いの目を叱る

唐津市 井 上 勝 視

諦めの歳だ仮面を陽に曝す
死語の中日本の歴史喘いでる
拝金の闇に日本が崩れゆく
分岐点瞑想をする癖がつく
情報保護あちこち歪む法治国

唐津市 市 丸 晴 翠

楢山に負われる日へのダイエツト
老い独りカーテン開きけじめ付け
無駄になる火災保険よ有難う
使わない介護保険に感謝する
退職後ろくろ挽いてるベレー帽

唐津市 樋 口 輝 夫

庶民捨て銀行だけが守られる
忘れない敗戦の日の青い空
浮雲の流れ見つめて故郷思う
無駄話ときどき本音まじってる
ゴミの山家具一式が揃ってる

熊本市 永 田 俊 子

水はじくきれいな茄子のブライドだ
わがうしろ姿に気づかなかったミス
いくさとスポーツ男が好む勝負ごと
自分では気づかぬ口臭のたぐい
愛国是非論しきりにゆれる葱坊主

熊本市 高 野 宵 草

自慢の歯僕から若さ崩れかけ
せつかちになった余生の時計たち
テレビより本を開いた遠い耳
触診の温みに安堵感染みる
クーラーに合わせて熱いお茶を飲む

熊本市 岩 切 康 子

窓開ける今朝も空地の雉が鳴く
何するも体に相談して動く
様子見て様子見てから受診せず
返事なら直ぐに出来ない訳がある
ビデオ見て旅の楽しさ繰り返す

黒石市 相馬 一花

卯の花と隣の嫁に吹く山背

撫で肩の美女が好みの怒り肩

一杯の酒で赤鬼でき上がり

洪柿のような男も恋をする

平成の世にもまだ居る籠の鳥

弘前市 福士 慕情

一匹の蠅に昼寝を邪魔される

夏ばての特効薬に生ビール

汗かいてビール祝辞に焦れている

案山子にも着せてやりたいクールビズ

稜線で涼しい海の風とあう

弘前市 相馬 銀波

同意した事引き金のわだかまり

スタートの意欲竜頭蛇尾のぼく

半額に近い米価で減反し

反論の立場で腰をあげ直す

度忘れが続き自信のない答え

弘前市 高瀬 霜石

一瞬の絆親子のバーベキュー

警官の姿を見れば逃げる癖

新型へ機械も嫉妬するらしい

子離れがなかなかできぬ電話口

月曜日いちばん軽い靴を履く

弘前市 宮崎 ヒサ子

夫婦旅行旧友訪ねブラン練る

懐かしい仙台弁の中をいく

健在の盃を交して暖かい

白い画布緑に染まるその過程

水っていいねごくごくくと気が晴れる

弘前市 高橋 岳水

一日を占う朝の化粧乗り

口下手がしびれ切らして吐く本音

切り札を伏せて反論聞いてやる

親離れ子離れ自我の道に出る

無知の知に気付いてからの低姿勢

弘前市 岡本 花匠

みどり風本音くすぐり吐き出させ

万緑に浸りからだの若返る

梅雨明けてこころも開く夏まつり

縁日のご縁を運ぶ夏の風

明け透けに嗤ったひとの貌を見る

弘前市 櫻庭 順風

水素爆発広い廊下を駆け巡る

水素爆発何が起きたか駆け付けける

水素爆発悄気ている教卓よ

水素爆発心配そうに無事を見る

水素爆発大した怪我のない安堵

弘前市 須郷井蛙

貧しくも心オアシス詩をつくり
ウォーキング近所の畑巡視する

大合併熊にも猿にも市民権

冷蔵庫一掃うまいゴツタ汁

百円の傘で上手に旅をする

弘前市 今 愁 女

スローライフ心の中は焦ってる

うす紅の花林檎にも蜂の使者

朝顔の二葉から幕あける夏

早寝しても深夜に起きる気合いなく

ジャパン以外録画で観てるWカップ

十和田市 阿 部 進

お袋の味お金出しても買えません

亡妻の墓参りかさね律義者

タラの芽をテンプラにして春を食べ

日本語の乱れに青い目が困り

良い友でいたくて返信すぐに出し

平川市 小 寺 花 峯

冷飯を盛ったら愚痴の副作用

亡父よ亡母よ毎日吞んでますチーン

無農薬最初のイチゴ虫が食べ

一万歩歩けぬままの万歩計

右左なくて軍手の自由人

さいたま市 星 野 育 子

一本のバラに動揺してしまふ

不祥事でワイドショーだけ活気付く

医者任せ医療被爆は知らされず

バス停でタクシー止めるイヤな人

飼犬の振る尻尾にも義理が見え

日高市 根 岸 方 子

休耕地投げ込むゴミに悲鳴あげ

親切の注意耳栓欲しくなる

失敗も過去形にして乗り越える

親友が噂の元と知った悔い

血圧の安定剤に一万歩

佐倉市 岡 井 やすお

左右から引つ張りだこの拉致の母

広島に痛まし悲し負の遺産

足許が揺れてちや英霊浮かばれず

揉めるならバスで行きます甲子園

禁酒禁煙先生が先ず手本

柏 市 河 野 桃 葉

店員の煽てに乗った無駄遣い

寂しさと気楽が同居する長寿

肩書きを解けば路傍の人になる

過労死の心配はない定年後

二次会の趣向ピエロになっている

東京都 清原悦子

澄みきつた空にまさかと思う雨

旅支度入れては出して終わらない

根が深い話で出口見つからず

苦労した事は肥やしになっていく

我慢した分だけ笑顔素晴らしい

東京都 長谷川康子

紫外線避けて買物夜になり

玉葱も芋も芽を出す野菜カゴ

大切な調理の前に刃物研ぐ

紫陽花の蕾ふくらみ痛む膝

若いなあ功を焦って墓穴掘り

東京都 岸野あやめ

アドリブで難所をしのぐ年の功

大阪の水もたまには気の薬

子と喧嘩したのがケチのつきはじめ

大都会ビルの隙間に地蔵様

おめかしもまあ程々の八十路過ぎ

東京都 小川賀世子

薔薇の香に包まれバースデーの午後

褒められてつるバラはどこまで伸びる

金賞のバラそれなりに咲き誇る

丹精のバラに甲乙つけられぬ

ノスタルジア原種のバラにホッとする

国分寺市 野崎勝

カタカナ語熟女は跳んでいるつもり

ジャイアンツに勝っても酒が旨くない

妻の留守好き放題にしています

北国へ名残の桜追う夫婦

若人の歓声聴きに球場へ

八王子市 播本充子

ミシンコも勝負パンツをはいている

美術館出るとざる蕎麦わらび餅

噛み合わせ話に手土産が焦れる

取れそうなところから取る年会費

趣味の会時に殺意を感じとる

武蔵野市 亀井円女

柩にはタンゴのテープ入れとくれ

夏祭り燃える恋やら消える恋

口だけはほんまに元氣とそれ皮肉

今日はご機嫌タンゴにルンバジャズロック

強そうに見えてほんととはあかんたれ

横浜市 小野句多留

カルチャーの帰路母になり妻になり

あやまるがなんで僕だけ悪いんか

定年のスタート地点にある格差

ゴタゴタでプロ化決意の金メダル

少しだけ謙虚になれば頑張れる

横浜市 菊地政勝

庭ばかり眺めきれいな夢を抱き
大見得を切った歩幅が頼りない
聞く耳を持たずにいつも早とちり
絵手紙にしばし煩惱忘れさせ
結び目を弛めて僕のクールビズ

富山市 島 ひかる

登山口帰らぬ人を守つ車
尋ね人肝に銘じた登山口
山の楽しさ教えてくれた人も逝き
ことさらに仏と語る盂蘭盆会
金時の子孫が住んだ過疎の村

可児市 板山 まみ子

台所をキッチンと言い冷奴
見ただけで何故か嬉しいお赤飯
山は良い青葉の光風の音
細胞の奥まで酸素吸う若葉
他所の子は少し見ぬ間に歩きだし

静岡県 蘭田 獏 杏

かさこそと衣を脱いで竹になる
親心臥す身忘れて子を思う
誘い断つ飯の時間の違い過ぎ
決断を迫る鋭い稲びかり
雑魚なりに僕の歩まん道があり

愛知県 早川 盛夫

日本人よりも上手な日本語
一日の疲れを回す洗濯機
驚いてヘビの飛び出す造成地
畑仕事にはもってこい子の古着
借金の無い生活が夢だった

犬山市 金子 美千代

気前いい整理お宝捨てたかも
リタイアへ芽を吹き返す好きな道
方便と言い訳しつつ吐いた嘘
さあ掃除夫のちよつと出掛けた間
はめられて花喜んで咲いてくれ

犬山市 吉田 幸子

日焼けした皺くちやな手の独楽鼠
稲光わたしを攻めてくる予感
朗報は膝の痛さを治すコツ
ハイチーズ苦手でにがみきる夫
上げているつもり七ミリ蹴躓き

犬山市 関本 かつ子

涼しげな器に替わる食器棚
引き際も心得ている花盛り
三面のその後は妻の方が知り
切り替えて数えてみよう今の幸
泡立ちへ先ずは一口ぐつといき

大津市 中 宗 明

異変だと言いつつ我慢馴れたせい
勤める気無いニートには親のスネ

上昇運奈落の底は見えぬまま

姿見の我が身見直し自信湧く

ガードマン下校途中の守備重い

京都市 都 倉 求 芽

絵手紙が季節先どりした元氣

さよからの便り余白に土匂う

色なんか違っても鯉仲がよい

哀しみは茶濾しですっきり切りました

吊革へ胸の谷間やふくらみや

京都市 高 島 啓 子

八月の生まれで平熱が高い

雲になり二泊三日の旅に出る

公共の道に置いてるブランター

病氣してから良い顔になりました

許さない許すと愛の万華鏡

岡岡市 井 上 森 生

成功は抱き続ける希望から

鬼ばかり次は悪魔のエレベーター

和心と良き武士道の血が涸れる

時は今光秀公の機が動く

半世紀むかしのままの顔が逢う（中学同窓会）

長岡京市 山 田 葉 子

夫婦だから秘密は抱いて逝くことに
姑という重石が今もきいてる

雑草も土を選んでるらしい

子供とのほどよい距離がつかめない

はじまりは父が誘ったボール蹴り

大阪市 前 たもつ

土饅頭崩れて父の忌は巡る

お洒落な父マントに似合うソフト帽

二十年父の形見のひげそり器

今にして父の拳骨欲しかった

父に似る生き下手悔いたことがない

大阪市 鶴 田 遠 野

団塊と知らず生まれていた不運

指切りの女と出逢った故郷の駅

自慢話つつこみ入れて聞いてやり

早寝して明日を待つてる休肝日

すっぴんの心にさせるクラス会

大阪市 川 端 一 歩

風鈴を出して一振りする笑顔

新鮮な気持で九条読み返す

清水坂登り隠れた滝に会う

わだかまり解けた握手の手が痛い

語り部のもう一度聞く原爆忌

大阪市 川原章久

オムツからオムツとの差が人生だ
人情を入れぬ上司の檄が飛ぶ
幕引きは何時も女の涙雨
ロボットが職人の腕馬鹿にする
お悔みはゆつくり消えた方がよい

大阪市 松尾柳右子

チョット来た客が長居だほうき立て
買物の女チョットでは済まぬはず
お好み焼チョット待つ間の良い匂い
赤ちゃんの匂いほんわかチョット抱く
良い所CMトイレへ一直線

大阪市 津守なぎさ

車窓には早苗キラキラみどり映ゆ
夕焼けに総身染めて露天風呂
幾星霜もまれ揉まれて桜貝
水平線朝日拝めた今日の幸
陽を浴びた石ほこほこと車座に

大阪市 津守柳伸

使い捨て時代になんて掛け継ぎ屋
必勝へくだおれ人形も衣替え
グーチョキパー入道雲とかくれんぼ
針持つ手女らしさが匂い立つ
水無月の検診予定歯科眼科

大阪市 榎本日の出

長生きを許してくれる子が欲しい
恥ずかしいこともさりと云える歳
贅肉を落してくれる医者がない
薬より効目の早い優しい手
さりげない心配りに泣かされる

大阪市 榎本舞夢

鯉職何を見つめて泳いでる
ピンチになると何故か勇気が湧いて来る
悪いけど人の失敗面白い
今日のこと思い浮かべて仕舞風呂
のんびりしていると脳が錆びて来た

大阪市 小泉ひさ乃

メールなら好きもごめんもすぐ言える
淑やかな女を変えていくお酒
マンネリをフレッシュマンが変えていく
こつこつと出世に遠い汗をかく
風邪の床洗濯日和うらめしい

大阪市 小糸昭子

労働の尊さロボットしてくれる
クラス会お山の杉の子唄って別れ
阪急阪神何でも良いからタイガース
好景気年金者には届かない
香を嗅ぐ場所でしびれと花粉症

大阪市 安達 はじめ

何回も仕切り直して来た夫婦

ドジ二人曲がりなりにも夫婦です

限りある命夫婦で温めあう

風の街積木の下手な人という

ニアミスを時々起こす夫婦仲

大阪市 神夏磯 典子

真実は一つバラにはバラが咲く

まだ種を持っているから生きられる

笑わないいちにち損したなと思う

籠の鳥芝居上手になつてゆく

お葬式フラワーションを見るようだ

大阪市 古今堂 蕉子

分別ゴミに出したいほどに腹が立ち

ピンチから学んだはずがもう忘れ

炎天下傘さしかけて愛を分け

今更に変わらぬ夫変えぬ妻

美しい針目だ母の愛こもる

大阪市 岩崎 公誠

手のひらに摺り込んだあるボクの過去

辛抱は嫌い我慢はなお嫌い

笑い袋ひとりであけて白昼夢

脳味噌が干涸びるから水浴びる

この夏はスキンヘッドのクールビズ

大阪市 奥村 五月

村長のズルさ知ってる地蔵さん

部活では結構酒も教えられ

年金で飲めるお店にランク下げ

隠し事できぬ男で金がない

ネクタイも名刺もいらぬ二度の職

大阪市 近藤 正

大笑いしているネタが我が身とは

大阪市手玉に取った飛鳥会

三兆円稼ぎホクホクゼロ金利

九条が世界を変える種を蒔く

大阪城鶴彬忌を待ちわびる

大阪市 福岡 末吉

是が非でも昇華させたい過去がある

語らずも目と目が結ぶ夫婦岩

鉾先を妻に向けて子を叱る

気がかりな友の便りに長の旅

逃げの手に脆き命運見据えたり

大阪市 大川 桃花

いつからか私欲になった志

少し前のめりに歩く亡母に似て

光り物付けた男の空元気

歳なのかインコの声も囁れる

女の勘水晶玉より確かなり

大阪市 清水 絹子

男氣も廃たれ平成鼻ピアス
夫の弁解面白いけど笑えない
妻の風邪ピンチに喘ぐ家事雑事
怠慢のつきぬ市政に明日がない
積木つむ悔いないように丁寧

大阪市 町田 達子

雀たちベンチの側に寄ってくる
改めて思う月日の経つ早さ
菖蒲園花は活き活き客招き
萎えた体も花に誘われ若返る
一枚の写真に当手を振り返り

大阪市 津村 志華子

幸せはほどほどがよい丸い背な
けん命に生きる命に花の風
もう少し消さずにいたい命の灯
少子化のやがて日本に来るピンチ
不都合な時は言葉を濁しとく

大阪市 渡部 さと美

長老言う長寿の秘訣腹七分
有難く拝聴したがむつかしい
妻の啖呵それから夫婦入れ替わり
スパーでおばさん日中長ばなし
無利息の銀行やはり肥ってた

大阪市 西川 更紗

週一度くらい手抜きを許されよ
二次会へわたしを省かない仲間
篝火に鶉は鮎を吞む外はなし
煽てられこつそり火種あたためる
ライバルの裾の綻び見てしまう

大阪市 伊藤 博仁

お寺から忌明けに念珠使いましよ
大の字も空の下ではほんの粒
割り食っておめでとうだけ言う祝辞
義歯一つ持ってお医者に走りこむ
駆け登る煙突のない新斎場

大阪市 熊代 菜月

雨風にさらされ恋も色あせる
急ぎ足金木犀がひきとめる
延命を淡々と言う医者顔
神の声耳をすませば杉木立
明日かも知れぬ終りに体あたり

大阪市 小谷 集一

恙無い一日祝う缶ビール
夫婦とはピンチを越えて来た絆
ときめきが消えないうちに書く日記
責任を取らない人がよく喋る
もつたいないもつたいないと瘦せられず

大阪市 板東倫子

邪宗教の魔女が呪文をかけて来る

影武者がリベンジせよとけしかける

根性と辛抱外人力士から学ぶ

破滅した男悲しい嘘を吐く

可愛いねと声掛け親ににらまれる

大阪市 川久保睦子

ワンカップ後部陣取るバス旅行

色気なく食欲だけの妻でいる

認知症神がくださる切符です

十戒というものがあり手を洗う

色即是空ささやかな夢を追う

大阪市 升成好

せつかちを笑って釘が身をよじる

妥協案まとまる様子茶を替える

氣心を知る熱爛のうまいこと

一途さに仏うつすら目をあける

好きだからどんな仕草も見逃さず

大阪市 池上清治

孫ひとりくらいは初心でいて欲しい

舌やけどしてご馳走がふいになり

馬籠宿リユックだけでも登れない

呼ぶ声が届かぬ無念拉致家族

一先ずは水で冷やしておく火傷

大阪市 中村叡子

朝市に昔の味の蓬餅

朝市はパジャマの上に宿羽織

神童のなれの果てにはインサイダー

庶民には見えず蠢く悪の巣が

八十路坂膝腰なだめ必死なり

大阪市 中村れんげ

待つ人は来ない寂しい花時計

トラブルを起こして時の人でいる

陽が沈む何もなかったかのように

食の本あの書とこの書正反對

もう少し頑張れと言う電子辞書

大阪市 星野きらり

散る花もやがて肥やしに潔し

訪れし娘へそーめんの湯が滾る

お家でもピカピカかしらカーリング

母の日を待ちかねている子のごとく

草花の手入れルンルン怠らず

大阪市 岡本久峰

商いのだいご味生きていればこそ

二百まで生きてほしいと客の声

身のほどを弁え門を広げない

生き死にを重ねて悔いのない余生

置き土産基地提供の小泉よ

大阪市 井丸昌紀

泉佐野市 山本蛙城

咎めないことにしました母の嘘
得したような損したようなるう年
少しづつ汚れて歳を取ってゆく
公園はあれもダメですこれもダメ
少しづつ手強くなってゆく娘

池田市 栗田久子

八月の声を聞いたか野の仏
風を恋う京のにぎわい五山の火
手短かに伝えたためにもれたこと
付き合えと注がれて飲んでからのこと
敗戦を昔話として語る

和泉市 西岡洛醉

夕焼け雲明日の針路を予告する
頑張ろう八十路の坂もあと少し
母の影踏んで育った正直さ
狂わない歩幅は善という歩み
胸診に女医の指先心地良く

和泉市 横山捷也

一線を越えそう初夏の風に乗る
婚前に乱発しすぎた空手形
車イス母のさみしい笑い顔
妻病みて傾きかけた船である
鏡にはウソをつけない歳になり

貧乏はいいな乗っ取り詐欺無縁
ちっぽけな枡に幸せこほれそう
生き急ぎだとさヒルズに棲む魔物
ループタイ余生の軽い風の中
封書にも花の切手のお気遣い

茨木市 藤井正雄

ひと花を咲かせて来るとそれつきり
火傷せぬ位置で言いたいことを言う
川幅を広げて意見聞いてやる
バーゲンの浮いたお金でレストラン
里の駄モダンになって他人顔

大阪狭山市 矢野梓

顔だけは分かり名前が出てこない
写真見て話は遠い日に戻る
二人して別別の物さがし合い
複雑な気持で迎う誕生日
エレベーター躊躇いながら乗っている

交野市 田岡九好

五十年経ってようやく腑に落ちる
三分方呆けて目出度い尉と姥
行くぞーと言って飛行機とび上る
老人性オーラが出たかバカにされ
釣竿は多分哲学する道具

交野市 山川 日出子

阿波踊りエライヤッチャと自分ほめ

お揃いの浴衣の友と阿波踊り

エストニア把瑠都力士は五ヶ国語

戦時中リンゴのうたはおくら入り

空襲で焼けた母校は木造舎

交野市 森 本 弘 風

W杯寝不足運ぶ通勤車

階下でも同じドラマを妻が見る

二階から歓声トラが勝ったよう

先ずビール渴いた咽が歓喜する

後ろから見ればやっぱり妻も老け

河内長野市 坂 上 淳 司

般若より素面の妻がなお怖い

ランプの湯みんな美人に見えました

停電にすれば少子化防げます

一年中閉店セールしてる店

閉会を御開きという摩訶不思議

河内長野市 井 上 喜 醉

義理だけの名前が並ぶ熨斗袋

ボスターの美人が覗く回り角

捕まると大変あの人話好き

喜寿を越えめつきり減った飲み仲間

美しい地球が困るゴミの山

河内長野市 植 村 喜 代

辛いニュースばかりつづいてこれ日本

桜散りさびしくなった花通り

来年の桜はどんな色で見る

その内に手の鳴る方へ行くのです

ビル谷間飛ばされそうな小柄です

河内長野市 水 谷 正 子

点滴で三途の川を泳ぎ切り

タクシীর後部座席は降りにくい

僕よりもトマト胡瓜が雨を待つ

皇室の外交笑顔素敵です

サッカーが始まるまでは交流戦

岸和田市 岩 佐 ダン 吉

空仰ぐやるだけやって悔いはない

体当り他に作戦ありません

少しでも善意惜しまぬことにする

夾竹桃ヒロシマはまだ燃えている

流されぬ旗一本を立てている

岸和田市 原 さよ子

鉢だけの値段と植木買わされる

余る布靴を作る夢を足す

逢うたびに同じ話を聞く老化

ゆつくりと心やすめる穴場の宿

児ら遊ぶところに蝶も来て遊ぶ

岸和田市 井 伊 東 吉

花芽ないあじさいの葉がよく茂る

梅雨前の洗濯どっさり妻悲鳴

ドアの陰村上いたと露知らず

ナイターの結果見届け出る散歩

恐ろしや天国行きのエレベーター

岸和田市 森 元 ふみよ

覇気の無い若者に喝見舞いたい

脚丈夫旅三昧の老夫婦

年重ね親の癖まで相似形

ちよい悪を真似して妻に毒づかれ

欲しい物仰山あるよまだ若い

岸和田市 土 橋 房 枝

オクターブ違うセレブの美人妻

近頃は妻も元気で留守が良い

我が家から琴の音発す至福の日

慰めの言葉が針で刺すようだ

ポストにも礼を言いたい良い便り

岸和田市 雪 本 珠 子

哲学をスパイスにして句を作る

心変わり同じ歩幅で歩けない

思い出と癒しをくれた猫昇天

しがらみを捨て切れないで黄昏れる

濡れ縁は我輩の席野良の猫

堺市奥 時 雄

男教師出てきてダンスやめにする

デジタルの世も六輝には逆らわず

何してもどじな男の子沢山

せつかちと酒を飲むのはもう懲りた

立ち話みな悪口と思う鬱

堺市 志 田 千 代

ざりざりの暮らし語れる同世代

火遊びも火傷も知らぬ白い肌

さくらさくら今年も梅の実が熟れる

若かりし頃はさぞやと遺影褒め

少子化や望まない子も生まれてる

堺市 加 島 由 一

別れた日思い出させるような雨

CDのお経でごめんお母さん

待つ女などは演歌のつくりごと

年金で清く貧しく美しく

責任がうやむやになる日本流

堺市 宮 本 かりん

座り場所いつかきまって二人きり

決心がつかないままで背を押され

年月でも癒されぬまま残る傷

アンパイアの誤審は神も目をつむる

人生の節目で迷うことはかり

堺市 西村 りつえ

腹立ちをずばり突き出す心太

チャレンジにけちを付けない応援歌

車窓から四季の花見ずメール打ち

派手に駆け限界知ったハイヒール

揉め事に深入りしない水すまし

堺市 源田 八千代

指定都市晶子フォーラム盛り上がり

フィナーレは君死にたまうことなかれ

厳肅さにかけるアルバイトの祝詞

読経聞く卒寿ちゃんまり正座する

居眠りのリズムになって来た木魚

堺市 齋藤 さくら

ストレスを捨てに来たよとご挨拶

雨の日の傘は派手目と決めている

いい人のつもりで道を教えてる

監督になったつもりでサツカー見

水撒きに蛙が伸びをしています

堺市 和田 つづや

鬼灯の市思いだすブチトマト

浮かぬ日は白に包んで街に出る

動かない球でよいいに打ちづらい

正面に居るとよこしま悟られる

苦も楽もわけわけにして恙ない

堺市 柿花 和夫

ゆとりあるからお百度を踏んでいる

初蟬のためにこの枝残しとく

ピアス穴あけて少女が脱皮する

笑点が始まり日曜が終る

老老介護楽しいつらさとしておこう

堺市 矢倉 五月

韓流のビデオ夫はふて寝する

弱音吐くけいこしてます古稀前に

歌詞カード配られにわか虎ファン

出世魚ばかり食べさす母性愛

日の丸のはためく家がまだあった

堺市 國見 蘭香

消火器の期限切れには感謝する

ぶらり歩きつい目が動き無駄を買う

お金で済む便利近所を疎くする

心地よい風と手を組む山あるき

お帰りと大きな声で迎えよう

堺市 村上 玄也

逆らえぬ会議黙って座るのみ

あれこれと食べさせ過ぎるものもんだ

女房の前で時効は通らない

目標にいつも届かぬ万歩計

最初からやり直さぬと出ぬ台詞

堺市 神原 文

マージャンもゴルフも好きで仕事好き
急に早口触れたくはない話

アドバイスおすそ分けほいただいて
音楽が好き直感が冴えてくる
どこまで続くとほけ上手の世渡りが

堺市 近藤 豊子

つきそいの傘ふえてゆく通学路
児の方へかたむいている母の傘
ビニール傘雨のスキップみえてます
持つてでてあとはおぼろの忘れ傘
十五夜のからかさ宇宙船ならば

堺市 山本 半銭

手伝いはほんの少しで居なくなり
公園の太極拳を見る部屋
軽い嘘親にすっかり見透かされ
春も夏も女の暦深い淵
気はこころなんて少うしまけてくれ

四條畷市 吉岡 修

本心かどうか微笑みみせている
やんわりとりボンをかけてある本音
未練とはこういうことかまた揺らぐ
本心に辿りつくまで皮をむく
ご希望はわかるが決めるのは閻魔

吹田市 野下 之男

どうするの愛国心が泣いている
金だけを信じる人で世が暗い
子供等を何故か好んで怖い影
はいチーズ笑顔の後はしかめ面
女房を拝んだ昨日もう忘れ

吹田市 穴吹 尚士

関白で困りますのと妻の嘘
お互いをばやきながらも共白髪
安産であつて欲しいとただ祈る
呑み仲間共謀罪に問われそう
悪びれた顔もしないで人を食う

吹田市 山本 希久子

辞書めぐりサンズイ偏は涼しそう
言いたいこと言うて失うものがなし
八月の花強かに自己主張
夏寒し子供巻きこむ事件事故
矢面に立ち降るほどの矢を浴びる

吹田市 大谷 篤子

時として本気で孫を叱ってる
失敗を笑いとばして抱きしめる
三日目のおでんのような仲でいる
思考力ゼロ私でなくなりそう
待合せ遠い人から早く着き

戦前派静かに語る懺悔録

吹田市 瀬戸 まさよ

言葉だけいつ死んでもと嘘くさい
無気力で平和でデモもストもない
ときどきは昔の写真見て和む
餅米を炊く晩年のおはぎ好き

吹田市 早川 棲世

モチーフは戦場赤裸裸に人描く
斬られ役にも哲学と積み重ね
おれ美男妻美女どちらにも似ぬ子
雀荘で神意の不思議しかと知る
屋根低く貧しい町に神元氣

吹田市 須磨 活恵

新緑に五臓六腑が癒される
花の名にムラサキ式部アツモリ草
野あざみの棘は神様からの武器
少しぐらい騙されてみたい赤ワイン
紫陽花の陰でもらしたひとり言

吹田市 太田 昭

饒舌な男喜劇を演じ切る
口笛を吹く唇で法螺を吹く
父の引いた朱線のあたり古書を読む
休刊日この一日を持て余す
一抹の不安を抱いて封を切る

節くれた指で明日の夢を編む

吹田市 木下 敏子

コーヒーにほぐされてゆく肩の凝り
ワン釦はずし年齢観かれる

翔びたがる靴と帽子が待っている
豆の芽も自由な形で伸びている

高石市 浅野 房子

臆面もなくイケメンが好きと言う

セピア色の過去が時時首を出す

腹の立つ思い出あふれ眠られず

もうあかん思っても匙は投げまへん

束の間も忘れたいのだ本を読む

高槻市 指宿 千枝子

ふるさとの屋根のトンビと久し振り

ふるさとは梅雨よう来たと雨蛙

真夏日に塩辛蜻蛉来て知らせ

省エネへ網戸取付け夏よ来い

名残雪富士に一礼喪の帰り

高槻市 杉本 義昭

さりげない例え話が役に立ち

大仏に向かえば小さき我が心

明日からは花を一杯咲かせよう

春風のような返事をいただいて

妻の愚痴新聞持って遠ざかる

高槻市 乙倉武史

瓢箪から駒阪神と阪急が
好き嫌い言うても夏はやってくる
寒肥に花は華麗に咲き誇り
梅雨じめり積んどく本を漁り読む
妻の墓若鶯の声聴きに

高槻市 西谷治三郎

難聴に彼女の告白聞きとれず
ハローワーク職員はみな超多忙
ネクタイに首締められて社へ急ぐ
内助の功今は夫がボランティア
ボロシャツの茶髪がヘソ出し街を行く

高槻市 井上照子

娘の運転帰った頃に肩が凝る
テーブルに好きなレースと好きな花
友人の出版パーティー全て^{ともし}老齡
落ちこんだ私に温い師の電話
母の忌も笑いと感謝遠い日よ

高槻市 傍島克治

マンションに住んで薄れる四季の感
老醜を確認させた三面鏡
人並みの目標にすら届かない
陰日向あつて人間らしくなり
年金の支えでこらえる土俵際

高槻市 左右田泰雄

自慢げに語る傘寿の懷古談
胸襟を開いて酒を酌み交わす
古き良き時代を偲ぶセピア色
マンネリの暮し可もなく不可もなく
めんどろな葉書は止めてメールする

高槻市 大崎侑子

火傷にはアロエが効くと鉢配り
火傷の手見せてもてなす店屋物
一つだけ取柄探せばタフなこと
飽食の果て礼節も失われ
目の前で一瞬の技掬摸が消え

高槻市 瀧本きよし

花札を持つと本気に膝を立て
紙切れになった株券壁に貼る
エアコンが効く図書館は憩いの場
かくや姫に逢いたくなつて月仰ぐ
介護には笑顔一番効果ある

高槻市 富田美義

雨垂れがボクの神経叩いてる
女房が女に化ける茶の時間
貧乏もここまで来れば売物に
モッタイナイ日本のことば誇りです
大空へ螺旋に上る夏ひばり

高槻市 佐 甲 昭 二

誰からもお誘いのない晴れた空

心当りなくても口がよく滑る

結論を焦り中味を盗まれる

母さんが暮しの知恵を娘に伝え

窓際族社長が知恵を借りにくる

高槻市 執行 稲 子

眉尻の皺そっくりという遺伝

老いてなおライバル意識の空回り

核家族生めよ殖やせよ言われても

あっさりと決めたわかれのお吸いもの

鼓の音聞えて来そう吉野山

豊中市 安 藤 寿美子

ルールよう知らへんけんどトラファン

門口にそうとう飲んだらしい声

歯をみがき髪を洗って今日終る

ありがたや今日も目が覚め足動く

菖蒲園小雨とから傘が似合う

豊中市 吉 田 あずき

新しい帽子を買って夏を待つ

風向きが変り疑い深くなる

科学者の目になって来るゴミ仕分け

椅子の位置変えて頭を切り換える

魂を緑の中でときほぐす

豊中市 江 見 見 清

引き止めて晚めし時がきてしまい

正義感変らぬはずだけど黙る

御無沙汰の言い訳できず御無沙汰す

ワープロに書いてもらった書けぬ文字

人前では喋れないけどしゃべりです

豊中市 藤 井 則 彦

よそ見せぬオンリーワンの逞しさ

ジーパンを殊更破るのもお洒落

見るたびに己を責める子の火傷

ひと呼吸おいたジョークで座が和む

想い出は誰も奪えぬ宝物

豊中市 水 野 黒 兎

バイキング味の記憶がまるでない

人情はローカル線に生き残る

常連の客の素振りにある奢り

待ちぼうけグラスの水溶けるまで

ブランコは入道雲に憧れる

豊中市 岸 田 知香子

三度目の怪我は避けたい神頼み

古い顔待合室に笑みこぼれ

怪我しても安静遠い小商い

我が余生隠居の文字は遠ざかり

差向い此処まで来たら最後まで

豊中市 山門タミ

ホタル火をふかすペランダ気にかかる

餅こねは八十五歳紅襪

梅雨になり主婦業俄然忙しい

よろよと足のもつれに亡夫の声

あの世って宇宙のどこかあるだろう

富田林市 池森子

河童からメダカの機嫌教えられ

最後まで聴かずにそっと金を置き

説き伏せて前後左右を輪の中へ

しなやかに靡く 恋ではないのだが

一人しずかに雨期には雨期の音を聞く

富田林市 大橋鐘造

朝刊を笑顔で読める日を期待

愛一途貴方好みに溶く絵の具

真っ直ぐに生きる男の向こう傷

路地育ち酸いも甘いも知る仲間

有り難い法話が眠りつれてくる

富田林市 中井アキ

お互いの立場あかして友になる

待っている間に雨が降ってくる

瘡蓋を剥がして水子に逢いにゆく

七匹のメダカと昼寝しています

この顔で恋を探しているのです

富田林市 藤田泰子

ご馳走は白いご飯とお漬けもの

日本人ちりめんじゃこでカルシウム

ダイエット恋もしてないのに痩せる

血圧が上がってしまふ待ち時間

口惜しいが歳には勝てぬラブゲーム

寝屋川市 籠島恵子

むかしではないこの川にいた蚩

さよなら三角の歌が聞こえてきそう辻

口約束は無効それならそれでよい

ケイタイに話折られてさようなら

これからは欠けるばかりと昇る月

寝屋川市 坂上高栄

バラの香に酔えば寡黙になる私

ボランティア付き切り世話になりました

俄雨軒借る縁浅からず

原生林人間なんてちっぽけだ

貧富の差世にこれほどの不平等

寝屋川市 富山ルイ子

良いこともまた悲しみも続かない

人と人が解け合う可能性がす

男女とも適齢期などなくなった

肩書きや歳の違いは気にしない

手間ひまをかけた野菜をありがと

寝屋川市 平 松 かすみ

市民検診他人の結果教えられ
血尿に悪玉他人のことでした

マイカーがおニューになって無事祈り

書庫空に頭も軽くなりました

お互いに今日の曜日を確かめる

寝屋川市 太 田 とし子

久し振り笑う臍みた専用車

やるせないレンゲが咲いた休耕田

スーパールとコンビ二頼る独りもの

隣から大好物の口汚し

たかがボール世界の目寄る金が寄る

羽曳野市 吉 川 寿 美

姫だるままるい絵を描き名はまほろ(曾孫誕生)

メルヘンを失くし地球も人も病む

何も通らぬ信号を待つて居る

弾みすぎ悔いております夏帽子

アドリブが一人歩きをして困る

羽曳野市 徳 山 みつこ

土脱いで新玉葱のご登場

里山に年金山というあだ名

素麺で払う暑さと蟠り

夫への爆弾アカンベエに託す

立つ座るひとりでできる有り難さ

羽曳野市 三 好 専 平
サイパンもグアムもいまはレジャーの地
おとなりの防犯灯に睨まれる

下町の空き地に車どつと増え

マスコミも乗せた寵児にひっかかり

介護保険黒い背広に狙われる

羽曳野市 安芸田 泰 子

蹴った席に短気な僕の悔いがある

小細工が利かぬ男のいかり肩

お茶だけで済まぬと知って誘われる

好きですと言えずに消えた遠い恋

何げない言葉の小骨突きささる

羽曳野市 酒 井 一 壺

くよくよとしている割によく太り

長生きを宝と思うしみじみと

挨拶の仕方でわかるお人柄

青絵具一番先に使い切る

折半の退職金で妻ともめ

東大阪市 谷 口 義

ピンチだと気付いていないから昼寝

深海魚春の来たのを知ってるか

恋文を詐欺だと思うことがある

暗黙のルール待合室にあり

消化器のことは何にも分からない

東大阪市 安永春

奈良のルールで寝かせています酒の粕

山見えぬ黄砂邪魔する天気でも

恵み雨みどり豊かに山笑う

足になり優しく支える人と居る

ライセンス取って介護の傘になる

東大阪市 西村哲夫

エリートとエリートの子で迷い道

朝風呂へ風邪気味なのは私だけ

言霊よ迷い道から蘇れ

一人酒構わぬ事も親切

自画像に角の見えるは私だけ

東大阪市 米田水昇

揉み消したつもりでも浮く水面下

空腹の時代なつかし戦中派

煩惱を焼かれる思い火の粉浴び

残り火をかき出し恋の火をともし

現世は面白いから生きられる

東大阪市 北村賢子

夏は来ぬこれ見よがしのキャミソール

出張へ翼の生えたい笑顔

神様はやはりいらした百度石

肥ったんちゃう やせたんちゃうへほつといて

数メートル引率怠ったうれい

東大阪市 笠井欣子

人生の総決算はもつと先

烈夫伝読みつつ一人飲むコーヒ

誕生日親に感謝のお赤飯

ドクターも共に歳取るお付き合い

毎日のユックリズムが板に付く

東大阪市 佐々木満作

螢火に目を奪われて無我の境

白杖の友と語らう散歩道

ひとつまみで料理が生きるかくし味

絶叫マシン乗ったが声も出ぬ恐さ

四万十の悠々たるや舟下り

藤井寺市 高田美代子

タイミングよく余所行きの言葉を使う

母の日父の日リボン上手に演技する

私に値札を付けているらしい

狂うて候花の乱舞の如狂う

画布いっぱい六月の雨を描く

藤井寺市 鈴木いさお

晴耕と雨読と旅と医者通い

ご機嫌は斜め煮付けの味が濃い

うしろから押す人無くて死ぬのやめ

預金残 利率気になる額じゃない

評判とかなり違うぞ新外人

藤井寺市 中島志洋

上には上卒業のない趣味の道

汗流し掴んだ運は離さない

虹の橋渡る勇気のない二人

蟬しぐれ聞いていらいら待ちぼうけ

思い切りやった男の玉の汗

藤井寺市 若松雅枝

許す気になって梅酒で酔ってくる

浴衣縫う母の手許が弾んでる

包丁も針も持たない主婦が増え

メリットを聞くだけ聞いて電話切る

缶ビール亡夫と乾杯したい夜

藤井寺市 楠昭子

欲のない私で呼び良くなる

さりげない労り胸を打つ落ち目

もう一息辛抱せよという家裁

どこもかもネジゆるんだか昨日今日

有頂天他人の意見寄せつけぬ

藤井寺市 鴨谷瑠美子

追伸にすっかりこころ開かれる

花好きも動物好きも思い合い

わたくしのポリシーも黄昏れてゆく

男性に名刺を貰うきこちなく

弁解の口をみつめて上の空

阪南市 森村美花

人間の大きさを見る優し声

信念を貫く人にある魅力

堂々と生きよう残りあとわずか

よちよちが和ませている嫁姑

置いたとことこやったかなひとり言

枚方市 寺川弘一

ローン組む前耐震強度確かめる

借金があるから通らぬ道がある

ヘンシーンでその気になった少年期

恋一つ終わりで着メロ変えました

熟年離婚その後の話聞きたいの

枚方市 海老池洋

河内音頭聞くと手足が動き出す

足るを知るほどに年金貰いたい

叩いたらきつと私も出る埃

知らぬ間に幸福駅を過ぎている

苦労など百も承知の人と添い

枚方市 森本節子

水滴満田植今かと待つ棚田

松江城小雨に濡れて散策す

夕映えの見られなかった穴道湖畔

赤ちゃんがイナバウアーして出て出した

高層ビルエレベーター今点検中

枚方市 安達忠央

なにごととも母は笑つて済ましてた

石段のひとつひとつに祈り込め

ケロイドの悲惨ただいま風化中

恋人のひとつを待ち発車する

ひとりではやはり淋しい縋り戻す

枚方市 宮川珠笑

酒と縁切れと肝臓ガン写真

余命より今日の手術が気にかかり

外泊の許可があちこち電話させ

痛さこらえて笑いの効用聞かされる

おしゃべりの家電に補聴器を外す

枚方市 伊達郁夫

大仏の手のひら俺に向けている

陽だまりの布団に抱かれ春の旅

下り坂ここら辺りで句読点

ニュース見て出し入れして防災具

恋予感する冗談にしておこう

枚方市 二宮山久

梅雨まじか心の準備したためる

再戦に慣れてきたのか良く動く

一杯のお酒が事をなごませる

休日の雨は書斎で趣味の中

軒並べ息子夫婦とカンパイす

枚方市 丹後屋 肇

善男善女奪り合いこする投げ団扇

社保庁が知らせてくれるバースデー

腹ペコの日を懐かしむイモの蔓

衣食住足って不安が絡みつく

お祭りを盛り上げているフラダンス

枚方市 莊司弘之

紫陽花の花しみじみと見つめてる

富士山麓はるかに響くホーホケキョ

弱いなあ僕には無理だ休肝日

妻出かけはつとはするが気も抜ける

午睡して頑張つて観るW杯

箕面市 出口セツ子

優しい子居るから満ちてくるパワー

感謝して見れば輝やき増した日々

何もないことが幸福だと分る

お洒落してフラッと風を吸いに行く

地に足をつけて人間信じきる

守口市 井上桂作

散り急ぐわけではないが花も散る

付きあい良すぎたええ風邪を引き

いい顔だなにかよいことあるらしい

生きることに厳しお金もままならず

観点を変えて人生有意義に

八尾市 宮崎 シマ子

番犬としてのホープに雑種飼う
鬼か仏か三途の川の未来像
転ばぬ先の杖に絡まれ動けない
図書館へ通う一からやり直し
連絡の来ない一人を切り捨てる

八尾市 吉村 一風

邪心みな流すと針に糸通る
頬つぺ押し赤児の笑い誘い出す
読経する蛙に眠気誘われる
くじ運の弱さへちさいまぐれ来る
率直に言われ素直に詫びている

八尾市 山本 宏至

お互いに不満おさえて夫婦です
路地裏で人情深い鬼と棲む
迷わせて憎いあの人知らん顔
胸の線美しすぎる謎がある
省略のきいた言葉で好きになる

八尾市 村上 ミツ子

梅雨寒へ油断を風邪に狙われる
真相がやぶの中から出てこない
ストレスを抱えこんでる几帳面
いざという時頼もしい主婦の勘
迷ったらとうさん星に聞いてみる

八尾市 生嶋 ますみ

母の日に電話もくれぬ拍子抜け
遊び場に児の数ほどの親の数
おかしき噛む力まだまだ少しあり
亡き夫の夢が気になり墓参り
約束はバラの香りの中で逢う

八尾市 長谷川 春蘭

ブラウスの二の腕白き厨梅雨
一匹となりし金魚の永らえる
畦みちにカンバス開く夏帽子
目移りのして夏帽子決まらざる
ソーダ水飲みて汗してまた動く

大阪府 前田 ゆい

障子開け仏に見せる庭の花
挿し木から育ていとしい庭の木々
早起きは三文の得夏至巡る
家売りませんかチラシの無神経
バーゲンで纏めたおしゃれた楽し

大阪府 米澤 俣子

今日よりも若い日はない背をのばす
この後もゴールド免許人生も
聞き足りず言い足りぬまま送る駅
今ここで笑えば許したことになる
アバウトに一日過ごし夕暮れる

大阪府 澤田和重

故里の人情だけは変らない
試着室まず値札みるクセがつき
思ひ出を焼いて未練とサヨウナラ
百歳が目標生きるつもりです
貴重品のよう^にに介護の母を抱く

大阪府 初山隆盛

母の日に叱ってくれる母がいる
かあちゃんと妻に寄せてる母の像
童話から覗くロマンの星月夜
レモンスカツシュ胸の渋滞流れだす
百歳へつなぐ心の旅路かな

大阪府 桑田ゆきの

谷笏聞いてかわらけまた投げる
草笛の鳴る日鳴らぬ日下校道
あじさいの雫が甘い掌に受ける
でで虫のシルクロードかも銀の筋
水茎の墨の香和紙を張り切らす

大阪府 野田栄呼

ゆつくりと飛んでいるのに叩けぬ蚊
二年前試着したのに合わぬ今
小中生以外歩かぬ田舎道
高校へ駅まで送る世の甘さ
問いかけに別にが癖の反抗期

大阪府 林力子

釣り天狗今日も穴場にただひとり
さあ切れと居直りはいる手術室
居直りの病魔と妥協して生きる
うなぎ亭素通りさせぬ腹の虫
幼な子の瞳輝く千歳飴

神戸市 田中章子

ほめ言葉少し元気になるわたし
この顔もリバーシブルにならないか
いやなこと明日に延ばす策を練る
浮かぶ瀬を神様用意してくれる
若者と常識違つていく怖さ

神戸市 山田婦美子

嬉しい事あつて明るイルージュ引く
老鷲のさすがにうまいホーホケキョ
物溢れ真の幸せ感じない
難民の少女にあげたい白い米
見慣れてる景色の中にある死角

神戸市 伊勢田毅

親父似ですぐ正論を吐きたがる
なるようになるからニート増えてゆく
一日に一事専念老いの道
ひっそりと今年も父の日が過ぎる
ナイターのない日休肝日と決める

神戸市 木村 貴代子

開き直っていちかばちかの風に乗る

芦屋市 黒田 能子

入試での一点の差は無限大
失くす物まだ残ってた青い空

おっとりと構え急所をチクチクと

氷山を溶かす私が使う火が

ジャングルを畑に変えて天変地異

神戸市 山口 美穂

鶯の声も描きたい写生帳

植え終えた棚田へ鶯の声渡る

歳のさば上下使いわけている

もの忘れとほけも使いわける古い

万歩計に今日は満点を貰う

神戸市 山口 光久

蒔いた種約束破ることはない

遠くから眺めて視野を広くする

見えずいた世辞でも欲しい朝曇り

噂一つない人だから頼りない

大福を頼張る妻の傍で飲む

相生市 中塚 礎石

だんだんと下座の酒が友を呼び

負け戦忘れたように派手に生き

年金の脛をかじっているニート

定年の肩にあれこれ役がくる

美人だか僕の肌には冷たそう

怪しまず私の料理みな食べる

尼崎市 田辺 鹿太

適当に遊んで健やかに老いる

廃屋に金の成る木が生い茂る

麦めしはいいな故郷の味がする

本当の僕を知るのは自分だけ

気位の高い人ほどよくこける

尼崎市 林 昭三

幸せになれるならばの消費税

悪気なく犬が鳥居にマーキング

ビル風を再開発が連れてくる

末席でメモを取ってる刺客かも

内科医のナース鼻風邪治らない

尼崎市 長浜 美籠

踏ん切りが付かないままに季が巡る

知らないで良かった事もあるこの世

シルバースhirt少し抵抗ある齡

ころには触れないままで以下余白

ネクタイを取ると普通の人である

尼崎市 春城年代

油断ならぬ糠漬に愛注ぐ

老化する頭に教え込む名前

梅雨入りをわが世とばかり蛙鳴く

身辺整理いつまで続くきりもなし

ねむれぬ時は詩とたわむれることにして

尼崎市 春城 武庫坊

八月の風に乗りたいシャボン玉

暦に沿って流されてゆく生命

楽しさを二倍に生きて二人余生

歳をとつても薔薇は真つ赤な花が好き

午後の改札駅員さんも大欠伸

尼崎市 松下比ろ志

久々に旧友と会い飲み過ぎる

時計外してせかずあせらずゆく余生

忘れもの思い出させる明治村

たんぼぼがニツコリ咲いてる無人駅

携帯がうるさい つつじも怒ってる

尼崎市 軸丸勝巳

豊かさの陰にこころの隙間風

夢の中憤怒の仁王街に立つ

苦勞する喜び奪う電子機器

年金の通知は剥がす度に減る

喜ばせ保証はしない美人の湯

伊丹市 山崎君子

はずむ声友の曾孫は双児なり

ジーコジャパン老母の祈りのつづく日々

父の日に亡父のおしゃれを憶う時

聞いちゃった村上節の哀しさよ

来年も老春語ろう同窓会

川西市 西内朋月

何べんも美人に火傷しています

アルコール少しで人格が変わる

ひとりもの三日続いた関東煮

雨降りの一步も出ない日が暮れる

恋人の少し怪しい独り言

川西市 米原雪子

雑草も花つけていて抜きかねる

ていねいに保管されてた不用品

苦しかった昔話を楽しげに

好物を供えて浮かぶ亡夫の顔

腰痛に草花の世話奪われる

三田市 石原歳子

懐かしいもぐさの匂い治療院

故郷がテレビにうつり正座する

母の日に父にもします贈り物

エプロンのままでエプロン探してる

颯爽と歩いて若さアップビール

三田市 堀 正和

アニメ見る孫の解説聞きながら
箱入りの飛鳥美人へシミつける
失敗を例え話として語る
五月晴れホタルの恋へ火をつける
雨三日書斎の酸素薄くなる

三田市 久保田 千代

父の日にがんばらねばと腕を組む
家中の灯が消えている妻の留守
細やかな心遣いが出来る娘に
労りの言葉で気付く子の成長
シャンブー台指の魔術に酔いしれる

三田市 北野 哲男

モナリザは鼻で言い訳聞いている
お断りポストに落とすまで迷い
メモひろげ暗証番号声で押す
待つ訳でないが諦められもせず
肩書が替り人の目も変り

西宮市 井上 松煙

新緑のした古い葉がひっそりと
老いばれたと言つてられない風薫る
何げなく言つた一言十字架に
おっとりと構えてるのも一苦労
コーラスに若やいでいるいい仲間

西宮市 亀岡 哲子

麦茶沸く香の漂うて初夏となる
この町に蛍戻つて来た噂
種蒔きの如雨露に開く夢の花
脳のどこかへ仕舞つたはずの探し物
煮詰めるとふつつ湧いてきた望み

西宮市 門谷 たず子

検査に行くための力を溜めている
亡夫がきて元氣お出しと背を押す
砂時計神が握つた余命表
辛いカレーに残つていた青春
スッピンで歩けぬ眉をしかと書く

西宮市 坪井 孝一

満ち引きの海は決して妥協ない
スタートとゴールに賭けるそのやる気
我慢の字を変換で楽探してる
乾杯が多過ぎテーマはけて来る
今日決めて二合の酒が背を擦る

西宮市 緒方 美津子

車椅子車掌ゆつくり笛を吹く
大事なことは小さな文字で書かれてる
病氣して素直になつた友哀し
女ばかりの旅行が好きになつてきた
髪の高そんなもんと労られ

西宮市 山本義子

兵庫県 大谷幸次郎

ときときは自分に喝を入れ生きる
白い地図生きる証を染めていく
美人の湯まだまだ生きる肌みがく
みなの願いうんうんと聞く百度石
オホホと火の粉かぶらぬ位置にいる

西宮市 片山忠

食べるのが仕事みたいな豚と居る
どうせならタフな男の世話したい
ラブシーン見ては気まずくなる老後
童顔にこころ許したばかりに
ひよっとしてだけを頼りに従いて来た

西宮市 菊池トミエ

何食わぬ顔で火種を置いて去る
観覧車大きく回る点と線
月見草点々と咲く武庫河原
雨の日は雨と話して逆らわず
動かねば明日という日に背かれる

姫路市 古川奮水

目に青葉タタキの鰹大ジョッキ
串鳥賊とビールで吠える甲子園
ケーブルカー席を分け合う丸い背な
高野山土産石楠花今満開
勿体無い癖がだんだん部屋狭し

お付き合い慣れてけじめが量けてくる
シャッターを下ろし看板物言わぬ
カタカナ語憶える先に意味忘れ
味のある顔が埋もれる厚化粧
塩撒きも儀式に候北桜

奈良市 天正千梢

たしかめた絆がぎれて行くテープ
風穴を開けたくなつて旅に出る
子守唄ひとりでうたい気をやすめ
勇み足年貢納める時なのか
灯台の岬はぬくしちちと母

奈良市 米田恭昌

空々しい世辞にも時に癒される
絵空ごととわかっていても好きな人
ふらついても芯は確かな夫婦独楽
脳天気鼻歌うたう崖っ縁
パパ腰痛よせばいいのにイナバウアー

生駒市 飛永ふりこ

引きずらずここでストーンとかぼちゃ割る
湧いてくる汗に負けじと六甲山
そのままを吐き出す灰汁に気が付かず
やまめです骨のみ残る食べっぷり
ポトトタワー恋がまどろむセピア色

檀原市 安土理恵

頼りがいありそう男の首根っこ

あいまいに笑い誤解されている

こそそこそとケータイ罪を匂わせる

ポリシーが無くて目移りくりかえす

古希の恋首にスカーフ捲いて逢う

檀原市 居谷 真理子

休肝日ハッカの飴をもう一つ

マスターの趣味につきあう純喫茶

美しい猫まつさに貰われる

電子音に追いつめられたドライアイ

殻を脱ぐぶざまは美しいぶざま

香芝市 大内 朝子

グーの手をバーに開いて余生かな

はちきんもしょぼくれて来る誕生日

体質遺伝母の喘息今発芽

朗報が笑いの壺を押しに来る

もつたない命の修理怠らず

大和郡山市 坊 農 柳 弘

遠近両用自分の影に蹴つまずく

紫陽花の色褪せさせて蟬しぐれ

イントロの長さで生ビールが渴く

ためらうのは止そう朝顔見てるから

盆参り無沙汰を詫びる草むしり

奈良県 渡辺 富子

青いエール送って燃えたW杯

七色を使い果して朽ちる花

明日デート美人予報土晴れを告げ

清流の蛭へ托す村起し

吉報と駆け込む靴が裏返る

和歌山市 桜井 千秀

イメージ通り頼り無いけど憎め無い

七癖を隠す目線は低くする

粗大ゴミの中にも欲しい物があり

テレビ見ながら新聞読んでパン齧る

追い詰められて悩んで日々の繰り返し

和歌山市 福本 英子

助走してまだ踏み切れぬ高い塀

人間が好きで銭湯通いする

マグカップ少し遠慮が足りないよ

雨降りを祈る黄色いランドセル

高級魚になって鰯が顔出さぬ

和歌山市 木本 朱夏

消臭剤撒いたらアリバイが消えた

安売りのバナナは何か言いたそう

究極の美容食です麦ごはん

フェロモンをまき散らかして桃熟れる

バランスが微妙なバラとかすみ草

和歌山市 田中 みね

表向きいと和やかに隣組
虚栄心みえみえにして鬨斗袋
問答無用おえら様らのなさる事
きく耳を持たぬ恋路が突つ走る
おつとりといらちで続く夫婦仲

和歌山市 玉置 当代

食欲も気力も失せる歯の治療
わたくしも鳥も啄むゆすら梅
今日の雨野良着に嬉し骨休め
上半身支えかねてる膝の骨
やっぱり私世にはばかりと覚悟する

和歌山市 上地 登美代

河童の皿も乾いただらう炎天下
心中で綱引きしてる善と悪
死に神を蹴飛ばし生きる瘦せ蛙
ロボットの影が未来を脅やかす
保護色は緑だけとはかぎらんよ

和歌山市 榎原 公子

朝の涼体内時計から指令
深みどり眼鏡を拭いて背を伸ばす
差し上げて貰って自足する田舎
新ジャガの丸さ手のひらが温い
若いつもの足が楕円を描いている

和歌山市 堀 畑 靖子

新しい法に切り捨てられました
同じ日に旅立ちたいと夫婦箸
バブル以後すがたを見せぬ福の神
藪枯らし一途な愛にある恐れ
山菜を摘んだ木かげが消えている

和歌山市 古久保 和子

もう我慢しないと決めた余命表
ストレスは燃えないゴミの日に捨てる
生活の知恵に見ぬ振り聞かぬ振り
挨拶が他人行儀でこそばゆい
引き出しが乱雑過ぎる物忘れ

和歌山市 山口 三千子

黄昏れて日々無駄にせぬ処方箋
孤立した心に欲しい道しるべ
目の前を横切る蛇に金縛り
親思いの息子も嫁で他人めく
教職を辞めて大学梯子する

和歌山市 楠見 章子

天気図にみえる蕾の断面図
大きいバッグ魔法を拾うかもしれず
手品師の指は口よりよくしゃべる
真剣に話すじんわり汗をかく
ポケットにいつも持つてる四季の歌

和歌山市 武本 碧

無位無冠白さを誇る蕎麦の花

他人から見ればのどかな家族の絵

てのひらで遊ぶカードのなれの果て

善人も時に我慢がほころびる

有頂天に歯止めを掛ける落とし穴

和歌山市 細川 稚代

不可解なニュースばかりが流れてる

見たくない聞きたくないと見ています

肉親の絆気ままが多すぎる

工事現場男の息吹きほとばしる

ボトルキープ君のくせ字がなつかしい

和歌山市 松尾 和香

大地踏み人間陶冶句を捻る

大海の真ん中にある影法師

消しゴムが心豊かにしてくれる

道端に青洲毬ぶ曼陀羅華

緑陰にすべてを包む父の愛

和歌山市 宮本 三喜夫

イランにも政権出来て平和くる

日本では自衛隊等の帰り待つ

悪魔たち前途ある子を殺めてる

情けない詐欺事故絶えぬ日本です

後任の総裁選も揉めそうね

海南市 三宅 保州

台本どおりいかない今日という舞台

打ち上げた花火に映えている浴衣

自責点零でも負けることがある

窓口で借りたメガネがよく見える

鐘一つあつて愉快なのど我慢

海南市 堂上 泰女

夾竹桃が彷彿させる原爆忌

田園に燕返し技冴える

雨のデパート惚れた靴へカード切る

父の日にパッと派手目のシャツ贈る

もろもろのいのちが弾む梅雨晴れ間

鳥取市 有沢 せつ子

憧れた自適へ惚けぬ努力する

夏まつり清めるように通り雨

普段着で行くスーパ―は散歩兼ね

図書館が避暑地のように混んでくる

雑草が元気でじっとしておれぬ

鳥取市 植田 一京

お隣ともう何日も会ってない

恥かいて少し大人になれました

生きて居るしるし年金貰ってる

赤ちゃんの意味不明だが会話でき

都合悪いことは忘れる癖があり

鳥取市 倉 益 一 瑠

口閉めて貝に不満があるらしい
車間距離とつて隣と仲がいい
お隣のアンテナうちの方を向く
七人の敵にもあつた泣きどころ
ピーチクパーチク長寿の秘訣これらしい

鳥取市 下 田 茂登子

頑固さも長所だったと後で知る
銭のこと考えまいと独り言
これからは天に感謝で生きる知恵
値上がりには老いの暮しは行き詰まる
改革は老人殺す手立てかも

鳥取市 土 橋 はるお

合併をしても新鮮味が乏しい
屁理屈を喜び合つて飲んでいる
山裾をはずしず地蔵朝帰り
嬉しくもないが喜ぶ振りをする
タバコ屋の看板娘などいない

鳥取市 土 橋 睦 子

土壇場でいい芝居してくれました
仏壇のメロンが匂い南無の声
山椒をピリピリ効かす酒の具
梅雨入りにバランス崩す重い脚
雨しきり無口な夫といて疲れ

鳥取市 林 露 杖

万緑の山から風す青田風
雨上がり紫陽花彩を整える
微動だにせず白鷺の佇つ青田
鉄線花矢張り単弁濃紫
敬老会十六回目皆勤で

鳥取市 加 藤 茶 人

病んでみて知る妻の良さ下の世話
溝埋める子が誤算にも反抗期
頬ずりに髭の痛さと血の温み
結局は偏食しないのが薬
あんたもか俺もあれそれの老い

鳥取市 福 西 茶 子

雑草に負けたか花芽顔出さぬ
正論を吐いて逃げ場のない迷路
椅子取りゲーム男と競うときもある
背を向ける子は駄々っ子か自立期か
オーバーに笑つて明日の糧とする

鳥取市 田 村 邦 昭

ほろ酔いに本音も少し酔っている
折り折りに包丁使う夫となり
あの頃をしつかり覚えた痴呆症
いい事も時は刻んで過去にする
日の丸を見ればやつぱり日本人

鳥取市 杉本孝男

腰痛も加齢と軽くあしらわれ
新入社紺のスーツの背な競う
あいさつのつば心得た若社長
かん虫に母のお灸はズバリ効く
金かけた割にはとろいジャイアンツ

鳥取市 西川和子

大病も無くて嬉しい五十年
合格の報せにその先を案じ
新鮮な風に出合った交流会
無免許だから荷物担いでバスに乗る
仏さま今年もキュウリ生りました

鳥取市 録沢風花

籠を出た鳥販やかなバスツアー
よく食べて笑い疲れて主婦忘れ
新緑の森で聞こえたほととぎす
笑いぐすり少し寿命も皺ものび
日帰りのツアーに疲れ老いを知る

鳥取市 春木圭一郎

他者の目で自分の姿じつと見る
豊かさにもつたいないを忘れまい
自然体ひとをもてなす極意かも
どうせやることなら喜々とやることだ
できるなら好きなことだけ追いかける

鳥取市 富山檳榔樹

せせらぎに河鹿の美声湯の薫り
何時の世も飲む打つ買うは変らない
呼び水で忘れた過去を取り戻す
出た釘が打たれて気づくもどかしさ
箱入りの看板娘完熟す

鳥取市 夏目一粋

僕いつも空洞で息してる竹
変わりゆく街に燕も巣を探す
言い訳はしないがスベア持つている
酒のめば人の真価はすぐ解かる
魂をたまに息抜きさせている

鳥取市 岸本章

口数が過ぎた分だけほろが出る
算数の勉強になる回り寿司
余るはずなのに薬また余り
社長室のように娘の部屋ノックする
誇るものないが貧乏には強い

鳥取市 岸本章

太陽を拝むころを忘れてる
甘くみた駐車違反のつけに泣く
忘れたら困ることから忘れてる
平凡でいいと言いつつ欲を盛る
三世代ときどき空気薄くなる

鳥取市 奥谷彩子

漁火と夕陽に染まる深海魚
婦唱夫隨時々きしむ我が家憲
情報の海で三角波に会う
母も逝きふる里の風他人めく
成功をねたみ梯子を外される

鳥取市 西村黙光

救急車が野次馬根性揺り起こす
自分史に毎晩飲むと書いている
方言の電話の親友も呆け模様
断酒して一氣に増えた物忘れ
呆けるぞとケラケラ笑うワンカップ

鳥取市 福田登美

貧しくも恐いものなし八十路坂
生きるため愛のかけらを抱いている
線引きの内で静かに夢を追う
ひまわりの精氣をもらい夏を生き
約束があるから弾む夏の服

鳥取市 永原昌鼓

達人の鼻が銘酒を嗅ぎ分ける
忙しい時に電話のコマーシャル
汗かいた人は知ってる銭の価値
ウォーキング車で見えぬ街が見え
リフォームのできぬ脳ミソもてあます

鳥取市 中村金祥

還暦へやつと親父の顔になる
達人と思うと穴に落っこちる
新米のパパも異変は見逃さぬ
幸せの尺度合わせて歩き出す
更年期妻の異変について行く

鳥取市 吉田弘子

また謝罪資本社会のひずみ見る
雑収入三円と書く決算書
低金利中流意識変えてゆく
祝儀より喪袋出番多過ぎて
一生は差し引きゼロで逝くものと

鳥取市 平尾菜美

咲くまでが我慢と花のひとり言
むなしさを乗り切る一人旅に出る
受けて立つ試練神様ありがとう
遣伝子が静かに燃える人の性
老いてなお胸に小波たやさない

鳥取市 山本益子

耳栓は勝手な道具滑稽だ
嫁ぐ荷の番傘今も永らえる
いたずら風に花鯉節踊り出る
プライドの顔が邪魔するクラス会
日本へ黄砂の旅はふらり来る

鳥取市 宮 脇 道 子

現代っ子ハウスで育ち根が浅い
笑うだけ笑って後に泣きました
泣きの波次々に寄せ今一人
寄せ植えに押された花が小さく咲く
朝晴れに騙され帰り濡れ鼠

鳥取市 福 永 ひかり

大安日ジャンボ売り場は忙しい
青春をフォークソングで取り戻す
食後吸う一本だからお目こぼし
晴天にいくらあっても足りぬ竿
何をしに來たんだつくとまた止まる

鳥取市 福 島 庸 二

いま我慢最後に笑う時のため
澄みきった夜に輝く月笑う
喜びが五線譜上を飛び跳ねる
人柄の良さを数値で測りたい
雨あがり渡って見たい虹の橋

鳥取市 武 田 帆 雀

鉢洗うのの字8の字書きながら
猫の手も借りたい道を聖書売り
そうだそうだと加勢する人がいる
銭じゃないそう言いながら銭でケリ
一ツだと言って三ツも下さった

鳥取市 近 藤 佳 子

友見舞うことば選びに疲れます
お人よしすぐに本心晒けだす
華のある友の便りに癒される
梅雨どきはゆっくり部品修理する
明日吾が身全身で大きく愚痴ばなし

倉吉市 猪 川 由美子

若者言葉へ再翻訳の辞書が要る
切り換え下手で一人相撲を取っている
天候異変地球が微熱悲鳴上げ
拘置所もダイエットにはなるらしい
拉致家族閣僚よりも有名に

倉吉市 松 本 よしえ

残り苗一本おまけして貰う
子の家へ三度乗り替えやつと着く
水飲んで水を汚して生きている
パパお父う親父と進化した我が子
冷蔵庫いつでもビール冷えている

倉吉市 最 上 和 枝

角番の最負力士が寄り切った
ほんやりと麻酔が醒めて陽が笑う
風船をつけば平和な音がする
一言が過ぎて冷水ぶつかぶる
日本晴洗濯好きが胸を張る

倉吉市 山中 康子

米子市 政岡 日枝子

機嫌よいことばに油断してしまふ
川柳塔わたしを替えたいのちです
美白ケア女の性か燃えてくる
川柳に吐いてよろこび湧いてくる
一言で愛憎やおら二分する

倉吉市 米田 幸子

百年の時を刻んだ古時計
子も巢立ち今が夫婦の匂らしい
膝の皿がぐく笑う昨日今日
受け皿が小さくて愛が盛り切れぬ
晴れ着きて天国行きの船を待つ

倉吉市 山本 玲子

百葉の長と信じて一万歩
老人ホーム終の住み処と決めて楽
好きな物ばかり食べて骨粗鬆
知らず知らず歴史ひもとく漫画本

トマト大好き三度のごはんよりも好き
倉吉市 牧野 芳光

気がつけば私を睨む畳の目
レストランの母娘寂しい目をしてる
出し惜しみする訳でない出てこない
大怪我はないが生傷絶えませぬ
垣低くすると人間見えてくる

にんじんの彩を大事に煮含める
うっかりと呑んだら毒になる薬
門壊す父祖の足跡消すように
まとめた縄が私の手許から緩む
漁の朝男の華が見せる意気

米子市 門脇 晶子

隣の猫に屋根の上からにらまれる
病氣して近頃無口で過します
私の腰を伸ばしてくれよ飛行雲
痛みの底に居座っている無言劇
どの彩も僕の歳から逃げ出した

米子市 白根 ふみ

健やかに進め菖蒲湯かけ散らす
一周忌みな坦坦と語り合う
喫煙車あわてて逃げる禁煙車
来年をねらうたつぷりお札肥
ヒルズの塔も砂上の楼閣となった

米子市 青戸 田鶴

スマートな総理に似合うクールビズ
いつまでも愛されている背番号3
イベントには体力不足不参加に
母とさよならふりむかないで帰り道
ブナ林も雑木林も雨の中

米子市 永井美津子

高だかと皿に盛ってる老いの愚痴
見張りかね祖母の散歩は下校時に
騒ぐ子の親はのんびり試食中
砂浜に寡婦の涙は埋めておく
おばちゃんのお尻に弾き飛ばされる

米子市 木村春枝

眼裏にほろりの話綴じ込めて
三角波今日は機嫌の悪い海
終の日まで宿題尽きぬ白い道
花いじりストレス土に癒やされる
刻まれた月日の重さ皺の数

米子市 野坂なみ

三度目の正直チャンス物にする
少子化で逆三角が加速する
老母に今さし上げるのは三重丸
白い飯さらにブランド選っている
いらだちの足が白線越えたる

米子市 澤田千春

白い皿祭りの夜を盛り上げる
勿体なや世界遺産も天災に
その昔住んでた家をのぞきこむ
綿雲が笑い話と降りてきた
ねじ巻けばほろり回るよ走馬灯

米子市 林瑞枝

泣きに來た浜で一会の風に会う
バラの艶一時の修羅は避けられぬ
悠久の海の砂にもある戦
針持たぬ蜂はお洒落な眉を持つ
シャボン玉翔んで小鳥の毬になる

米子市 中井ゆき

春花壇かたづけしんどの夢のあと
ケロケロと蛙鳴くから夏になる
母の日に母という字をかいている
あごひげがなければきつと好きになる
さびついた刃物もこわいものを持つ

鳥取県 谷口次男

素晴らしい日本語嫌いかタカナ語
地球からはみ出て喫うかタバコ好き
根っこには民族守る血の契り
犬吠を蛙蟪のごと船が行く
無責任言論のゴミ放置する

鳥取県 山本正光

幸せと思える風に吹かれてる
余生まだ燃やす火種をくすぶらす
伏兵が足をすくった設計図
花回廊花百態に引き込まれ
じいさんと言われた店に行く気ない

鳥取県 深田 俱久

早乙女と田植囃子の献穀庭

五月晴れ台風情報追って見る

庭木の名問えば知らぬと従業員

年金は並で格差気にしない

高齢化余生は卒寿からと決め

鳥取県 竹 信 照 彦

機械化の田んぼ人手はボランテア

海も川も稚魚を放流して捕獲

乱獲と赤潮魚も少子化だ

玉葱が苗百本で百個でき

虫除けを塗って木陰で涼をとる

鳥取県 澤 裕 子

確実に時を刻んでいる地球

夢ばかり追って明日が掴めない

ぬるま湯に溺れニートの根が育つ

縄張りをめぐり竹島揺れている

一杯のつもりに歯止め掛からない

鳥取県 太 田 幸 枝

電話から孫懐妊のはずむ声

レントゲン骨異状無しほっとする

しずしずと入った嫁にいじめられ

紙風船富山葉と共に来る

新鮮な野菜欲しくて野良に出る

鳥取県 石 谷 美恵子

縛られて見たいやさしいひとの縄

縄電車やがてひとりになる運命

あのひとの何処が好きかと聞く愚問

リハビリもできない病姉の足さする

妻と母演じて今日を刻み終え

鳥取県 山 下 節 子

子はニート親はせつせと共稼ぎ

私の七癖孫が気付かせる

達人と聞けば見る目も変わります

少子化とニートお国が減びます

選ばれて貫禄ついた世界遺産

鳥取県 盛 田 夢 路

どうしても此処が好きだとつばめの巢

ライバルが居るから今日も頑張れる

深緑に応援されてまわり道

お浄土に行く日の笑顔工夫中

玄関のシンビジュームが友を呼び

鳥取県 佐 伯 や え

おとぎり草無人駅にも生けておく

思いがけないササユリ夢のまた夢か

絶滅のササユリもらいねむれない

亡妹がにこっと笑う花しようぶ

夏椿咲いていもうと初の盆

鳥取県 蔵本悦子

ざりざりの所で女強くなる
両方に悪い笑ってごまかそう
若葉風思いが全部叶いそう
風鈴がいきなり夏を連れて来る
夏だ夏妻がいきなり走り出す

松江市 三島 松丘

子育てに励む娘へ応援歌
頷いてあげるしかない他人の妻
のらくろを読んで昭和の子に戻り
台本の僕はピエロの役ばかり
見栄捨てて断わる勇氣やつと持ち

松江市 津川 紫晃

噂なら自然に消えていった風
背を押されほどよい風に乗せられる
独りじゃないこんなに広い空がある
人間が好きで愛され裏切られ
切り出せぬ言葉をペンに語らせる

松江市 佐野木 みえ

身の丈を知つてのうぜんかずら咲く
紅いバラどこで咲いても主役です
等身大になつて生きようこれからは
ゴーヤの苗楽しみ一つ増してくれ
比叡山観光バスに娘と座る

松江市 安食友子

富士額持て持ての頃あつたらに
抽斗に甘酸っぱい秘密隠してた
何時も絶やさぬにこには魔法だね
亡き兄と四国の丘で出雲弁
誇らないだから好きなの燻し銀

松江市 小川 注湖

卒業式胸に見せない夢がある
追っかけ合つた幼な娘がまだ夢に
僕の夢もう捨てました低金利
財布にはカード社会がいっぱいだ
皺の中惚れたえくぼはまだ確か

松江市 川本 畔

六月の風に会いたく裏の露地
青梅の話などしてティータイム
扇風機出して調子を確かめる
六月も残りわずかな仕舞風呂
露地ものを手にとつてみる店の先

松江市 松本 知恵子

飛魚の羽根の薄さよ初夏になる
蛍とぶりはロマンを見続ける
雲行きをメールしてくる雨蛙
咲き揃うさつき残して家売られ
バラが咲く季節だロマン語ろうか

出雲市 持田多輝子

見栄捨てて節目を一つ脱皮する
現実と夢のはざまにあるドラマ
行革は永田町からしてほしい
介護法浮世の風がきつくなる
ストレスを百円シヨップへ捨てにゆく

出雲市 園山多賀子

善人にされて笑顔が絶やせない
独り居て独り笑いが身について
五七五卒寿に充電しています
味噌汁が少し大仰自己主張
白黒をつけると風も他人めく

出雲市 石倉美佐子

夕焼けの赤からもうエネルギー
ときどきは背筋を伸ばし空を見る
雨の日は言訳ばかり右の足
ともすれば先に出たがる左足
嬉しいと唄も踊りも弾んでる

出雲市 小玉満江

酢の物を毎日食べて百願う
縁側で養生訓を読んでいる
やんちゃ子が一番可愛いおばあちゃん
田が消えて蛙の声がしなくなり
びらびらがいっぱいいてる婦人服

出雲市 小白金房子

泥んこの感触はしゃぐ子の田植
棚田風頬吹き抜ける五月晴れ
段どりをこなす農婦の太い指
田植すみ洒落る農家の泥おとし
手放した田圃わびしく鳴く蛙

出雲市 小豆澤歌子

黄昏れて未だ試練の道続く
過去の糸捲ると纏れ出すばかり
拘って意地を通した花鋏
気配りのあなたの杖は温かい
誰を待つ橋に止まっているトンボ

出雲市 岸桂子

虫食いの野菜は毒のない証
いい事があると書きたくなる便り
割り勘が難しくなる消費税
花の寺妻ある人と道連れに
成り行きを心得て打つ句読点

出雲市 多久和敬子

言い訳がじょうずになって飛んでいる
主婦の椅子ちよつぱり自信欠けて来た
記念樹に守られ登る六十路坂
ほどほどにバランスとって妻の位置
帽子好きまたまた帽子買い求め

出雲市 伊藤玲子

髪梳いてチャンス来るのを待っている
ひらめいて太陽さんに投げキッス
元気に感謝金はそのこあればいい
スターだと思ひ込んでるオムライス
晚餐は数か国語で賑やかに

出雲市 森茂美

ごろ寝する父の背中が疲れてる
元気づける材料何も持っていない
君が代と愛国心を天秤に
廃屋をもう筈が攻めている
おにぎりを矢印通り破ってる

雲南市 毛利幸

山菜の苦味ほんのり舌に乗る
大空を見上げ大きく毒を吐く
上下線駅のホームが運を決め
裏通り赤いのれんが手で招く
どうしても和む話に耳が向く

島根県 伊藤寿美

寝返ってみても独りの昏い部屋
これからは独りで生きたる米洗う
菜の花の海をすいすい行く白髪
手放した蜚が渡る川の幅
麦の秋逢ってみたいな原節子

岡山市 井上柳五郎

深緑が音たてるよう伸びている
他所行きに破れジーンズ派手に着る
気楽さと淋しさ老いに交又する
念仏を唱え祈りを深くする
幸せは四季それぞれの庭の花

倉敷市 撰喜子

夫婦茶碗大きいほうを妻が食べ
兵の夢故郷へ続く虹を織る
割り勘の酒宴ピッチあげて飲む
森消えて偽装団地が建ち並ぶ
いつも聞く妻の繰り言子守唄

真庭市 福岡智恵子

ナスキュウリ青空市に初夏が来る
不揃いの採り立てキュウリ幸もらう
菜園の出来語り合う市場籠
古民家の囲炉裏人氣の喫茶店
かけ声にしぶしぶ動く膝頭

真庭市 国米きくゑ

残り火を燃やし陽気な老母である
残り火に熱いエールが点火する
野の花に勇気を貰うシルバークー
私の体温で書く一行詩
美しい言葉の裏にある妬心

美作市 大石 あすなろ

住所録思い出多い人が住む
啄木と同じ思いで握る砂

少年の汗は日向の匂いする

クールビズ笑顔で夏を闊歩する

メール打つ無骨な指がもどかしい

美作市 小林 妻 子

おばあさん野菜と話しています

どの道を行ってもプロという世界

騙されてやろう奇麗な嘘だから

散歩道また遠回りする当てがある

鼻柱時どき折った方がよい

美作市 福原 悦子

追憶の千人針という重み

他人同士寄り添うてから花も咲く

判捺せば他人の顔となる別れ

この坂も折り折り脛が嫌と言う

遠回り二人の余韻帰り道

美作市 山本 玉恵

沸点はまだこれからと花の彩

空っぽの頭を時流の風荒れて

むらさきの雨しつとりと管楽器

一匹の蛭がふわり客となり

呆けないようにペンを座右の友として

第16回「太平記の里」

全国川柳大会開催要項

主催 太田市・太田市行政管理公社・太田市川柳協会

後援 太田市教育委員会・（社）全日本川柳協会 他

日時 十一月十九日（日） 9時半から 締切11時半

会場 太田市福祉会館（TEL0276-4518291）
東武鉄道伊勢崎線太田駅南口下車徒歩10分

第一部（当日参加の部）

課題及び選者・各題二句詠とし表現方法自由（但し新作）

「自惚れ」今川 乱魚・「裏」川俣 喜猿

「群れる」竹本瓢太郎・「要」萩原 柳絮

「活気」成田 孤舟・「合併」田中寿々夢

「夢」太田紀伊子・「メール」てじま 晚秋

特別課題「傘」羽田 桐柳

参加費 三千円（昼食・記念品・発表誌共）

宿題 「希望」

選者 斎藤 大雄北海道 大野 風柳新潟

西来 みわ（東京）河内 天笑大阪

磯野いさむ（大阪）本田 智彦大阪

小松原爽介（兵庫）吉岡 龍城熊本

応募方法 二句詠・参加費一千元を添え郵送

第一部、第二部の特選句中最優秀句の句碑建立

前夜祭（五千円）出席・宿泊の方は申し込み下さい

締切 九月二十九日（金）当日消印有効

投句・申込 〒373-0851 太田市飯田町818 太田市民会館

「太平記の里」川柳大会事務局（TEL0276-4518291）

川柳塔の

川柳讃歌 ②①

木津川

計

愛の讃歌うたつて愛に恵まれぬ

浅野 房子

どなたの句でしたか、「王将を歌い倒して歩のまんま」に僕は胸が詰まったのです。いままたへあなたの燃える手でわたしを抱きしめて……、「愛の讃歌」を歌い続けて不運の房子さん（う）に僕は同情を禁じ得ません。ですが、今すれば花は咲き、歌えば愛は叶うと信じています。おーい、と僕は男性に呼びかけます。房子さんが歌うてるぞおー。

老いらくの恋には戀の字が似合う

傍島 克治

かつては霧の倫敦、花の巴里でしたね。戀という字を分解したら、いと（糸）しいとしと言う心の純情が、当節は亦（股）心に転落したのです。新しさばかりに何のよさがありません。一階（貝）の女が気（木）にかかると櫻でしたのに、ツよい（強い）女に気（木）つけやの桜になりますと余情が一切な

いのです。克治さんに僕も賛成です。

人の名を思い出せずにアイウエオ

藤井 則彦

ついこの間も講演会場で、著名な写真家の名前が出てこそ、「筑豊の子」を撮った方どなたでしたかなあ」と聴き手に問いますと会場から「土門拳です」に助けられました。

真正面の熟知している方の名前を忘れ、アイウエオ……、あつ岡田さんや、そんなことが何を隠そうちよいちよいあるのです。則彦さんの人知れずの苦悶がよく分ります。

善人と信じているからやりにくい

三好 專平

專平さんが相手を善人と信じているのではありません。相手が專平さんを善人と信じているのです。皆さん、大きな声では言えませんが、專平さんは悪人（これは言い過ぎです）ではありませんが、善人でもないのです。が善人らしく振る舞わねばなりませんから、つらいですなあ。ここは專平さん、どこまでも善人を演じてあげて下さい。

鍵穴の視野で中流意識持つ

菊地 政勝

「中流九割」が崩れつつある昨今といふ条、まだ多くは「中流」と言い張るのです。テレビにクーラーにマイカーもあると中流と思え

るのです。すると政府は安心して住民税に所得税、国保料などを大幅に引上げ、五万や六万円の負担がなんだ、中流ではないか、と言う訳です。「中流」を自認するほど私たちの暮らしては貧しくなると覚悟することです。

貧乏も不運も格差のせいにする

板東 倫子

正確に言いますと、貧乏も不運も「自己責任」によって生じた格差、あるいは「信心が足りない」故の負け組なのです。貧乏や不運の原因はお前にあるのだ、と決めつけられますと、誠実に真面目に働いてきてリストラされた、残業が積み重なって病気になるっても何一つ文句は言えません。倫子さん、弱者に冷たい世の中になりましたね。

私のまが一句になる不思議

正畑 半覚

いや半覚さん、不思議でも何でもありません。さらけ出してこそ名句は生まれるのです。橋高薫風さんには含羞の美学がありましたから抑制が働いていました。が西尾菜さんは信望を集めた方にしてありのままを詠まれて名吟を残されました。「意見する儂がまだまだ遊びたし」「噂でよろしおましたなあ」と妻信じ。ええ格好しは川柳を誦めるべし、です。

《上方芸能》誌代表

自選集

仁部四郎

ぎつしりと星座あそこに古い恋
アポロ号飛び越しちゃった天の川
質問を残し昨夜の流れ星
誉めあげて育てたくにの二等星
北斗星だけなら闇夜でも指せる

波多野五楽庵

哀しみという名の手紙着きました
八月の絵を抜け出して来た蜻蛉
鳳仙花癒しきれないことがある
津軽弁だって話せる地蔵さま
一生の運を嘆いているカラス

芳地狸村

あんな人嫌いと言つて好いてはる
隣から植木バサミの冴えた音
留守宅とはつきり判る回覧板
船体のきずで争う海の事故
大川の夜を彩る祭り船

宮口笛生

中毒で満足してゐるうまい酒
三十度突破冷酒を所望する
汗に汗重ねるビール冷えている
田植えすみ雨喜びという行事
農家には農家の行事ハンゲシヨウ

宮西弥生

ときどきは鍔を洗いに行く波止場
約束をつめたカバンと梅雨晴間
千ドルの夜景大阪神戸にも
もやもやが邪魔して夕陽くもらせる
身のまわりきれいにしすぎ探しもの

森下愛論

かたくなな心へ自問自答する
つかの間の嘘を笑顔で応じられ
とんちんかん誤解させてる返事する
反省の色も薄れて飲み歩き
人の世の裏を眺めて自戒する

八木千代

空を見上げて今日のこの靴似合いそう
五本指の靴下 意志を持つてくる
不具合で塩漬けにしたままの靴
分身のように馴染んできたシューズ
足を揉む どうぞ明日もよろしくね

八十田 洞庵

板尾 岳人

太陽にそむく鬼火がそこかしこ

行き行きて明日また会おう古い二人

古い先のわが地図ひらく里山で

転び傷つけて坂道まだ続く

日めくりも瘦せて怖い冬が来る

両川 洋々

奥田 みつ子

敵も味方も花も無口でいる通夜だ

回れ右するな憲法九条よ

隠すから秘密こぼれてばかりいる

雷鳴は僕の葬送曲だろう

黙りこむ農夫よ君も離農かい

阿 萬 萬 的

河井 庸 佑

世界遺産驚く先人達の知恵

昔はと愚痴が飛び出す老夫婦

脳軟化かも知れないと笑い合い

買いかぶりされて照れてる老いの坂

駄目もとで叩いて見たい道もある

石川 侃流洞

木村 あきら

女にも度胸幾多の修羅がある

儲け一番打つ手へ不協和音を聞く

平凡な暮らしが続く酒二合

メシフロネル亭主が帰る靴の音

サインコサイン曲尺秘めた裏表

噴火した石はお国の宝物（岩木山縦走）

目の前に来るまで熊を待つ明治（マタギ）

見上げれば倅せそうな水の精（立又溪谷第一滝）

雪渓を過ぎると逢えるゴゼンソウ（森吉山）

長男の笑い通じる日本語で（コダツクシアター出演）

目の前に居るのに心届かない

知ることの怖さバタンと本閉じる

梅雨空にゆったり構えチャンス待つ

喉鳴らし麦茶で憩う夏の午後

ピンチはチャンスきつと良いこと巡り来る

明日のため今日は妥協と腹を決め

先入観持ち冷静な目が迷う

無理をして痛みぼちぼちくるも年齢

雑兵の力を甘く見て誤算

順風に弾む心を引き締める

武蔵 大和 魚礁となつて幕となる（大戦回顧五題）

幕引きにキノコ雲とは情けない

片道燃料で作戦に出す上司

竹槍の国へ原爆降ってくる

松からも生き血を抜いた負け戦

小島蘭幸

おふくろに歯がない点滴が落ちる
おふくろさんの歯が置いてある白い部屋
そんなに妻に礼を言うなよおふくろよ
手術後の声が弾んでくる電話
サウスポーだったおふくろさんの詩

小西雄々

袈裟切りの林に咲いた花を摘む
ささやかな遊び温泉宿へ着く
引きずった五欲へ暗い橋渡る
トラキチと思う帽子と意気が合う
腹割って話せる友が減る同期

小林由多香

居酒屋へ傘を返しに行つて飲み
よく釣れるうわさの通りよく釣れた
ラブレター心やさしい人らしい
よく研げた刃物が不気味にも見える
にわか雨郵便物が濡れて着き

斉藤 姦

道草の話が弾むよもぎ餅
心から笑ってるなあ子の瞳
摘果するりんごの言い訳聞きながら
ドレミファの音符目覚めてくる大地
爽やかな一日だった鍬洗う

塩満敏

生かされて一歩一歩を踏みしめる
傑作は良い嫁はんをもつたこと
九条を地球の宝にしませんか
母が死に古里便はもう来ない
五十年吸ったタバコにお別れす

新家完司

金のことなど考えず飲んでいる
酒の害わかつています知っています
芋焼酎も麦焼酎も欠かさない
芋か麦か迷う楽しい時間帯
焼酎は血栓溶かすらしいです

田中正坊

生きているお釣り人生八十四
八十四初めて見えたものがある
体力も気力 知力も八十四
何できぬより何でできるかで生きて行く
くよくよするな明日もまた日は昇る

玉置重人

ありがとう平均寿命越えました
しっかりと耐えてしっかりと伸びてゆく
富士の旅何枚富士を撮ったやら
生きてます診察券がまたふえる
人相を修正したい免許証

日曜の朝も静かな過疎の街
八十路坂今更姿勢言われても
退け時を考えている手も足も
足跡はもう振り向かぬ昼の月
もう何も言い訳などはせぬ背骨
ツーカーの友ふところのワンカップ
カーナビという便利さが腑におちぬ
ベテランの眼にボス猿と勲章と
平均の神秘宇宙の星巡る
明日の夢でよければ一つあげましょう

幸せになろう夕焼け雲の下
笑つたら奇跡が起るかも知れぬ
浮くよりも静かに沈む情けあり
真実を照らして月が美しい
鈴虫の雌は雄より強かった
昭和まだ重く引きずる十八年
生き恥が強い味方でいてくれる
まだともう老いの距離感掴めない
他人様わたしを値踏みしてくれる
チヨイ悪オヤジ甘いも酸いも心得る

恒 松 町 紅
遠 山 可 住
土 橋 螢
西 出 楓 楽

第20回 堺市民芸術祭川柳大会

と き 9月10日(日) 12時開場
ところ 堺市立母文化会館 3階第一講座室
堺市南区桃山台2丁2番1号
TEL 072-296-0015
(泉北高速鉄道・とが美木多駅3分)

おはなし 「川柳 西ひがし」 中田たつお
宿題と選者 「ゆるむ」 板野 美子 選
(50音順) 「発 見」 荻野 浩子 選
「巡 る」 鴨谷瑠美子 選
「空 気」 河内 天笑 選
「どうせ」 北川アキラ 選
「手応え」 日野 愿 選
「ギャグ」 三好 聖水 選

席題なし・各題2句・締め切り13時

出句料 1,000円(作品集、参加賞呈)

賞 各題秀句に呈賞

主 催 堺市文化団体連絡協議会

後 援 堺市・堺市文化振興財団

連絡先 堺川柳協会

〒593-8305 堺市西区堀上緑町2丁16-3
河内天笑方 TEL・FAX 072-278-4706

第4回おかやま県民文化祭協賛 第58回 西日本川柳大会

と き 9月3日(日) 9時30分開場
ところ 岡山県久米郡久米南町下弓削
久米南町文化センター

第1部 締め切りました

第2部 11時30分締め切り

「欲」(岡山)西原 知里 選
「歌」(鳥取)新家 完司 選
「微笑」(神戸)赤井 花城 選
「踏む」(神戸)平山 繁夫 選
「宝」(堺)河内 天笑 選
特別課題・当日発表 恒弘 衛山 選

参加費 2000円(昼食・発表誌・参加賞呈)

表彰 1部・2部とも総合成績で10位まで
川柳祭 (前夜祭) 9月2日 18時～
町内各種団体の出店と出し物

宿泊 「ホテルアルファワン」津山駅前
シングル 6100円 申し込み 8月10日まで
電話 0867-28-2459 (奇童)

主 催 弓削川柳社

後 援 岡山県・久米南町ほか

水煙砂

板尾 岳人 選

横浜市 川島 良子

条件は揃ってるのにお断わり

ボツとしているから僕に合っている

カタログに誘惑される旅プラン

疲れます潔癖症で几帳面

疑問点今夜は眠れなさそうだ

梅雨晴れ間濡れたところを天日干し

神戸市 両川 無限

浮き浮きと出掛ける妻の好奇心

ときどきは子供のハートノックする

正論が最後はいつも宙に浮く

愚痴ひとつ言わぬ親父の力瘤

選択肢無限にあつてまだニート

プライドが男の靴を光らせる

八尾市 脇 俊子

爪切つてまあるく時を収めてる

紫陽花の七変化には負ける古希

満点にならないけれど心風ぐ

雲行きの反応みてる蟻の群れ

大の字になつて雲追い好きと言う

一本のペンは自在に恋語る

和歌山市 土屋 起世子

泣き場所はやっぱり母の膝がよい

表より裏地が立派粋な人

寄り添うていれば渡れるような川

フルムーン約束ばかりして過す

酒たばこやめよと妻は角を出す

新婚に戻りおかずの味を褒め

浜松市 杉浦 恵夢

万華鏡少女が蝶になつた朝

ワイシャツの隣に胸の憂さを干す

もつれあうころのままに洗濯機

離婚ドラマじりじり夫寄つてくる

シャッター街風がノックをするばかり

闇の底眼は万物の色を見る

東かがわ市 赤澤 貞月

野良仕事蛙にキスをされました
残す金無いなら無いで楽しもう

一ひらの桜に賭けた春も終え

株価にも慌てることの無い所帯

ジャンケンで何時も負けてるバーを出す

東かがわ市 向山 治延

中尊寺詣り芭蕉の句を思い

風鈴の鳴る音が止り暑さ増す

鳴くせみの声湧くごとく盛上り

天災も戦災も見た皆あわれ

足腰は弱って居ても口達者

東かがわ市 中塚 寿々女

虎刈りに腕白盛りの傷を見る

腕相撲孫には力出し切れず

再就職の差し出す新帽子

ひと粒の種が天地を伸直り

母日よりメッキリ追伸多くなり

今治市 塩路 よしみ

懺悔しても時間は戻るわけでない

言い分はあるが黙って目をつむる

平凡な暮しの中の陰と陽

幸せは頬杖ついている無心

切り花にいのち吹き込む愛がある

今治市 渡邊 伊津志

魔を払う願いがこもる鈴の音

巡礼の土になりたい鈴を振る

鈴と杖母の形見の遍路笠

巡拝の心安らぐ鈴の音

遍路旅大師と共に鈴を振る

大洲市 花岡 順子

もやもやと答えの出ない日を過ごす

愛一途八百屋お七の持つ狂気

火中の栗を猫に拾わせたりしない

二番手のままでゴールが見えてくる

凸凹をならすと味のない子供

香南市 桑名 孝雄

禁制札弁護士ごっこ株ごっこ

物騒な世の中負けてなるものか

朝市で痛風の素買い漁る

雑草の言い訳僕は容赦せぬ

拝啓から敬具へ詰めてある律儀

香南市 近森 功

裏道に回って拾う今日の幸

頂上が見えて夫婦の歩がそろい

百葉の長と言うから飲んでい

もう駄目だなにが駄目だか大ジョッキ

痴呆症財布の紐ははなさない

香南市 百田 幸

宮崎市 串間 安子

若葉萌ゆわたしも少し萌えてみよ
ありがとうその一言でやる気でる
言い訳に本音見えたり隠れたり
決断へ取越苦勞多すぎる

口で言う心配ならばたかが知れ

唐津市 岩崎 實

クールビズ板につきくる役所内
違反車に民間人も監視役

疲れ目に新薬ですとすめられ
金婚に波長のズレがまだ見られ
定速の私どんどん抜いてゆく

山鹿市 松岡 純子

ふるりの野山に母の笑顔あり
あの時の母のひと言今もなお
煮ころがしとてまかなわぬ母の味
鏡見て笑顔こしらえ出かけゆく
欲ばって山もり盛ればこぼれ落ち

山鹿市 栗川 四代目

小学校読み書き珠算基本なり
桜散り哀れ儂き日本かな

常識もお国変われば非常識
別れ際あくびを堪えただけなのに
寝化粧に申し訳なし向き合えず

孝行と思つて見舞う雨の中
百歳に読んで聞かせる入選句
何よりの葉身内の語りかけ
菜種梅雨鎌を持たせて地をほぐす
新酒です地蔵さまにも差し上げる

シドニー 三谷 たん吉

この地球孫の代までもつだらか
妻ネタの句を見るたびにフンと言う
英語など教える前に日本語を
こわいもの見たさでめくる社会版
投資被害持つてないからまるでなし

シドニー 坂上 のり子

わが領地ゆつくり巡る猫の朝
知らぬ事知らぬと言つてしまつたら
予感つて不思議何かがあるらしい
蒸し暑い満員バスへ乗るシャネル
温泉と旨いものある長寿国

シドニー 内山 佳代子

花飾り部屋も心も歌い出す
食欲があるのが悩まない証拠
夢の中母が英語をしゃべつてる
ジャンケンで負けて結婚決めた友
夫婦かないつも一緒の二羽の鳥

メルボルン 藤原ボン吉

抜け出せない魔物住みつく炬燵かな

健康に気遣いすぎてアレルギー

英語より武士道教え子が育つ

子の涙自分自身を省みる

杖つくと国の優しさ良くわかる

札幌市 三浦強一

シベリアの吹雪が祖父のバックボーン

飲み込みが早い忘れるのも早い

老春をしますロマン抱いてます

いよいよへ出すへそくりが減ってゆく

コンビニのおでんを囲む花の下

取手市 葛西清

懐の小さな石を捨てかねる

鬼灯に呼び止められて遠い夏

わき腹を通りすぎてる景気風

カッコつけ空いた座席を睨み立つ

スムーズに仕事すすんで腹がへる

草加市 飯土井健夫

信念で歩く明治の百の山

実力は汗と努力の末に出来

ピカソの絵あの程度なら描けそう

終戦後英語を口にせぬ明治

親戚にラッパが居ってかき乱し

柏市 永峰宣子

英国でびっくり無料出産費

思い出の顔も景色も遠くなり

墓洗う心の闇が晴れてくる

君が代は短歌二番はないでしょう

真実は少し離れて見えて来る

東京都 井上つよし

宿帳にそっと寄り添う名前書き

先に死ぬいや私よとふざけ合い

杉箸の匂いうどんの味に合い

甘海老が舌にとろける北の宿

さまざまな想い飛び交う独り酒

東京都 笠原乃りこ

いやなことしつかり拾う耳たより

やれそうな気がする母のあと押しで

切干やひじきの味の分かる歳

健康法サプリメントの無駄遣い

耳の奥小川流して蟬を飼う

昭島市 野口忠

忘れたい過去が前髪放さない

言葉には刃も愛も共に棲み

帳尻で一円玉が自己主張

昨日今日またいで至福しまい風呂

品格は財布の重さ無関係

府中市 岩 本 雅 代

田植すみ泥を落しに湯の街へ

銭太鼓祭りも済んで夏本番

梅雨晴れ間空見上げては深呼吸吸

百均の傘で間に合う俄か雨

ゴルフアーのチラリと覗くへそがいい

府中市 藤 岡 ヒデコ

もういいよ探す鬼さえ来なくなり

六月の景色に馴染むホトトギス

恋の字を消しては書いてたそがれる

他人から見れば幸せそうに見える

マイペース大きくひとつ深呼吸吸

横浜市 巖 田 かず枝

上を見ず下も見ないで前を向く

勝ち組になりたい宝くじを買う

欲張って病氣たくさん抱えてる

オレオレと言われて弱い母の顔

正直な鏡と写真遠慮する

横浜市 長 島 亜希子

私にも振り込め詐欺の電話くる

泣いている声は確かに子の声だ

医療 教育ただなら税も払います(北欧旅行)

温暖化氷河が滝となって落ち

良い水だ鉄管ビールまで美味い

横浜市 金 森 徳 三

銀行の監視カメラに会釈する

主婦と主夫やる気になった大掃除

子供らが知りたがってる親の過去

この年も早や六月の梅雨の空

三倍になって驚く市民税

横浜市 中 尾 哲 代

パソコンが技量不足を馬鹿にする

アルバムの処分思わず手がとまる

店員にソッポむかれる試し履き

炎天下開き直って草むしり

お盆すぎや々と夫婦の夏休み

日立市 加 藤 権 悟

花ことはおくるきれいな日本語

日ぐらしの風鈴亡母の声で鳴り

雑兵の汗を誇る発泡酒

雪月花好きでこの地を出ぬ蛙

甲子園球児日本を熱くする

佐渡市 高 野 不 二

サッカーが負けたくらいで何を泣く

訃報欄年金ばかり気にかかり

使う事ないのに箱がまたたまる

人間とエレベーターは信じない

税金のお役に立っている煙草

岐阜市 平野 あずま

北名古屋 片岡 文男

六十年不戦の誓い積み重ね
阪妻の許へ高廣参上す

偽装した出世階段崩れ落ち

煽てると天まで伸びる豆の蔓

サイレンが鳴ると素直に腹が減る

可児市 鶴留 百合

雨男中止にさせる山登り

雨続きカラフルな傘クルクルと

念願のバッグ最初はどこ行こう

心地良い疲れ一日アウトドア

更新へまた買い替えるメガネの度

静岡市 中西 雅

堀端の柳がゆれて童話聞く

母の日に身内集いて親孝行

皺の手に流れる血潮音を聞く

茶畑にみどりの風が頬をなで

目上という言葉を嫌う家族です

愛知県 八木 百合子

勧誘の電話はお嬢様と呼び

喋りたい口を封じる向い風

おし気なく若さ見せてる夏の足

機械化の出来ぬ棚田へ曲げる腰

大正の気骨支える介護の手

鯉が群れ川の中にも春が来た

休み明けスーツが眠る通勤車

異常ないけれど採血されて出る

ジーンズの破れ気候に合ってた

あれ以来金平糖をよく貰う

京都市 榎本 宏子

子の元氣封印してる世の事件

積んだ本しおり挟まれ待ちぼうけ

代々の母が祈ったお食い初め

ロボットがルールを守る人の道

金魚二匹夏のムードに切替える

京都市 西村 益子

万歩計風にヒントをもらえそう

いざ発進下腹ポンと叩く癖

怒るだけ損だと気付く青い空

なるようになると居直り無駄遣い

自己嫌悪シャワー浴びても流れない

京都市 清水 英旺

気分よしアイネクライネ口ずさむ

亡き母の命日近し夏つばき

五月晴を置き去りにして走りつゆ

価値観が微妙にずれてきた夫婦

雑草は意地張りながら生い茂る

京都市 三宅満子

思い出が詰まり庭木が間引けない
手抜きだと匂いばら撒く換気扇
頼らない私を頼りにする夫
待合室人間模様楽しめる
二十四時とお天道様はついて来る

大阪市 森田明子

バラ園の若さ絶対的な価値
シャガールと六月の空浮遊する
昨晚の私を消す香を焚く
梅雨空へ無心に明日の靴磨く
家事できぬ男育てた母の罪

大阪市 伏見雅明

祝杯がやけ酒になるタツチの差
門限を破り娘の親離れ
今日もまた口先だけの詫びを聞く
平穏を捨てる覚悟の判を捺す
一生を息せき切って走りきる

大阪市 吉田富美

話す事はたと忘れて花茗荷
苦や楽を指折り数え時計草
娘がくれた手紙を抱いて母思い
盆僧の読経もせわし茶も飲まず
ひらがなの字が美しい星まつり

大阪市 吉内福世

人は人私は蝶になって舞う
夫婦喧嘩甘いくらしに塩をふり
ストレスはみな汗に出すウォーキング
梅雨空にわがもの顔の紫陽花よ
振り出しに戻る気力でドア開ける

大阪市 吉川弘泰

夏が来て暑い暑いので無為の風
一人寝は夢で彼女のうちわ風
歳を経て葉月の陰で蟬が鳴く
旅に出て枕替えればいびき出ぬ
かば焼の香りを飛ばす渋うちわ

大阪市 岩崎玲子

朝はまず花の顔みて動き出す
夫の手で朝のコーヒールト風
ハードルは朝の目覚めで高さ決め
癖字からあなたの好きな所作が見え
この唄はあなたを想う月の下

大阪市 平井露芳

青いバラガラスの箱で畏まり(バラ展)
へそ回り測って健康確める
合併で大きくなって区も生れ
名案も名句も出来るいい湯だな
出来悪いボクが目指した私立校

大阪市 三 浦 千津子

大阪市 寺 井 弘 子

新しいページへ挑む二幕目

吹っ切れてだんだん毒気抜けてくる

遠吠えで騒ぐ勝負はついている

毒舌を素直に受けて糧にする

採算が頭をよぎる軽い鬱

大阪市 平 嶋 美智子

池田市 北 出 北 朗

半年が平穩無事で幸思う

口づぐみい姑を演じてる

清風と深い緑に誘われて

土と共朝星夜星耐える父(父を思う)

糸垂れる柔和な顔の父がいる

大阪市 尾 崎 黄 紅

池田市 多 田 契 子

人指しと親指の仲銭になる

金持ちのつりは要らんと言わぬ主義

猛犬に注意わが家の守り札

躓いた歳憚からず石を蹴り

片道の話はしない老いと老い

大阪市 中 井 萌

池田市 上 嶋 幸 雀

四年毎サッカー通になつてます

青い空ひたすら青く満ち足りて

暗黙の了解顔のこと言わぬ

胸焦がす火種はいつも持ち歩く

世話焼きのDNAが騒ぎ出す

身の丈に合った暮しでまだ続く

お似合いと軽く乗せられクールビズ

惚れられて離れる気のない体脂肪

幸せは喪服の出番ない暮し

この愛はいつか行きつくシャボン玉

被害者に戦の傷は風化せず

濁流に我が青春も呑み込まれ

死して生くそんな時代の風の中

見せしめにウグイスの真似セミの真似

隊長の訓辞立派に死ねばかり

目に青葉サブリメントに負けません

三段跳び記録をねらう青蛙

適当に善人してる厄介者

出来すぎの模写に人生掬われる

旅の空子供の頃の雲を見た

緑風に誘い出される恋ひとつ

父の椅子父の日にさえ見当たらぬ

紫陽花がほっとしている梅雨の入り

紫陽花も頬笑みかける一つ傘

梅雨入りも相合傘の出来る幸

泉佐野市 稲葉 洋

大ジョッキ条件反射してる喉

飲み助と下戸が妙なるハーモニ

交遊録悪戯鬼友はよく続き

わたしにも母あり苦勞かけ通し

さて掃除力むことなしワンルーム

泉大津市 助川 和美

時価とある余計食べたくなるイワシ

クラス会すむまで我慢ダイエット

星よりも国に願いを届けたい

僕寝てる間に行き寝ると帰るババ

裏切らぬ料理が並ぶ京の床

門真市 矢阪 英雄

外からは町家は見え木を薫り

賀茂の風呂衣に受けて口に入れ

色つかぬ掌の中で色さぐる

古郡守る緑と石となびく風

サッカーの話題忘れず鯖を売る

河内長野市 宮守 正博

やんわりとさす明治の母がいる

老いらくの恋をさらりと語る酒

遺言状喧嘩するたび書き直す

枕もと離婚届もあった夜

尽します苦勞しますは演歌だけ

河内長野市 黒岩 靖博

退社後の憩いは何時も縄暖簾

押し売りをやんわりかわす難しさ

プロポーズ何処で言ったか何時だった

母さんの手作り料理プロの味

やんわりと断わるすべも年の功

河内長野市 木太 久正

リュック背に両手に荷物夏生さる

ピーマンの肉詰めうまくできた午後

リュックから手押車に衣更え

料理メモ新聞切抜き溜めている

この頃は専業主夫にはげむ日日

河内長野市 内海 綾乃

元氣な子男女生み分けしないでね

乗るよりも見学多い新空港

行くと共に銀行名が変わってる

露をあげ草花きれい光ってる

客船とクジラ激突こわい海

岸和田市 坂口 英雄

もうとまだ老いのやる気が変わります

早よ逝けと福祉だんだん削られる

特攻隊と自爆テロとは違います

酒飲むと自慢話をしたくなる

明日は晴れ洗濯物も聞いている

岸和田市 堤 檣代

居直つてみても迫力ない私
愚痴言えば惨めになるのだまつとこ
よく食べて開き直つて体重計
たしかこれメモつておいてメモ忘れ
梅雨空もサッカ―熱で追いやられ

岸和田市 中 岡 香代

胸に住む鬼を選んでけもの道
歌声に合わせて動く総入れ歯
ペットさえ妻が強いと知っている
駅弁をデパ地下で買ひ旅気分
注意するほどに居直る反抗期

堺市 荻野 像山

過去帳を開けて故人と年比べ
酔っている時は本気で握手する
止めるなら黙つてタバコ止めなはれ
安もんの肉に挺摺る爪楊枝
気苦労もないよな顔で妻いびき

堺市 大久保 伸子

九官鳥好き好き好きと教えこみ
大自然怒つて地球荒れ狂う
自衛隊鎧ちらちらのぞかせる
ガム噛んで脳の活性はかつてる
ためこんだストレス晴らすパスポート

堺市 阪井 智之

逆転のときを窺い舌を研ぐ
陽の下でもいだトマトの頬のつや
下手だけどマイクをもつと別人に
生き下手を真面目頑固で押し通す
不憫だな俺に似たんだ話下手

吹田市 二宮 栄子

カーネーション嫁の真心ゆうパツク
母の日のブランド傘は雨ざらい
二日酔い妻を病気にして休む
デパ地下のおかず気取つて皿に盛る
もったいないを他国の人に教えられ

吹田市 元田 さとえ

無口でも心安らぐ夫婦仲
シンプルなおまけの皿の持ちのよさ
ひとつまみ慣れた手つきの塩加減
反応があつて料理の腕を上げ
癒えはじめ粥の旨さがしみわたる

吹田市 早泉 早人

正論に反応無くて浮いている
友来たり誓いを破る休肝日
しゃべり過ぎ本音をもらす酒の席
声色でわずかな嘘を見抜く妻
衣替えこころの向きも変えてみる

高槻市 峯村 勲弘

ささやかな望みビールと初鯉
少しだけ食べておいしい試供品
ほどほどの遺産仲良く生きている
悩みごと減った分だけ白髪増え
神の国我が家治める山の神

高槻市 安田 忠子

バイキングやっぱり欲が出てしまう
電話でも鳴ってこないか昼下がり
地図広げ旅する国を確かめる
日焼けして門扉をくぐるエビローグ
旅に出て空白続く三年記

豊中市 荒巻 夢

清貧と思い込んでた幼い日
桔梗の芽水滴のせて顔を出す
五月晴花と団子と寺詣り
仏像はみんなの願い聞き流し
ロボットよもう人間は要らないか

豊中市 源田 啓生

痛いとき笑うと決めて生きている
出掛けても杖を忘れるほどの足
悪事みな隠して街の朧月
もう避けて通れぬ滝が見えて来た
フェロモンがあふれて夏に若返る

豊中市 神野 宇乃子

意気込んで一歩踏み出す遍路旅
目にしみる白い脚絆も菜の花も
空腹にうどんの湯気の温かさ
元氣だとメールしている旅の宿
夕焼けに明日行く寺を仰ぎみる

富田林市 古田 千華

胸の中闇が一張り泰然と
愛をこめ家族のためにする料理
よいお年燃えてるつもり猿芝居
旅帰り薔薇はすっかり咲いていた
物騒な言葉飛び交う五七五

寝屋川市 岡本 勲

耳底にひびく亡父の愛の喝
どの薬効いたか気分軽くなり
惚けたのか薬ときどき飲み忘れ
黒髪は日本女性の誇りです
もうこの辺で終りにしないか化かし合い

寝屋川市 小嶋 みさと

転がって来た幸運を取り逃し
紫陽花の額あでやかに華やいで
段差には転んで気付く私です
短冊に友の元氣を確かめる
雷鳴に天の怒りをふと思う

寢屋川市 北田 ただよし

まだ元氣二十八本永久齒

スモモの実たわわにつけて誇らしげ

子育てのシステム蜂におききする

流れには棹をさすのは控えてる

偶像是遠まわりする影法師

寢屋川市 森 田 麗

掃き寄せた枯葉を飛ばす風となり

平等が時には喧嘩呼ぶ遺産

寄せ書きにジヨーク一つを書き添える

母の荷はよろず屋の如詰められて

入り組んだお話らしい泣いてはる

寢屋川市 長 濱 賢 山

携帯に親の知らないパスワード

老いた子が老いた親看る高齢化

母の皺ふえる私の親不孝

はんなりと流行浴衣下駄の音

いけるなら一度住みたい月世界

羽曳野市 仲 谷 真 一

薫風の季節はわずか走り梅雨

モンゴルの力士が競う大相撲

ぐるぐるとパスをまわしてさあシュート

わたくしにリボンをつけてプレゼント

エレベーター安心でいて乗れないネ

羽曳野市 吉 村 久仁雄

浮き沈み重ねダルマの顔に似る

残照が焼けばつぐいに火を点ける

一匙の愛が足りない主夫の味

冷え切った愛を足湯で温める

子を背負う母に揺るがぬ非戦論

羽曳野市 福 田 悦 子

神さまのおつしやる通り生きている

もったいない捨てられないのゴミの山

生きている証三食欠かさない

ペットボトル離さぬままで夏終る

北海道に行ったつもり電気代

羽曳野市 松 本 静 子

何事も怖さ知らずで生きてきた

道草は思い出ばかりつまつてる

平和ボケ犬がリボンをして歩く

かしわ餅子供の頃の母の味

糠床に水茄子一つ漬けてみる

羽曳野市 森 下 一 知

リタイアに始まる妻の指定席

どう見てもだまされ易い丸い顔

ほっといてくれと意固地な零れ種

立ち止まる楽は欠伸を誘うだけ

叱責を妻に食らったお人好し

羽曳野市 永田章司

薄銚の板に徹する出来た人
エレベーターメーカー名を見る癖が
仕事です行き過ぎないでクールビズ
老夫婦記録紙のないファクシミリ
中興の祖にも花道用意され

枚方市 二宮紫鳳

地平線夕日眺めて暮参り
父偲ぶみかんの花の香る頃
子ら集い達者な母の笑顔もれ
こだわりを捨てて和を持つ楽道家
紫陽花が咲いてひと雨欲しい初夏

枚方市 小川良吉

溜つてるストレス消えた萌える里
青写真通りにいかぬ我が半生
青筋をたてて議論の青春譜
青竹を踏んで始まる今日の家事
青々と身も染まる木々熊野道

藤井寺市 西村栄一

桃太郎絵本の中でトシをとる
母と子が絵本の前で眠ってる
保育器のいのち伸びのび欠伸する
ルンルンで行ってはまった水たまり
止まり木の酒は勝手なことを言う

藤井寺市 吉田喜代子

慣れぬ事頑張りすぎか五月病
にがうりに夏越し託し植える苗
雨女一人も居ないハイキング
なんでかな亡夫たびたび夢に出る
ご近所に居るかも知れぬ怖い闇

藤井寺市 津田シルク

怒らずに鮎をお口に入れてみて
税の名で我が財産が減ってゆき
老いた脳フル回転で立ちくらむ
加齢とは薬人間まるくなり
明日は我が身映画を観ての帰り道

藤井寺市 増井ヨシ枝

老母の知恵借りよう途中下車をして
アジサイが去年とちがう色で咲く
近ごろは目覚めの雀声がせぬ
ふる里はホタルとび交う闇がある
すいれんの花に亡夫が座つてる

藤井寺市 俣野登志子

陣痛にオロオロとしか母二人
生まれたあ男児のように元気な子
おへそまで誉めてお七夜身内の繕
なぜ泣くの新米ママも泣いている
孫の顔覗く顔みなほとけ顔

藤井寺市 伊藤 アヤ子

八尾市 笹倉 ひろし

今夜だけ夢を見ないで眠りたい
また逢える約束だけはかかさない
限界を知った命がいとおいしい
玄關をつばめに取られ遠回り
方言で交した言葉温かい

箕面市 寺井 柳 童

八尾市 松葉 君 江

支持率の高さ知るたび首ひねる
天然と養殖分からぬグルメ通
赤い花母の日の母よく笑う
長生きが幸せだとは思わない
男にも言い分女性専用車

八尾市 寺川 はじむ

八尾市 赤木 妙子

むくむくと泡立つような噂きく
川床へ陣取る石に見る威厳
大木の梢が譲り合う緑地
度の合わぬメガネに慣れてくる不思議
ジョッキーの泡も弾んでくる夏日

八尾市 田中 トシエ

八尾市 平川 幸枝

青葉映ゆ雨の雫を明るくし
森林へ恋うて来ました青い鳥
軽やかにスカートはらむ初夏の風
何げなく話した言葉つきささり
冷や奴一丁分け合い老夫婦

繁華街飢えた眼が行き来する
青春の軌道を訪ね老いを知る
少子化の中で年金はやく節
ふところの中味に合わせ街に出る
忠告を無視され地球危機に病む
思いきり泣いて心を軽くする
迷いつつ泣いて笑って五十年
腰骨を立てて心をととのえる
再入院天が与えた小休止
人間の土台を作る児の躰
青く青くほんとに青い葉が光る
霊峰は泰然今日は五月晴れ（富士を仰いで）
いい知らせ日記に赤く二重丸
面影をすこし残してクラス会
捨てる人拾う人あり粗大ゴミ
面影がクシャミ一つで子に戻る
勘だけが頼りで獣めいてくる
相席になつて迷った人の皿
無防備の時は心が柔らかい
マスコット無情に捨てる子の成長

八尾市 中島春江

衣更えゆつくりしてていそがしい
綴じ糸が切れて家族はばらばらに
おしゃべりの中で見付けた生きる知恵
人のこと知らないふりでよく見てる
葬式の心配をするセールスマン

八尾市 田邊浩三

お互いに面影さがすクラス会
面影を追って石段踏み外す
勘だけは未だ負けないと杖握る
腰痛に水泳パンツを買いにゆく
一泊のビデオがくれた明日の夢

八尾市 西川義明

ズボンみな合わなくなったビール腹
長生きの秘訣聞いても守れない
故郷よ村という字を消さないで
ノンアルコール裏切り者の味がする
龍宮の誘いにすぐに乗る私

大阪府 島田誠一

五連休混むを口実酒三昧
妻子には大口たたき亭主面
せつかちとのんびりの妙いい夫婦
安酒場年金組の古戦場
口下手で頑固一徹石を積む

大阪府 畑中節子

母さんの声が弾ける夏休み
もぎ立ての赤いトマトと頬くらべ
耳鳴りか蟬の声だかジレンマか
床の軸替えて心も初夏となり
澄み渡る夏を吸い込む大あくび

大阪府 若月祐作

竹生島観音像は湖の中
お天気は五体にひびく羅針盤
絵はがきに旬の野菜の香り知る
挨拶状勤めを終えた半世紀
国技でも看板力士他国籍

大阪府 高木道子

青蛙ふと目の合うて畏まる
残照の影がついてく青田かな
噴水がワルツのリズムで有頂天
六十路坂梅雨の重さが膝にくる
紫陽花の心はぐすよう雨が打つ

大阪府 大屋敷婦美子

老化ともうまくつきあうすべ発見
つばくろが巢立って淋し空空空
サラリーを今は年金待ちこがれ
朝の気はいち日のパワーわかみどり
精一杯生きたご褒美青い空

大阪府 神野 千恵子

無味乾燥浮いたうわさの一つなく

花便りうきうきしてるカレンダー

月下美人命噴き出すように咲き

ロボットがすこし人間臭くなる

バランスをちよつと崩して弾みつけ

大阪府 小栢 こずえ

自家菜園自慢も混ぜて苺盛る

がんばれと幸せコールする朝日

山椒つみ終えて汚れた爪を切る

弁当を入れて自立の顔になり

心身も自然も癒す雨が降る

大阪府 西川 冷子

商人の言葉遊びについて油断

あの時が最後と知らず小さき老母

滴りをほとぎす来て破らるる

番傘の香りなつかし古郡を行く

貧乏くじ避けてすいすい人生を

神戸市 武田 恵美子

待っていた朝寝ができる退職日

生かされた毎日宝けんかせず

活字になりまたかんばろうわが詩を

若がいり嫁のふり袖借りて舞う

成長をカメラで追っている夫婦

神戸市 木村 忠義

舌嚙まぬよう指さして買うケーキ

賢者は学び愚者は貶して人を見る

人を気にせず我が事に目を向ける

幸運は無欲な人が好きらしい

騒ぐ子をうかつに叱れない時代

相生市 村木 信子

古々米を食べて田植えの汗を積む

ふる里へ人間臭さおいてくる

会者定離時の流れに逆らえず

酌み交わす酒へこだわりない旨さ

聞き上手胸襟をあげ余生の譜

尼崎市 桑原 東園

とりあえず妻の名を呼ぶ連休日

飲み残し茶は不満から渋味増す

夜の汽車窓に慌てた顔映す

澄みわたる空見てくれと鳴く鴉

明かせない想いを詰める胸の函

尼崎市 小池 幸子

庭の隅我が家の歴史石の白

逆境を堪えた昔の自負がある

手の届く距離に娘が居てくれる

夢描き余生台本摸索する

寿命延び百歳までも夢でない

尼崎市 河津 正 治

鬼の目の涙で窮地救われる
時々は理性を越えた夫婦独楽
晩成の夢ゆつくりと古稀の坂
理屈ぬき肌は正直物を言う
人形のようにだと人に噂され

加東市 安 達 厚

米寿まで生きると妻は無理をいう
落ち込んで青い大きな空をみる
朝ドラに一喜一憂暇な老い
新聞は読んだこれから何しよう
簡単な無とか空とかむずかしい

篠山市 永 井 かほる

月一のゲームの裏に本音出る
菜園は収穫種蒔き日々楽し
民謡の一日楽し夢気分
ねむれぬ夜亡夫思い出走馬灯
吹抜きで乙女心がよみがえり

篠山市 谷 田 多美子

利子上る頃には元金零になる
リングの歌一人で歌う梅雨の空
ダイエット猫も苦勞の肥り過ぎ
一人居のどんな老後になるのやら
人生はみじかく弥陀の鎮魂歌

宝塚市 河津 寅次郎

日本を変える変わるという政治
国中が自由な庭である平和
貞女にも豹変したい明日を持つ
石投げた昔に戻りそうな川
目から鱗落ちた記憶のない不覚

宝塚市 丸 山 孔 一

飯掃除洗濯出来る夫です
夢で良いだけ会いたい人が居る
待ちなはれそない急いで生きんでも
落成のお餅焼くなど教えられ
取りきれぬ今年はついに除草剤

三田市 上 垣 キヨミ

見落さぬ医師を信じて鯉になる
握手する振りして持たす心付け
貴男にも辛抱させて共白髪
お薬をのんでいたかと問う日増え
盆休み夫は西に妻ひがし

三田市 辻 開 子

メールする送信出来ず待つメール
ただいまの声一日を知らせてる
検査終えとかく足どり軽くなる
色あせたアルバムめくり過去覗く
バランスのくずれが恐い歳になる

三田市 白井二英

文明は進むが倫理乗り遅れ
ビジュアルと言ってるくせにデジタル化

いい年齢で褒められたらばやる気出し

ボク行くと必ず吠える犬がいる

懸命に打った杭です抜きにくい

三田市 阪本藤朗

旨いものまだまだ舌が感知する

夕暮れの公園ほっと息をつき

お賽銭他人から借りるツアー客

開け口を確かめもせず四苦八苦

ボランテア永い月日と妻笑う

西宮市 藤本直

夢追うなど言われた夢が小さすぎ

働かぬ自分に飯を軽く盛る

悩み事家に一羽のしらけ鳥

一枚を脱いで踏み出す長い坂

極楽で待ってますとは言いにくい

西宮市 石野照代

取れすぎて連日なすびの出番です

水はじく青空市場の野菜たち

風呂敷の便利認識里がえり

神様の芸術性に二重丸

リュックには夢もなやみもつめている

西脇市 七反田順子

美術館うきうきとして人を待つ

釣人は浮きを見つめて小半日

共白髪素顔のままの妻でいい

遠くても近く感じる母の愛

ふるさとの情景少し遠くなる

兵庫県 黒崎美紗子

テレビ出る噂故郷かけめぐる

坊さんが道間違えて待つ法事

冷汗をかく検診のへそまわり

合併して市でもムカデやマムシ出る

暖かくなつて喜ぶいものつる

兵庫県 岩本美緒子

誉めことば花も私も嬉しがる

ウインドヘグレー髪シヤン背な正す

ルンルンと過ぎ去る日々が惜しまれる

老いライフ怠けた癖も困つてる

清まし雑煮味噌に変わったあの昔

奈良市 矢野良一

盗撮犯医師も教師も警官も

人情と風情が癒す奥州路

ハイキングやつと一息峠茶屋

初デート胸はときめき気はそぞろ

野バラ香り初恋の人思ひ出す

奈良市 乾 春雄

消印の向こうに好きな人がいる
人間の弱さを笑うアスベスト
正論を隅へ押しやる多数決
嘘ついて寄り道してた青春譜
新しい水になじまぬ雑魚の群れ

奈良市 尾畑 なを江

万感の想いを込めて湯に浸り
毎日が土日となりて多忙なり
不意の客もてなしている庭の花
噛みどころ悪く奥歯のすれ違い
訝するあれは私の過去の声

生駒市 小西 稔

猫舌で熱い食べ物一苦勞
舌たらず言葉不足で誤解受け
下手であれ好きなスポーツ止められぬ
下手くそとなじられ逆に力出す
話下手相手はいつも苦い顔

橿原市 藤永 実千代

健康に良いとあれこれ摂らされる
関西に住んで益々よく喋り
ツアーバスまるで女性の専用車
呼び出しにハイと答える人が好き
少子化に拍車かけそな子の受難

和歌山市 坂部 かずみ

六等分年々小さく買う西瓜
二人居てトンチンカンな話する
根が付いて飛翔できない葛蔓
旅プラン枕の上に山とある
不眠症お酒のパワーチョット借り

和歌山市 山田 侃太

メガネ替え男孤独に負けられぬ
積乱雲いくら懺悔を重ねても
笑い声満ちて隣家の仮面劇
産声へ地球は罪を自覚せよ
忠告のメールはとても無表情

和歌山市 柏原 夕胡

くやしいから追いかけたくはないけれど
待つて待つて待ちくたびれた水中花
歯痒さはわたしのほうが惚れている
せつなさはあなたへ届かない想い
逢いたいと言つてところが泣くのです

和歌山市 根田 よしこ

田植え済み蛙元気にしゃべり出す
元気らしい友の絵手紙おどつてる
体重を隠す婆ちゃん未だおんな
父の日を忘れないでと娘にメール
こぼれ種ことしも元気くれました

和歌山市 寒川 武

田辺市 大峠 可動

安泰と書かれて苦戦する選挙
バーゲンに備えて体を鍛えてる
増えたねと体重計が笑ってる
見るだけにして頂戴と花が咲く
増税は避けられますか次期総理

和歌山市 田中 すす

和歌山県 村中 悦男

澄んだ瞳だ反対意見持っている
淡々と書いてはいるが深い闇
薬草を煎じて思い煮詰めてる
見なければ済んでいたのに井戸の底
欠点を晒し続けて添い遂げる

和歌山市 たむら あきこ

和歌山県 辻内 次根

にんげんも金もこの世を通過中
遠巻きにふんわり見てるコイゴコロ
夜のグラス溢れてわたくしは気体
スパイスを貰いに街へ回遊魚
日常へスパイス赤いハイヒール

海南市 小谷 小雪

和歌山県 木村 徑子

生きている努力をほめて欲しい母
甘いもの食べたくなって歯をみがく
長生きの秘葉みつけに行くデート
暗ければ暗いほど良い恋蛸
玉ネギの輪切りの涙味付けに

炎天下眩しい鍵をかけて出る
望郷出雲神話の里も湯の街も
物忘れ気遣いあっている夫婦
産地直送産地に基地もあるゴーヤ
点線をカルテに書いて断末魔
妥協点見えて来たので引くとする
過去話す妻は笑顔で若く見え
難聴も心の声はよく聞え
惜しむ気がどこへ行ったか粗大ゴミ
年金の傘の中では雨にぬれ

プライドを捨てるこくりと膝が鳴る
脱皮しているのは何時も夢の中
すぐ治る打ち身すり傷かすり傷
好い顔に朝の鏡で整える
疑問符を持つと元気が湧いてくる
モンゴルもロシアも四股を踏みたがる
アメリカも僕もおいそれ謝らぬ
降って来たエールに貰う有頂天
満天下親より甘い蜜はない
まさかには銀河で逢える君がいる

和歌山県 森 下 よりこ

親切な仮面で探り入れてくる
十葉もたんぽぽも咲く庭である
雨上がる身を震わせて柿若葉
美人ではない分化粧映えがする
時は流れる夫の死をも呑み込んで

松江市 柏 井 日出子

豪華船乗った気分の深夜便
童謡を口ずさんでる瀬の小みち
盲目の恋かもしれぬベンもえて
空想のしあわせ続く原稿紙
響かせる言葉自然に出る安堵

松江市 相 見 柳 歩

車から降りては手と手つないでる
この道がそうだ君への近道だ
削られてやがては毬になる今夜
花びらで誘い香りでもた騙す
変身のたびに体重リバウンド

松江市 松 浦 登志子

天皇と同じ菓子食べ光栄だ
大切なひと休みです午後一時
失ってありがたさ知る自前の歯
杖ついた散歩の理由聞きたがる
返信の早い遅いがストレスに

松江市 山 根 邦 代

ふるさとで会話楽しむうつほ草
笹百合がいつもの場所で笑顔みせ
草花にきれいきれいと話しかけ
辻褄の合わぬところがほつれ出す
自然から貰い受けてるありがたさ

出雲市 川 島 和歌子

時の人話題騒然風に乗る
春うらら柱時計のにおい音
朝帰り言い訳出来ぬ事もある
目移りしあれこれ迷う贈り物
ほろ酔いの人肌爛を好む父

出雲市 荒 木 英 子

夫逝きて残された日々虚しすぎ
八十路行く欲望さわぎ草萌ゆる
庭の花病室飾り良い眠り
食欲は元気のあかし老いの知恵
白寿まで亡母の教えをとこしえに

雲南市 福 間 博 利

やれやれとゆるしてくれる影法師
乳母車耳にやさしい風のこえ
改革のどこが骨太なったやら
口げんか二人でさがす忘れもの
年金よ無精卵でも産んでくれ

雲南市 武島 ちよえ

上流の気持になって美術展

日本語がうまく言えないのに英語

生きた金今がチャンスと言われても

朝顔が境界線を越えたがり

ゆったりと生きるつもりが多忙です

雲南市 菅田 かつ子

七十へロマンチックな窓の月

生き甲斐の茄子や胡瓜の顔の艶

お出かけに着たり脱いだりまた着たり

あの頃はわけなくさっと跳べたのに

青梅に空の青さが眩しすぎ

安来市 原 煩惱児

叙勲の栄支えてくれた妻の影

拝謁に感極まれり戦中派

叙勲の栄深い眠りに戻り旅

緊張が続き疲れた叙勲の栄

叙勲の栄それから余生縛られる

鳥取市 山岡 紀子

目と耳を塞ぎドライに生きている

可愛くてドライな嫁に乗せられる

ママになりドライな嫁もまるくなり

デュエットを空気のような人とする

誘われた理由は空気のようなだから

鳥取市 岡田 信恵

日が暮れて光で友を呼ぶホタル

水辺にてホタルは何を語るのか

耐えぬいてわが道自由歩んでる

早乙女が水田一面植えつくす

コンサート音色のひびき聞き惚れる

鳥取市 山口 千代子

病んで知る老化の文字が身にしみる

倅せは変らぬ日々のくり返し

することがないから散歩でもしよう

何気ない会話の中に得るヒント

耐え忍ぶことを知らない現代っ子

鳥取市 谷岡 清子

里恋し浮くは山川母の顔

麦飯とたくあんの日々遠くなる

老夫婦聞こえる耳と聞かぬ耳

お陽様に良く乾いたと礼を言う

聞こえども意地悪してる知らんぷり

鳥取市 中宇地 秀四

さびついた心の底にある自信

生きている限り頑固に俺は俺

頬笑みに引き寄せられる青い鳥

政治屋は庶民捨てたり拾ったり

七光り感謝すべきか蹴るべきか

鳥取市 横田 春名

イライラがつのり能面引きよせる

酒むしの貝ひらく音生命消え

曖昧な答急場をしのいでる

とりとめもないこと話し頼ゆるむ

拉致家族願いも包み海は風ぐ

鳥取市 近藤 秋星

紫陽花が我が世の春を誇る梅雨

三人も少子化の世は恥ずかしい

足で蹴る競技に世界中が湧き

隣より今年は風鈴先に吊り

いい話待って補聴器付けてから

倉吉市 大森 孝恵

うっかりと酒に吞まれて本音吐き

罰当り隠した場所がわからない

つくしんぼ袴脱がす手いそいそと

日向はこ猫に負けない大欠伸

貪欲な追求心が尻たたく

倉吉市 前田 喜美子

面倒な事は明日と先ずは寝る

異変など無いと信じる茜雲

余談から本音が聞ける座談会

空気ぬけ自転車重い向い風

教育が奈落の底で喘いでる

倉吉市 福光 京子

経唱え旅に備えて運鈍根

対峙して吠えない犬に気を抜かぬ

旅終えて帰る田舎の夜の道

こぼれ種集めひと鉢また増える

庭先は自慢の花が咲き誇る

倉吉市 酒井 美美子

忘れたい忘れさせない深い傷

あつあつの鍋ぐつぐつと小言言う

出しやばりがひびいて重荷背負う破目

迂闊にも口がすべって嘘がばれ

うわべだけゆうゆう中味火の車

倉吉市 前田 三津子

お日さまの正面花は咲き誇る

鍵のない扉に距離をおくことも

過ちを許す努力はおしまない

手ぶらでも熱いハートは持っている

登山靴履いた時から山男

境港市 遠藤 那珂子

バラ寿司が得意なレシピ仲間入り

寿司めしの味に亡母が付いて来る

女ですたまにほんのり紅をさす

健康茶飲んでウエスト細くする

うららかな日より散歩遠回り

境港市 中井虎尾

しゃれて言うサマーオレンジ食べなはれ

取り締り嫌われるから民まかせ

泳ぎなど誘い寄せくる夏の波

いいじゃない地方文化の国言葉

老鯉も泳ぎて生きる夏津和野

米子市 猪森 スミエ

食べ過ぎた後のケーキは別の腹

出番まで鞆に収めて置く刃物

色を替え品を替えても日本食

嫁姑まあるい橋を架ける孫

太陽と握手している葱坊主

米子市 小塩 智加恵

よく使う右手が駄駄を捏ねだした

煽てられ刻む男が増えてきた

満腹になると空気も重くなる

散髪は妻に任せる髪の数

二つだけ若返りたく髪染める

鳥取県 大田 勝 誉

やんわりと攻めてやろうか義理もある

死に金は使いたくない鳥の羽根

土いじる静かに暮れてあかね雲

なじられてこれで引っこむ訳でない

艶やかに歳は取りたいそれなりに

鳥取県 岩崎 和子

赤表紙私も若いパスポート

ときめきと笑いが若さ保ってる

歳なんて何です今が最高で

日やけなどまるで忘れて歩いてる

昼寝して深夜一人のジャズタイム

鳥取県 橋谷 静江

趣味ちがう夫婦で少し気がねする

常識で言ったことばに逆らわれ

無気力な人を誉めてる言葉尻

早起きで朝日に出合う時間帯

流行語なぜか馴染めぬ歳である

鳥取県 小飼 和代

振り返る道へドラマの二つ三つ

中元へ迷う気持に見栄覗く

満天の星も煙った露天風呂

ガソリンの高値に車悲鳴上げ

名月へ渴いた心潤った

府中市 馬場 利子

淡白に生きて来たのをちと悔み

誤解とく糸口さがすベン先の

不利を知り保護色に身をほかす

八月の雲を怖がる白い鳩

鍬たてて話が続く田舎道

第20回 井笠川柳会誌上大会 葉 ひこばえ

課題 「帽 子」

西出 楓楽 (大阪府) } 共選
小野真備雄 (岡山県)
山本 芳男 (兵庫県)

「 嘘 」

新家 完司 (鳥取県) } 共選
正畑 半覚 (広島県)
長島 敏子 (兵庫県)

応募要領 指定の用紙又は便箋に各題2句
(計4句)を列記し、郵便番号・住所・氏名
柳名・電話番号・所属柳社名を明記し応募
料と共に送付下さい。

応募料 1000円(定額小為替) 発表誌送付
締め切り 8月31日(木)

投句先 〒714-0081 岡山県笠岡市笠岡507-68
井笠川柳会 TEL・FAX 0865-62-6200

賞品 課題天位のうちから総合成績により
石碑贈呈。その他3才入選句に賞呈

主催 井笠川柳会(日川協加盟)

ときめきがまた蘇るクラス会
平凡がなによりと舞う夫婦独楽
気にすまいされど気になる世間体
気のもめるドラマの余韻目は冴える
古傷をいやす二人の車間距離
心の捻子一つが欠けて寒い春
裏木戸をそと開けとく母心
ジীবンの穴から新語飛んでゆく
長雨に物干し竿もあくびする
亡母の指輪引出しに寝て起きません

(前月分) 静岡市

中 西

雅

宇部市 高山清子

せんりゅうぐる一ふ GOKEN 第六回 誌上大会 作品募集

題・選者 各題2句 用紙自由

「点」 嶋村 幸(高松) 第五回優秀者
沼尾美智子(神戸) 第五回優秀者
高橋こう子(今治) 第五回優秀者
播本 充子(八王子) 川柳塔のぞみ

「雑詠」 岩淵 香城(松山) 俳誌「南風」
石田 柊馬(京都) バックストローク
岡田 俊介(大阪) 新思潮
原田否可立(松山) GOKEN

締め切り・発表 9月20日(発表誌呈)

投句料 一組1000円 何組でも可

投句先 〒791-0212 東温市田窪1976-17
野口三代子 方

賞・その他 各選者特選句に呈賞・成績優秀
者の中より次回の選者をお願いします。

お問い合わせ・連絡先

TEL 089-932-3765 原田否可立

全国の河童達よ遠野に集せよ！ 第3回「河童」川柳誌上全国大会

応募期間 受付開始 7月1日
締め切り 9月30日(消印有効)

課題 「河童」2句

(新作に限る・新鮮な河童を)

選者(敬称略)

札幌川柳社	(北海道)	斎藤 大雄
おかじょうき川柳社	(青森)	北野 岸柳
川柳人社	(岩手)	佐藤 岳俊
明日香川柳社	(埼玉)	てじま 晚秋
川柳研究社	(東京)	西来 みわ
NHK学園	(神奈川)	大木 俊秀
川柳えんぴつ社	(富山)	脇坂 正夢
川柳塔社	(大阪)	西出 楓楽
光川柳社	(山口)	早川 双鳥
戸畑あやめ川柳会	(福岡)	藤井 北灯

投句料 千円(郵便小為替) 用紙 便箋大・たて書き
発表 11月3日

賞 総合25位まで(盾その他・発表誌呈)

投句・問合せ先 〒028-0516 遠野市穀町6-17
鈴木 南水 TEL 0198-62-4843

主催 第3回「河童」川柳誌上全国大会実行委員会

日本現代詩歌文学館の資料収集について

【収 集 対 象】

明治以降の詩・短歌・俳句・川柳に関わる個人・合同の作品集、評論、研究書、随筆、その他関連図書、および詩歌総合誌、同人誌、会員誌、個人誌など。図書、雑誌については、作者の有名無名を一切問わず収集しています。

【保 存】

永久保存を目的とし、原則的に書庫で大切に保存します。

【公開・利用】

ご希望に応じて閲覧ができます。著作権法の範囲内でコピーサービスを行い、また郵送もします。詳しくは下記までお問い合わせ下さい。

【重複資料について】

同一の図書は原則として2冊まで受入をいたします。上記【収集対象】に該当しない図書、およびすでに複数を所蔵している図書につきましては、閲覧室に開架するか、他の施設に転贈するなどのかたちで可能な限り有効活用をはかります。

※当館から資料受入目録が届きました際、お送りいただいたにも関わらず、目録に記載されていない資料があった場合には、上記のようなケースとお考え下さい。ご要望に応じて返送、転送もいたしますが、そのようなご連絡は目録到着から1～2週間を目途にお願いいたします。時間が経過した場合、対応できなくなる場合がございます。ご理解とご了承のほどお願いいたします。

日本現代詩歌文学館

〒024-8503（郵便の場合、以下住所記入不要です）

tel : 0197-65-1728 fax : 0197-64-3621

E-mail : shiika@shiikabun.jp

URL : <http://www.shiikabun.jp>

愛染帖

新家 完司 選

島取市 岸本 孝子
産めるなら産んで差し上げたいものだ

(評) 見上げた心意気。産めるのに産まぬ女性たち、結婚せぬ若者たちに聞かせたい。

交野市 田岡 九好
今すでに欲呆けという認知症

(評) 確かに「欲呆け」も「ボケ」の一種。多かれ少なかれ誰もが罹っている

弘前市 宮崎ヒサ子
晴れた日に食べると言いさくらんぼ

(評) お日様のエキスを吸った赤いダイヤモンド。青空の下で食べてほしいと言っている。

浜松市 杉浦 恵夢
シャッター街くしゃみをひとつ置いてきた

(評) スーパーマーケットに負けた商店街。寒々として、こちらまで風邪を引きそう。

和歌山県 三宅 保州
ロスタイムあるのでしょうか余命表

(評) サッカーのロスタイムは三分ほどだが、さて、人生の終了ホイッスルは何年後？

豊中市 吉田あずき
好きなのに覚えられないケーキの名

河内長野市 坂上 淳司
オートロック何度締め出されたことか

吹田市 元田さとし
たつぷりの想像力で落語聞く

西宮市 片山 忠
パンツから先に脱ぐのも似る息子

和歌山県 木村 徑子
モノの絵に及びませんが花の庭

西宮市 緒方美津子
タイガース負けてますます無口なり

和歌山県 玉置 当代
突貫工事の音に耐えます歯の治療

島取市 土橋 螢
にんげんに疲れぐにやりと横になる

和歌山県 木本 朱夏
逝った人ばかり写っている写真

柏市 河野 桃葉
夕映えの空蹴り上げる逆上がり

東大阪市 谷口 義
友だちが死んでお月さんと帰る

和歌山県 たむらあきこ
方角の決まる一步を踏み迷う

和歌山県 田中 すす
遙か沖見続けている生き疲れ

横浜市 金森 徳三
老化かな頭の中で風が鳴る

神戸市 山田婦美子
不整脈あの世が近く見える夜

鳥取県 石谷美恵子
好きだから横にはどうも座れない

羽曳野市 森下 一知
恙無く同居が続く低い屋根

池田市 上嶋 幸雀
貧乏が幸いしたか太らない

池田市 倉益 一瑠
ベアシューズとどん先を走る妻

鳥取市 丹後屋 肇
にわか雨入れてあげたい人が居る

枚方市 坂上のり子
八つ当りしないで負けたのはあなた

和歌山県 喜田 准一
死の覚悟元氣な時の大ボラだ

和歌山県 堀 正和
揉みほぐす手加減がいる妻の肩

和歌山県 堀 正和
葬儀費はリースナブルで合意する

和歌山県 堀 正和
貧乏を笑い飛ばして減らず口

和歌山県 堀 正和
人間を見ると欠伸をし出す猫

和歌山県 堀 正和
相部屋のそれぞれにある闘病記

和歌山県 堀 正和
することがないから棄てられない

和歌山県 堀 正和
ボータスというリリーフのない暮し

和歌山県 堀 正和
ピカソなど解らなくても生きられる

和歌山県 堀 正和
ああ加齢箸が転んでも嘆く

和歌山県 堀 正和
勝ち組か親子の鯨ジャンプする

茨本市 藤井 正雄

草野球総監督がいる本郷

祖父昼寝ちよつと瘦せたと思う頬

豊中市 安藤寿美子

傘寿だとそれがどうした恋もする

スケジュールに昼寝タイムを挟んどく

弘前市 福士 慕情

街灯が切れて町内暗くなる

山菜の匂を知らせる道の駅

西子市 黒田 茂代

自分しか入れぬ利己主義の日傘

スーパーの袋に今日の二人分

鳥取市 土橋はるお

音痴かと思えば都都逸なら唸る

ジャンケンの練習しても無に等しい

和歌山市

古久保和子

内視鏡鬼の棲み処が見付からぬ

二の腕の弛みへ夏がやってくる

三田市 北野 哲男

湯泊場やいづれが麒麟どれが驚馬

サッカーのテンポと合わぬ京ことば

枚方市 海老池 洋

年金暮らし避暑には遠く扇風機

老妻から欠伸をもらう梅雨の午後

大阪市 前 たもつ

汗かいてしつかり嘘をついている

和歌山市

桜井 千秀

問い質されてきよとんと時間稼ぎする

松江市 川本 畔

ほのぼのと笑わせられて負けました

富田林市 池 森子

流されていますセンスとスピリット

高槻市 富田 美義

効果など問わぬ卒寿の畑仕事

鳥取市 福西 恭子

少子化にみんな姫さま王子さま

美作市 小林 孝子

またしても席ゆずられるそんな歳

寝屋川市 籠島 恵子

愛妻弁当なんて言われているらしい

大阪市 小谷 集一

勢いのあるうち次の策を練る

松原市 玉置 重人

起きて寝てなんにもせず食べている

奈良県 渡辺 富子

清流の蛭と母の話する

倉吉市 福光 京子

旧暦にほどよい色のかしわの葉

鳥取県 佐伯 やえ

山椒の実煮て届けた人がいる

東かがわ市 木村あきら

風化などしない八月十五日

大阪市 星野きらり

竹槍を知ってる老いにある余力

出雲市 園山多賀子

背を押され支えられてるシルエット

尼崎市 田辺 鹿太

母ちゃんと相合傘もいいもんだ

海南市 小谷 小雪

遅刻理由たんぼぼさんと長話

八尾市 高杉 千歩

在りし日の夫生きてる腕時計

西宮市 門谷たず子

今はひとり月と話をしています

鳥取市 春木圭一郎

他人からの批判すなおにまだ聞けぬ

東京都 清原 悦子

風の音ばかり聞こえてくるひとり

竹原市 正畑 半寛

花東を手渡す方がふるえてる

宇部市 平田 実男

一秒で心が通うご挨拶

大阪市 岩崎 玲子

落ち込むと亡母の好物食べてます

唐津市 岩崎 實

退院でベッド購入計画し

鳥取市 永原 昌子

わたくしの懐刀ボロ辞典

唐津市 久保 正剣

磯笛をイベントにして観光地

大阪市 三浦千津子

クラス会遠いロマンも披露され

武蔵野市 亀井 円女

次の世は女医か作家か通訳に

岸和田市 土橋 房枝
愛犬にもお礼言いたい嬉しい日

鳥取県 竹信 照彦
割著もただじゃ済まなくなるといふ

尾崎市 春城 年代
生涯に何度梅干し漬けたやら

八尾市 村上ミツ子
梅雨晴れ間抜き使われる洗濯機

大阪市 吉内 福世
目に青葉旅のチラシも目白押し

京都市 都倉 求芽
もてはやす棚田古々米どうなつた

美作市 山本 玉恵
あわてない子が一人居て落ちつけぬ

八尾市 吉村 一風
思い出を小出しに生きている余生

大和郡山市 坊農 柳弘
人嫌いしないひまわり天を突く

藤井寺市 太田扶美代
生きたのは試練痛いだるい眠い

鳥取市 岸本 宏章
寿司ねたの産地は知らぬ方がよい

東大阪市 北村 賢子
ベビーカー押す手メールを離さない

堺市 加島 由一
言いつのできぬ写真を見せられる

橿原市 安土 理恵
残るほど作りやっぱり食べている

大阪市 津守 柳伸
かけ継ぎと新調値段比較する

東京都 岸野あやめ
着ぬ服の溜まり溜まって老い進む

大阪市 伏見 雅明
何にでも首をつっこみ達者です

美作市 福原 悦子
あの頃の熱意に負けた腐れ縁

東かがわ市 川崎ひかり
バイキング腹八分では元取れぬ

鳥取市 近藤 秋星
老夫婦だけの田植えの無事折る

大阪市 神夏磯典子
回復の可能性あり 酒止める

唐津市 宗 水笑
ダイケアー今日のメニューはハトポツポ

寝屋川市 長濱 賢山
少し抱き少し歩かす孫の守り

堺市 矢倉 五月
尾っぱ振る犬はやっぱり得をする

堺市 村上 玄也
定年で男の値札外される

池田市 栗田 久子
雑談で似た境遇とふと気づく

姫路市 古川 奮水
汗掻いて麻婆豆腐で昼にする

大和高田市 鍛原 千里
雑巾が乾いています妻の乱

和歌山県 森下よりこ
煎餅をばりばり食べる人が好き

唐津市 市丸 晴翠
泣き言を書いた日記を焼く傘寿

堺市 和田つづや
終章の僕に謀叛の影もない

鳥取市 録沢 風花
合併になつても過疎は変わらない

大阪市 岩崎 公誠
古希すぎて二人三脚などしない

米子市 青戸 田鶴
ゆつくりと時が流れた昭和の日々

大阪市 小泉ひさ乃
片隅に風が運んだすみれ咲く

八尾市 西川 義明
平和ボケ朝から並ぶパチンコ屋

吹田市 大谷 篤子
話聞くわたしの主治医塩輪顔

枚方市 伊達 郁夫
同郷と判つて訛り搾り出す

大阪市 森田 明子
風に乗り羽根の力を見誤る

弘前市 高橋 岳水
深々と頭を下げておく深慮

八尾市 田邊 浩三
ゴキブリがまた隣からやつて来た

岸和田市 雪本 珠子
ベットから無償の愛をもらつてる

誹風柳多留 一篇研究 12

山口由昭・小栗清吾
伊吹和男・山田昭夫

増田忠彦

清 博 美

73 百人一首きうせん筋も言人有

山口 きうせんすじ【弓箭筋】は、弓箭とは弓矢のことで、弓箭筋は手相にある人差し指と中指の間にはいつている筋のこと。剣難の相を表す（『日国』）。

これは武士で歌詠み、「鎌倉右大臣」として百人一首に入っている源実朝のことを句にしたもので、その歌は「世中はつねにもがもななきさ漕ぐあまのおぶねの綱手かなしも」である。

実朝（一一九二―一二一九）は源頼朝の次男、兄頼家追放の後十二歳で三代の將軍となったが、実際の権力は北条氏に握られており、右大臣の肩書きだけで、政治の実権はなかつた。

た。歌は藤原定家に学び、『金槐和歌集』は彼の歌集である。しかし、二十七歳の時、鶴岡八幡宮で、頼家の子公暁に暗殺された。まさに「弓箭筋」である。

百人で九十九人ハ病死なり

安八桜3

おいに首とられたも有百人一首 天八125

清 賛

74 きつくと弘ハ出るが茶もくれず

山口 「きつきつ」は『日国』では猿の鳴き声と同じ「きつきつ」の項目にでており、その読むのかも知れない。べつに「きつきつ」（拈拈）もあり、意味は動作のてきぱきとしている様子である。

場所はどこで人は何者かは分からぬが、支

払いはきちんとしてくれるものの、愛想はなく、茶も出さないということである。作業場など武家の職人に対する支払いの様子などかもしれない。あるいは俗に伊勢屋と呼ばれるちちな商家などもあてはまるう。

払イ方けんへいらしく切しがあ

明三義6

寺の払を替るうとん屋

武一一20

小栗 賛。商売はしっかりしているが、ケチだという句でないと面白くない。伊勢屋としたい。

清 伊勢屋説賛。

75 しやう香をすへ膳てする女施主

山口 女施主とあるから亭主が亡くなって、その女房が施主となった場合であろう。女の施主則ち未亡人が仕事の席で経机か小さな机を据えて焼香をしている図、というだけの句である。「据え膳」には女が男を誘う場合、その準備ができていたという意味があるから相手は誰だか分からぬが、そんなことを暗示させていると取らないと面白くない句である。川柳には後家をからかった句が沢山あるからそのバリエーションであらう。

陰膳のすへぜんだからうまくいく 四〇26

小栗 賛。据え膳がヤマ。

清 賛。

76 扱なんときたすべいとかき立る

山口 分らない句である。「なく」に「泣く」を当ててみたが、「鳴く」もある。「かきたる」には「掻き立てる」もあり、「書き立てる」もある。「泣き出すべい」というべえべえ言葉も田舎の言葉のような気もするが、江戸でも使う。原典は「万句含安元礼3」で、前句は「大いふん事」である。

礎稿の責任上一つに絞つてあえて今まで出ていない駄労働を呈しておくが、諸賢の修正をお願いしたい。

想像を逞しゅうして、これを天候不順の不作で、年貢に困った百姓達の集会と見た。頭だった者が代官や領主に年貢減免の願い状を書く図である。窮状を訴える文章の書き出しを「さて何と泣き出すべい」と皆に相談しているのである。「かきたる」は「書き立てる」で縷々細かく窮状を書くことと取つてみたが、いかがであらうか。明和からこの時期にかけて全国的に一揆などが多かったことを付け加えておきます。

小栗 不明。駄労働として、軽井沢の女郎の無心の手紙でどうか。あるいは枕元の行灯の火をかきたてて無心。

ちつとべいてこづりますとかるいさわ

天元松 2

軽井沢どりやぬぐうべい待なさろ

二二乙 4

伊吹 関西では談義僧や浄瑠璃の三味線、という意見が出ていました。

さあそこが聞き所たとかきたてる

安元松 5

山田 右説でよいと思いますが……。

清 「べい」が談義僧や浄瑠璃と結びつかないよう思う。さりとて自説も無し。

77 かん応寺つきべりが先ツ二わり立ち

山口 谷中感応寺の富くじの句である。富くじは寺社の修理等勧進のために幕府の認可で行った興行で、享保十五年に護国寺、感応寺に許可したが、その後全国に広まった。江戸では谷中感応寺、湯島天神、目黒不動の三カ所が「江戸の三富」として有名である。他に芝神明、両国回向院、根津権現など数カ所で行われている。当たりくじは千両から五十両までであったという。富札は二朱から一分で、

今日の宝くじなどから考えるとずいぶん高いものである。

抽選は箱に入った木の番号札を錐の長いようなもので突いて当たりを決める。しかし、当たっても賞金は満額貰えるのでなく、世話人等への謝礼など冥加金と称して二割を引かれたらしい。

主題句はそのことを詠んだもので、木札を「突く」に米を「搗く」を洒落、二割の冥加金と米の搗き減りを掛けたのがミソである。玄米を白米に搗くと丁度二割万穂となつて減つたらしい。

一チの富どこのかのものがとりハトリ

安六松 6

当ツたら大へんといふ富と鯉

九三 37

小栗 賛。

『守貞漫稿』では、

また突き止め千両を得る者より、その一分百金を修補の料と号して催主に止め、また百両を札屋に頒ち、その他諸費と号して四、五十両を除き、千両富その実を得る所大略七百余金なり。平の当りに至るまで各これに准ず。(岩波文庫)

とある。ウムをいわず搗き減り三割ということか。

清 賛。

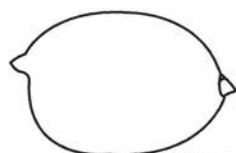
共選欄

檸檬

抄

抄

(薫風書、カットとも)



引く

仁部 四郎 選

深呼吸だろうゆつくり潮が引く
引き算ばかり上手になつてゐる家計
定価から三割引きにまた釣られ
腕白も気を引きたくて石投げる
意気込みは地球まるごと地引き網
引き返す勇気がなくて掘る墓穴
引き返す勇気りーダー持つてゐる
一步引く事を覚えて輪に溶ける
引き算を考へてから役受ける
引き算が得意になつた定年後
一線を引いて近所のおつきあい
くじ引きで自治会長になりました
引き継いだ家督まつわる蝶の群れ
我田引水それで美田と言へますか
引退の花道もなく押し出され
勇退の美名を借りて辞職する

島取市	岸本	宏章
奈良市	宮口	笛生
和歌山市	坂部かずみ	
唐津市	井上	勝視
和歌山市	古久保和子	
池田市	上嶋	幸雀
大阪府	澤田	和重
大和郡山市	坊農	柳弘
岸和田市	井伊	東吉
三田市	堀	正和
大阪市	松尾柳右子	
河内長野市	坂上	淳司
寝屋川市	太田とし子	
和歌山県	三宅	保州
大山市	金子美千代	
香南市	近森	功

引く

藤田 泰子 選

引き算は嫌い足し算は大好き
引く事は押し切るよりもむつかしい
ここからは入らないでと線を引く
引くも愛突つばねるのも愛だよな
欠点を割り引きしても好きは好き
四捨五入愛の深さを引き裂いて
引き時だ花も咲かした実もなつた
引き際は綺麗で男名を残す
引き際は飾つてあげよ種を播く
引き算を覚えた日からの憂鬱
自己破産そんな引き方だつてある
ここいらで幕を引きたくなつてくる
引き潮になれば波まで裏返る
一番でいると気楽に生きられる
究極の引き算わたくしも消える
引きのばしされては困る顔写真

和歌山市	坂部かずみ
岸和田市	堤
大阪市	榎本
東京都	舞夢
大阪狭山市	矢野
富田林市	梓
香南市	近森
尼崎市	春城武庫坊
堺市	矢倉
大阪市	五月
大阪市	井丸
豊中市	昌紀
京都市	前
大阪市	安藤寿美子
大阪市	高島
和歌山市	小谷
古久保和子	集一
渡部さと美	

引く事を常に知つてゐる太郎冠者
一步引くポーズでチャンス狙つてゐる
亭主関白後ろの妻が綱を引く

引き算をすると私が残らない

欠点を割り引きしても好きは好き

いさぎよく引けと他人事外野席

たられれば引き算ばかりしてる人

引く潮にあるだけの愚痴こつけろ

ロボットに野菜の双葉間引けまい

引き返す涙はいつか糧になる

年金へ引き算ばかりうまくなる

一步引く毎背な少しづつ丸くなる

引き算がまた違つてゐる父のメモ

引き立てる役にそろそろ飽きてきた

引きのばしされては困る顔写真

どたん場で我田引水見てしまふ

補助線を引いて未来が見えてくる

引く事も十指におしえ込んであり

半歩ずつ引いて痛みを分かち合ふ

秀句

晩学へ辞書引く農婦の丸い文字

久々に夫好みの紅を引く

一步引いて来たら相手に気をつけろ

軸吟

議事堂へ民を引き込み何見せる

松江市 安食 友子

大阪市 小谷 集一

竹原市 石原 淑子

大洲市 花岡 順子

大阪狭山市 矢野 梓

唐津市 宗 水笑

八尾市 山本 宏至

八尾市 宮崎シマ子

鳥取市 有沢せつ子

豊中市 吉田あずき

神戸市 木村貴代子

弘前市 宮崎ヒサ子

美作市 小林 妻子

藤井寺市 太田扶美代

大阪市 渡部さと美

鳥取市 吉田 弘子

豊中市 水野 黒兎

鳥取市 土橋はるお

河内長野市 山岡富美子

出雲市 小白金房子

西宮市 石野 昭代

美祿市 安平次弘道

引き金は前頭葉の鈍りから

引くことを学んで壁をひとつ越え

幸せを数えて今日の暮を引く

引く癖があつて横綱にはなれず

草を引く怒りだんだん解けてくる

引き返せる位置で洗濯しています

引き立てる役にそろそろ飽きてきた

引き算もたまにはいいな血糖値

一步引いて来たら相手に気をつけろ

ドアよりも引き戸が楽で日本人

引き算が好きでお金が貯まらない

職引いてやつと本音を吐いている

うしろ髪いいのですかと発車ベル

私を空っぽにして潮が引く

もう引けぬ砂にまみれた自衛隊

ホテルの引き出しで眠っている聖書

口紅も引かず走つた事がある

一線を引いて守っている自立

人間の引き際喰う落ち椿

秀句

煩惱の引き算零になり難し

どこまでが日本の海か線を引く

引き際の美学と棘を飲みこんだ

軸吟

前向きに生き後さりなどしない

和歌山市 玉置 当代

堺市 加島 由一

羽曳野市 徳山みつこ

宇部市 平田 実男

吹田市 大谷 篤子

東大阪市 谷口 義

藤井寺市 太田扶美代

鳥取県 羽津川公乃

美祿市 安平次弘道

大阪府 前田 ゆい

三田市 久保田千代

西宮市 井上 松煙

堺市 和田つづや

橿原市 居谷真理子

羽曳野市 三好 専平

和歌山県 三宅 保州

寝屋川市 籠島 恵子

シドニー 坂上のり子

池田市 上嶋 幸雀

岸和田市 井伊 東吉

吹田市 穴吹 尚士

堺市 志田 千代

ポーズ

神原 文選



抱きしめる母のポーズはマリア様
青田風自由自在にポーズとる
振り向いてくれる笑顔にあるポーズ
大黒柱何時も気取った態度とる
揺籃のポーズに残る子守唄
ブライドをまだ捨てがたく背を伸ばす
カマトトのポーズ上手に騙される
万緑に老いを忘れてるポーズ
散って行く花はポーズを考える
どうポーズしてもこまかせないお歳
一ポーズ置いて反論攻めてくる
丸い鼻とてもやさしいハイチーズ
バラロイドちよっとおどけてみるポーズ
上辺だけ謝罪のポーズとるトップ
三猿に学ぶ男の肩が凝り
空振りやさそいポーズだったとは
湯煙の妻のポーズも捨て難い
ふるさとにポーズは要らぬ山みどり
写メールがポーズとる花見逃さず
一瞬のポーズが芸の第二章
迷いから抜けて白馬に鞭をうつ
呼鈴にうたた寝の目がポーズする

徑子 道子 伊津志 ルイ子 とし子 登美代 シマ子 敏子 典子 玄也 富子 重人 志華子 東吉 銀波 半寛 慕情 順子 千里 四郎 一風 公誠

ポーズには出さず熱意を溜めた亀
夏を描く女性のポーズ眩しくて
風呂上り雀ぐらいいは許しましょ
どなたにもポーズ変えない冬のバラ
雲のポーズに今日の天気を確かめる
それなりのポーズで猫の甘えよう
自信あるポーズ十五度ほど斜め
意地悪バアサンの丁寧なお辞儀
好きだから無視したふりをしてみよう
イナバウアー真似て父ちゃん寝たつきり
雲行きが変わるポーズを入れてみる
ジョーカーが来たのがわかる目の動き
求愛のポーズカマキリ命懸け
おねだりのポーズが上手い旅仕度
良い人と言われポーズが崩せない
佳

英子 孝一 きらり 扶美代 愁女 たず子 哲男 充子 寿美 恭昌 理恵 まみ子 柳弘 妻子 碧 時雄 千代 みつこ 朝子 かおり 遠野

ポーズとる人などいらぬ大自然
ハイポーズした写真だけでもいます
入道雲エイエイオーの形して
プロポーズ受ける両手の待ちぼうけ
二輪草歌うポーズが照れている
人
女関で仮面剥がしている夫婦
地
イナバウアー私はイの字くらいまで
枝垂れ柳とポーズを競うのも女
軸
澄んだ目で今を感謝の猪口と猪口

青春を奪った紙は赤かった
焼いもにびったり似あう新聞紙
孫の守り折紙だけが共通語
アイロンで魔法のように障子貼り
公園のトイレに紙のある平和
棺には紙とエンピツ入れといて
我が句帳専ら折り込みのチラシ
硬貨より紙幣を好み神ほとけ
お捻りが飛び交い拍手村芝居
夕食はチラシで決めるお献立
中身より包み紙見て値踏みする
おだちは紙にくるんだ飴三つ
紙コップ持たされ並ぶ胃検診
古文書に和紙の息吹きがまだ残り
一字違い紙切れになるジャンボくじ
民芸紙一枚ずつのいのち渡く
酢こんぶと夢遊した日の紙芝居
白紙には何でも書ける夢がある
履歴書の余白が多いフリーター
カーネーション抱く幸せなセロハン紙
紙漉きの卒業証書誇りとす
オモチャより障子破りが好きだった

正剣 ばっは 直 幸雀 かおり 玲子 淳司 雅明 注湖 五月 孔一 喜子 輝夫 俊子 遠野 雄々 隆盛 婦美子 方子 茂代 檳榔樹 千代

紙

猪川由美子選



人情が紙より薄い都市砂漠
 子どもの日兜に変わる新聞紙
 過去全てに水に流して再生紙
 茶器が消え集うテーパー紙コップ
 うす紙が剥がれ快気音を聞く
 一匹も金魚掬わずあみ破れ
 実印を押した白紙が命取り
 紙袋社名隠して持っている
 画用紙へ夢が膨らむ團児の絵
 駅弁が美味しかったと表紙見せ
 未練まだ紙に残した染みのあと
 壁紙にモナリザ貼ってにらめっこ
 感謝状以下同文の列にいる
 敵か味方が教えてほしいリトマス紙
 屑籠でゴソゴソ動く紙の意地

恭昌 水笑 盛夫 勝巳 ゆきの 高明 正雄 恭昌 准一 日の出 敏子 早人 強一 一風 次男 充子 像山 千里 一粋 房枝 一粋 慕情 市丸晴翠

投げる

山田 耕治選



大器晩成まだ匙投げず待ち続け
 思い出の修学旅行枕投げ
 変化球投げ澄ましてる妻の顔
 さりげないジョークが疑問投げかける
 投げキッスひょいと掴んで食べる真似
 打たれてもこれしか持たぬストリート
 頑張れとまなざし投げてくれる友
 何もかも昭和の物や投げ捨てる
 ゴミ箱に投げてもらうも届かない
 陶器市投げるお皿も買ってくる
 荷を降ろし足を投げ出す母の家
 丸投げで大手が稼ぐ資本主義
 投げられたのは愛のまなざしだと思っ
 かけひきは無し直球のプロボウズ
 はばかり孫とはかわす投げキッス
 投げかける笑みが心にあつたかい
 夫婦喧嘩らしい食器の割れる音
 やつと義理済ませて放り投げる足袋
 少年が投げるさらさらするボール
 愛語めた非常袋を投げてやる
 子の問いへ父はしっかり投げ返す
 クッキングパパに丸投げして勤め

ルイ子 日出子 一風 一風 北朗 善信 富子 福世 柳歩 勝規 のり子 徳三 茂代 美千代 房枝 英旺 玄也 百合子 充子 幸雀 哲男

愛投げて今か今かと待つ波紋
 さりげなく投げキッスして終電車
 一球で勝利投手になるルール
 投げ返すウイंक妻がどうしたの
 投げられた小石拾って揺れないやむ
 あたなにか言葉へ笑顔投げ返す
 下心ないから直球投げられる
 座布団を投げてられてこそ大相撲
 投げ出した休耕地にも税が来る
 皿投げたカケラは拾わねばならず
 この頃の妻は直球投げてくる
 投げ入れの花にやすらぐ梅雨のウツ
 思い切り泣いて白足袋脱ぎ捨てる
 万感の思いを込めた変化球
 愛乗せたあのブーメラン戻らない

英子 修 水笑 かおり キヨミ ミツ子 (園)正和 方子 千代 強一 雅枝 伊津志 扶美代 孝一 高栄 勝巳 あやめ 愁女 孔一 不二 美紗子 宮崎シマ子

初歩教室

題 — 三宅保州

三宅保州

【ワンポイント・アドバイス】

原 ゴロだゴロ三遊間をゴロで抜け たん吉

課題の「ごろごろ」は、石、雷などがごろごろ、家でごろごろのような使い方の意味です。「ゴロ」は打球のことで意味が違います。辞典を活用する習慣を身につけましょう。

原 言葉より身体が知らせる空腹感 宣子

「空腹感」だけでは「ごろごろ」と言い切れないのでは。中八・下六音字もリズム感を損なっています。

添 ごろごろと空腹感を告げられる

原 ごろごろに蚊帳へ竦んで臆隠す 義章

原 ごろごろとなる雷に臆隠す 順子

原 ごろごろと雷聞こえへそかくす 稔

原 雷がごろごろ鳴るとへそ隠す アヤ子

誰もが思いつく発想で同想句がたくさんあります。せめて意外性でも詠みましよう。

添 遠雷でも蚊帳へ逃げ込むおとうさん

添 雷は臆出しルックどう思う

原 喜怒哀楽を喉でなる猫のタマ 利子

タマと言えは猫ですね。それを猫のタマと詠むと字数が無駄になり冗長にもなります。

「川柳は省略から始まる」という所以です。

添 鳴き方で喜怒哀楽のわかるタマ

原 幸せは 家族ゴロゴロ 笑い声 たか子

初投句の方です。ルビは読み難い人名、地名等のほかは不要です。五・七・五音字ことの一字空けも不要です。句自体は良い句です。

【添削・批評句】

原 雷鳴が空に轟きさあ夏だ さとし

添 雷鳴が夏だ夏だと告げにくる

原 猫丸く喉ごろごろと寝てる振り ミヨノ

添 寝た振りをしながら喉を鳴らす猫

原 ごろごろのミケが寝る妻の膝 はじむ

添 妻の膝今日も占有してるミケ

原 夏バテか雷ならぬ腹が鳴り 益子

添 夏バテも知らぬ食欲腹が鳴り

原 肉よりも芋がごろごろ母カレー 和子

原 じゃが芋がごろごろカレー母の味 萌

添 芋ばかりごろごろおふくろのカレー

原 ゴロゴロと小川で小芋洗う桶 きぬ子

添 思ひ出は小川で小芋洗った日

原 長雨にごろごろ石が命欲む こずえ

添 長雨に命を呑んだ山崩れ

原 裏山から地震で岩がごろごろと 綾乃

添 裏山の岩が崩れてくる不安

原 草の上ごろごろ転ぶ生石山 (白) 信子

添 草原をごろごろ転ぶ里の山

原 飽きもせずごろごろ過す雨降る日 智加恵

添 ごろごろと過こしてしまふ梅雨しどど

原 遠雷と聞き流される妻の愚痴 宇乃子

添 遠雷の如聞き流す妻の愚痴

原 妻が買いカートごろごろ押す良人 松風

添 妻買った物をカートで運ばはされ

原 空港へ弾む心を引いて行く 乃りこ

添 空港へ行くトランクも弾んでる

原 ごろごろと荷車引いたものでした 秀四

添 思ひ出は荷車引いていた昔

原 ゴルフ球部屋内外にごろごろと 雅代

添 部屋の中まであちこちとゴルフ球

原 ごろごろといらん物買いせまい部屋 道子

添 いらん物買つてごろごろしてる部屋

原 ごろごろす老果けるぞと叱咤かけ 美恵子

添 ごろごろとしてたらあなた呆けるわよ

原 座布団を枕にごろ寝蟬しぐれ (柳) 節子

添 蟬時雨聞きつつ昼過ぎのごろ寝

原 ごろごろとしては太つていく牛だ 柳歩

添 食べられるためにごろごろ肥る牛

原 天下りごろごろ居てる民営化 早人

添 民営化してもごろごろ天下り

原夫の留守昼はごろごろ夜出前 (吉) 節子
 添夫の留守ごろごろとして出前取り
 原ゴロゴロと暇らしい子と慕参り
 添ごろごろとしてる子誘ひ慕参り
 原ニートごろごろ高齡者も気が揉める 徑子
 添ニートごろごろ年金族も気が揉める
 原お相手で無駄な一日惜しまれる 冷子
 添ごろごろとした一日が惜しくなる
 原休みにてごろごろ出来るさて次は 清
 添何するかごろごろとして考える
 原職ひいてごろごろ部屋を渡り住む 寿々女
 添牢名主の如くごろごろ定年後
 原ごろごろとゆとりの時は気が安堵 俊子
 添ゆとりある時はごろごろしています
 原ごろごろの我が家滞滞連休日 映子
 添連休は家族揃ってごろ寝中
 次の三句は同相句です。

原ごろごろと一日過し悔やまれる キヨミ
 原しんくろごろごろすればなおつかれ 忠子
 原一日をごろごろ過こしくたびれる 千代子
 添ごろごろと過し余計にくたびれる
 【少し工夫すれば佳くなる句】

原ごろごろと喉を鳴らして膝の上 光子
 添喉ごろごろ鳴らしあなたの膝の上
 原好い人はごろごろ居てもまだ独り 幸
 添好い人はごろごろ居ても所帯持ち

次の七句はスペースが足りないので、原句は省略して添削部を傍線で示しました。
 添ごろごろの道選んでる土踏まず 弘子
 添残り物食べてごろごろ肥り出す (河) 洋子
 添雷鳴に脅えながらのパーバット 賢山
 添ごろごろとテレビ番して家事手抜き みち代
 添ごろごろと場所わきまえぬ腹の虫 貞月
 添ごろごろと昼寝むさばる妻の留守 賢治
 添ごろごろして秘かに出番待っている つよし
 次の六句はあと一ひねりで佳句になります。

原ごろごろと臍出しルツク狙ひ打ち 美智子
 原ごろごろと町の空き地に粗大ごみ 福世
 原ごろごろとお腹が知らずお昼じき 京子
 原ごろごろの道路無くなり温暖化 千華
 原資源ない国に空き缶ごろごろと 像山
 原ゴロゴロと過す女の骨休め かずみ

【佳句】
 目の中に中国製の砂の粒 藤朗
 目の中で昼間の黄砂まだ威張る 雅明
 ごろごろと舌に障って溶けぬ愚痴 (州) 信子
 雨上がり手押し車のご出勤 浩三
 土だけの鉢がごろごろ庭の隅 玲子
 松茸がごろごろ生えていた昔 武
 子供の頃駆け回った蚊帳の中 イセ
 原つばをごろごろ転げ虫になる 夢

ごろごろとしても空いてくるお腹 のり子
 ごろごろとしながら体力溜めている 那珂子
 ごろごろと寝ながら明日を摸索中 起世子
 ごろごろと出来る畳の部屋がよい 章司
 後悔の二字がごろごろ胸の底 孔一
 揉まれても丸うならない石がある ただよし
 かみなりに隙をつかれた避雷針 (高) 洋子
 【今月の推せん句】
 その程度の方はごろごろおられます 長島亜希子

どういふ場面や状況かを読者にイメージしてもらふ余韻と広がりのある句です。
 いつまでも秋を待つてる居候 河津寅次郎
 なかなか味わいのある穿ちが利いています。

ごろ寝して丈夫に育つ大家族 岡本 昇
 一世代前はごろごろいた子供 藤永実千代
 この二句は並べて鑑賞したい。ひと昔前までは子沢山で大家族が当たり前であったのに、今や少子高齢化一行く末はどうなるやら。あこがれたごろごろ暮らし持て余す

あれもこれも夢もうたかたと消え。 三宅 満子
 【私の句】
 開拓の鉄に石ころ無数なり
 活断層よ座り心地が悪いのか

秀句鑑賞

同人吟 藤村 亜成

— 7月号より

亡父高鷲亜純は民衆的立場を自覚する詩人

として、麻生路郎の作品に出会ったことで、詩人的立場を自覚する川柳人を促す契機となり、昭和36年『詩川柳考』を發刊した。當時論客として河野春三（S 37刊・『現代川柳の理解』）や山村祐一（S 35刊・『短詩詩論』）等と柳論に火花を散らしたが、いずれも共通するのは、川柳作家が詩的精神を持つことにより文学的な価値を高めようとしたことだ。それから45年も経た今もなお、従来の三要素の概念にのみ捉われている川柳作家が多いのはどうしたことか。「命ある句」とは作家のパーソナリティから溢れでる分身である。それは既成概念に捉われぬ詩的精神によるねばならぬ。そこから生まれた作品が、その作家を形成する個性の帰結として、穿ち、ユーモア、軽みの、傾向が強いということであれば当然受容できる。筆者は先に述べた先人達が、心血を注ぎ現代川柳の方向性を示したことを真摯に受け止めたと思うが故に、自身の非才を嘆くばかりなのだが。

ありふれた暮しにもある句読点

山本 希久子

絶え間なく起きる事件を抱えながら、世の中は動いている。それは日常の些細な暮しでも同じ。どこかで区切りをつけないと息が持たない。句読点の解釈により、メリハリをつける意味にもとれる。が、下五が言い得て妙。触れないで下さいわたしシャボン玉

黒田 茂代

いつ破裂するかも知れない不安定な精神の状況を巧みに表現している。デリケートな女性の心理描写である。

神様の答えが少し違ってた

安平次 弘道

願いことは叶ったが、自分の思いとは微妙に違う。聞き届けられなかった願いにどこか不純はなかったか、平易なことばに自戒が込められている。

足して二で割って迷彩服を着る

高橋 宏臣

複雑な人間の生き様。ややこしい表現が却

って句意を引き立てる。表現の面白さに引きつけられた。

口下手でいい真心の掌が温い

伊勢 八重子

社交辞令はうんざり。寧ろ口下手だから必死に伝えようとする誠意が嬉しい。慰めは要らぬ。握った掌は涙の出るほど温い。

手違いにだんだん馴れてくる余生

都倉 求芽

今まで繰り返してきた未知・未熟が故の失敗。その都度くよくよし思い思った。経験を重ねるうち切替えも早くなり、対処にも馴れてきた。余生に多少の自信も窺える。

絵の具箱に足りない色を探す旅

山田 葉子

何故充たされないのか、自己の内奥に足りないものがある。その何かを探りあててまで精神遍歴が続く。終りのない旅にならなければよいが。比喩を的確に用い内面を表現。

長者の扇子心のまま揺れる

吉岡 修

対局風景。微動だにせず長老に入る棋士。表情は変らず。手にした扇子だけが繊細な心の動きを見せる。ユニークな着眼。

鶏は大地を知らず生み続け

酒井 一壺

人間のエゴを痛烈に批判。帰巢本能を阻止されたケージの中の鶏。宿命の恐怖と罪悪感。

藤棚のうす紫の小宇宙

坂上高栄

藤棚に広がる薄紫の世界を小宇宙に譬え、同化してゆく作者の心境に、大宇宙に通じる宇宙の意志を感じとっているとするれば、この句は大きくて深い。哲學的な宗教観さえ読み取れぬことはない。彼女の一連の作品には、老人の達観したまなざしがある。

諦めて眠り諦めずに起きる

太田とし子

凡人の悩みは尽きない。一旦は諦めても、夢の中で潜在意識として出てくる。リフレインの効果でユーモアさえ漂うが本人は真剣だ。小心者の筆者には共感できる。

妻がいて長閑な海にしてくれる

山口光久

こせこせせずおらかな妻。少々の波風が起きてもおだやかに治まってくる。側に居ると気が休まる。ほのぼのとした実感句。

物凄く夕陽見ている跨線橋

木本朱夏

真赤な夕陽に染まってゆく情景。感極まった作者の感動が、直截的な上五に凝縮され成功している。率直に感動が伝わってくる。

信じていた人がころりとまる虫に

上地登美代

この句を詠み救われるのは、裏切られた悲憤感がない。ユーモアさえ感じさせる余裕がある。作者の人柄だろう。破調ではあるが、リズムも不自然ではない。ころりとまる虫に、が巧みに活きている。

古希過ぎてまだ売り言葉買っている

伊勢田穀

老いてなお血氣盛ん。元氣な老人の姿が想像され微笑ましい。まだまだ七十代、老いいる歳ではない。若い者に負けぬ気概がある。

身の丈に合わず暮らしが難しい

坊農柳弘

定年退職し年金生活に入り、収入も激減するが、膨らんだ生活を急に収縮するのは難しい。小遣いも乏しくなる。馴れるまで大分時間がかかりそうだ。身につまされる。

汚された海に抱かれてゆく夕日

岸桂子

汚染されてゆく生活環境に次第に同化される姿を夕日になぞらえている。抱かれてゆくという言葉で句意が読みとれる。力量のある詩的センスの持主だと思う。

干魚が一匹じつと焦げている

森茂美

じつと焦げている干魚を心象的なイメージとして捉えているとすれば、やるせない。次第に枯れ、朽ちてゆく姿を、干魚をじつと見詰め想像している作者の孤独と絶望。

せめて嘘きれいな彩に塗り上げる

喜田准一

男としてやむをえず嘘をつくことがある。後めたいが引き返せない。せめて嘘を通すなら後腐れのないきれいな嘘に仕上げたい。ひらきなおりの中にも優しさがある。

反論もせずに微笑だけ残す

池森子

反論されれば却ってすつきりするの、微笑だけ返す。こちらの腹を見透かされているようでやりきれない。微笑だけが臉に焼き付く。口で勝っても傷ついたのは、私だった。人のためにこそ自分にも還る

植村喜代

ああそうですかと言ってしまえば、それまで。当前のようでも、中七の「してこそ」を見逃がしてはならない。自身に対する自省の意志が込められ、故に説得力がある。

紙数が足りないのに他に印象に残った句

猜疑心強いおとの目は怖い 下田茂登子
可も不可もない毎日に飽きたら 小谷集一
一番の味方がちよつと邪魔になる 太田扶美代

— 水煙抄

秀句鑑賞

— 7月号から

谷口 義

うっかりとこの世に降りてきた私

遠藤 那珂子

うっかりと降りてきて八十年余りを生きたことになり、この世はうっかり出来ぬところですが、ゆっくりしていつて下さい。

溜飲を下げてゆっくり血を拭く

酒井 美姜子

溜飲は下げておかねばなりません。うまくいききましたね。ゆっくりとお血を拭いて今夜はよく眠れます。

だんだんと素顔に合ってきた仮面

森田 明子

長い間に仮面もなじんで、素顔と区別がつかなくなり、良い素顔になりました。

血庄も脈も正常医者に行く

寺井 柳童

今日は気分が良いから血圧が下がっているだろう、と父は医者に行っていました。気分が悪い時は医者にも行けません。

うけたのでつぎつぎほらを吹いている

石野 照代

そのサーピス精神に脱帽、つぎつぎほらを吹いて煙に巻いて下さい。頭の体操です。

妻の字は毒とにているだけです

犬だけに教えておいた俺の過去

宮守 正博

妻と毒、何の関係もないようですが下の字が女と母、意味あり気です。考えたこともなかった句。目から鱗が落ちました。

ナメクジの動きに揺るぎない自信

北田 ただよし

ナメクジも自信を持って生きている。こうと決めたら行くのです。

叱られてそれでもママに縋りつく

中尾 哲代

幼い子供の事件が続いている。いつの世も子供はママだけが頼り、大切に育ててほしい。生臭い記事を読んだら手を洗う

河野 桃葉

手を洗っても消えないが、生臭い記事の多いこのごろ、手を洗って清めるしかないのです。

責任の持てる顔です薄化粧

田中 すすず

薄化粧は人を安心させますが曲者もいます。

ローソクの燃えつきるまで見届けろ

福光 京子

怖いような句。人の命の最後を見届けるのは勇氣も覚悟もいり、迫力がある句です。

老いの身にクイズみたいな申告書

金森 徳三

私にも経験があります。試されているのかと思うことがあり、生きにくくなりました。少しだけ心配事があり元氣

川島 良子

生きているといつも何か心配事があります。またそれでエネルギーが湧いてくるのです。

褒められて妻に自慢ができぬ事

葛西 清

電話には弾んだ声で出ています

山根 邦代

遠くから見ている方がいい我が家

神野 千恵子

消費税なら俺だって納めてる

高野 不二

ひよつとした弾みで狸山を降り

菅田 かつ子

越せたのは寿命だけですお父さん

安達 厚

あんなにも遠回りした走馬燈

尾畑 なを江

役人のにぎにぎ

穴吹尚士

役人の子はにぎにぎをよく覚え

にぎにぎとは赤子の握り拳と袖の下の掛け言葉である。役人への付け届けが必須であることは、国を越え時代を超えて変わりはない。

この川柳が詠まれた宝暦の頃は、かの賄賂で有名な田沼意次が頭角を現しつつあり、幕府の上から下まで贈り物は常識であった。

現代でもお中元やお歳暮は盛んであり、人様に無理を頼むとお礼は必要である。但し、公務に関連して金や物を贈り、受け取ると、刑法の第二十五章「流職の罪」に該当する。

しかし江戸時代には「流職の罪」に関わる規定はなく、役人は貰い得の職業であった。冒頭の川柳の前句が「運の良い事運の良い事」である所以である。

百万都市お江戸の五十万人の町民からお上の方を見ると、せいぜい町奉行所までがお役所で、その上はほとんど関係がない。

町人には、家康以来の自治組織があり、そ

の頂点は「町年寄」が三家、その下に多くの「名主」がいて、多くの「地主」や「家持ち」を束ねる。地主や家持ちは、地借り・店借り（たながり）・間借りを束ねるが、手が回らないから「差配人」を雇い仕事をさせる。これが大家である。

さて町奉行所にはいろいろな役人が居るが、最も身近なのが町を巡回する「同心」である。南と北の両奉行所にそれぞれ十二名（定廻り・臨時廻り）合計二十四名で五十万人の町人を警備していたことには驚かされる。基本的には自治組織や、五人組制度などがしっかりしていたのだらう。町々の境界には必ず「自身番」があり、町役人（ちょうやく）にん一家持ちや差配人が詰めていた。また夜間は閉じる「木戸」があり番太郎が雇われていた。

武士の給与は、特別な働きでの加増や高い地位に就いた役職給がない限り、先祖代々変わらなかった。春闘のない時代である。サラリーは米本位制だが、日常生活は通貨本位制であり、サラリーである米を札差（両替商）で通貨に交換して生活に使用した。

「にぎにぎ」を欲しがる同心の収入はどれ位だったのか。同心は扶持米取りで、三十俵二人扶持だった。一人扶持は五俵なので合計

四十俵。宝暦の頃に、飯に一升十円としても一俵四万円、年収は百六十万円という安さである。屋敷は無料の官舎だから江戸開幕の頃は暮らせたのだから、世の中が繁栄になりインフレが亢進した中期以降は、八丁堀の屋敷の敷地の一部を町人に貸し、手内職をして食べるのに精一杯だったそうである。

ちなみに一丁前の大工は日当六百文は取っていたようで、年に三百日も働けば年収は、二百万円を超える。裏店住まいの大工よりも同心の給与が安いことから「武士は食わねど高楊枝」と揶揄された訳である。

結局のところ、足らない分はどうにか稼がない。大店や水商売はいつ何処で何が起きるか知れないので、かねて誼（よしみ）を同心に通じていて、月々それなりの「顔つなぎ」を払ったし、巡回中の同心が店に立ち寄れば、それとなく袂に包み金を落としたそうである。（但し内勤の同心には余禄はなかった。）

同心の下に「岡つ引き」というのが居るが、これは公職ではない。同心の個人的な使用人に過ぎず、同心からは名目的な僅かな給与のみである。実質は町内の大店からの心づけや、十手を振りかざした「にぎにぎ」で暮らしを立てていたいらしい。銭形平次親分のような岡つ引きは、現実の江戸には居なかったようだ。

本社七月旬会

ア
ウ
イ
ー
ナ
大
阪

(受付—朋月・俶子)
(清記—惠子)

一步

また明日なんときれいな罌だらう
金髪がこんな夜中に歩いてる

マネキンの着ている服がよく売れる

罌かける人よりかかる人が好き

只酒にやはり仕掛けてあつた罌

罌にはからぬウィルスとテロリスト

耳よりはな話に罌がはくそ笑む

落ちててもいい罌がしかけた罌ならば

食虫花の蜜たつぷりと飲んで死ぬ

ネオンきらきら罌にはまってみたくなる

泥水も呑んで浮世の罌を知る

蒲焼きといも焼酎が置いてある

罌だつたバレンタインのチョコレート

罌だとは思ふが水で溶く絵の具

店じまいのチラシにいつも引つかかる

テレビ点ければ次から次と甘い罌

うつくしい罌だゆつくり陽が沈む

完璧です掘つた自分から分らない

優しさこそそのうちどちらかが嵌る

転職を追う履歴書に罌がある

嵌つた罌を楽しんでいるゆでたまご

マッサージ上手なのよが罌だつた

空腹へ罌を仕掛けて待っている

父母の罌お見合いだつた食事会

佳

罌にかかつた振りも結構おもしろい

初めての客にナンバーワンがつく

白羽の矢立てたとこれも罌だつた

罌と知つてついでに行くから大丈夫

保州

修

千恵子

東吉

昌紀

シマ子

理恵

耕治

昌紀

誠

咲二

扶美代

ますみ

泰子

深雪

恵美子

桜竜

美代子

元紀

ますみ

理恵

美代子

遠野

佳

いわゑ

咲二

代

シマ子

階段をのぼりきつたらおとし穴

人

居心地の良い蛸壺だ抜けだせぬ

地

いい人にされていました罌でした

天

ごちそうは罌でも食べることにした

軸

これは罌私がモテる訳がない

宿題「子」

高田 美代子選

幸せのひとつの子もよく笑う

どんな時も子は母さんを待っている

医者の子でなくてよかった蛙の子

子には子のおや見る権利何処にある

口答えしていいんだよ子供たち

少子化を嘆いて塾の背くらべ

子沢山みな宝石に育てる気

世話してや子供に因果ふくめてる

父の日に子が寸借を申し出る

につこりと母が笑えば子も笑う

二度童子わが子のように叱れない

教える子のコネに甘える二度の職

一人っ子肩の力は抜けぬまま

大人びた口を利きだす一五歳

父の後継者と太郎の輝く目

遠足の子等降りほつとする車内

子どもにはちゃんとモデルがあるのです

遠い子のことなど新茶入れながら

新一

和夫

茜

千枝子

好

賢子

淳司

春蘭

ばっは

良知

雅文

美智子

光久

能子

志代

たつお

義

玄也

洋

潤子

たもつ

咲二

佳

竹トシ

二人とも

ケイタイ

母さんの

子が三人

子を抱かぬ

長男に

百人の村に子供の声がない

私にいつかは叛くオモチャ箱

サ克蘭ボン子供の数が減つてゆく

どの子にも効き目なかったしつけ糸

子離れの背中に残照が痛い

見つめると青いリングはすぐ熱れる

不器用な子の行く末が気にかかる

抱きしめた子等がわたしの今を抱く

親子して優等生の落し穴

子を二人連れてる臨月のおなか

息子とは扱いにくいものである

おれの子だ赤い服なと着るでない

未来まで見せてやりたい肩ぐるま

世の嘆き分母分子が割り切れず

佳

竹トシ

二人とも

ケイタイ

母さんの

子が三人

子を抱かぬ

子を抱かぬ

長男に

どの子にも

どの子にも

どの子にも

どの子にも

どの子にも

どの子にも

理恵

扶美代

恵美子

理恵

アキ

元紀

元紀

美子

千恵子

天笑

義

ばっは

千里

とし子

一風

一歩

慶一

太郎

希久子

恵美子

一筒

佳

いわゑ

天

軸

どの子にも

どの子にも

どの子にも

どの子にも

宿題「嘘」

松原 寿子選

マスカラのまつげが言わす軽い嘘
嘘のない世界にすると嘘をつく
嘘に嘘重ね孤立の北の国
針千本飲むよと小指慣れてはる
人さし指の先に溜めてる嘘まこと
かわいい娘のかわいい嘘は仕方ない
嘘少しませて雑談しています
嘘発見機みたいな妻の取り調べ
失言を綺麗な嘘で化粧する
不治の父に何を言っても嘘になる
あたたかい人だまある嘘をつく
七人の敵七色の嘘をつく
嘘から真でると思えぬ輸入牛
私のための嘘だと信じてる
美しい嘘を極に入れてやる
嘘のようおとぼけのよう味がある
どう嘘をついても母は騙せない
死に顔に最後の嘘をしゃべらせる
嘘の字はさびしい顔をしてみんな
その嘘を見破るジョーカー持っている
やさしい嘘だ虹いろに染めてある
嘘だらう母さんの目が濡れている
わたしの眼見ないで話すあなたの眼
爪塗って自分の嘘はすぐ許す
出来たての嘘を見舞いに持って行く
閻魔堂来れば小指が疼きたす
嘘はたのしい主人などおりません

乃りこ
雅明
東吉
一風
楓楽
見清
太郎
尚士
美義
保州
希久子
葉
ただよし
アキ
咲二
茜
三喜夫
幻四郎
太郎
篤子
アキ
ダン吉
幸雀
真理子
行兵衛
恭昌
典呼

大物の器にひとつウソがある
もう嘘はないかと顔を覗かれる
おふくろに見抜かれていた騙し舟
暖かい嘘は見舞いに効くらしい
自分に嘘ついて渡った橋もある
佳
男の嘘を蹴とばしました雨上り
煩惱が嘘もまじえて世を渡る
風呂敷を広げるだけの罪である
たわいない嘘の一つが笑えない
嘘つかぬ口を大事に磨きます
人
雨が好きあじさい彩の嘘をもつ
地
嘘つきの舌に盗聴器をつける
天
どたんばの嘘はしつばが見えてくる
軸
納得のゆく嘘を笑顔で聴いておく
宿題「恋」 柏原 幻四郎選

惠津子
咲二
淳司
行兵衛
楓楽
美子
れんげ
元紀
大輪
准一
惠美子
恵子
天笑

恋人が出来てケイタイ買う祖父
テポドンも邪魔は出来ない恋の道
何も手につかないほどに想ってる
老いゆく恋と貯金を両睨み
若い頃恋の相手は金剛山
年金の枠の範囲で恋をする
恋らしきものを数える半夏生
あの頃の日線で恋をしています
菌の見せつから始まる鰯の恋
歩けるうちに遠隔ラブをするつもり
ピンヒール恋も仕事も崖つ縁
タイガースに恋をしているお父さん
恋人は知りつくさないままがいい
まだら惚けかあさん恋をしてるらし
恋したらあばたもエクボほんまやな
人間の図鑑に恋の以前以後
ケイタイがとり持つ青い恋
七癖の一つのように恋をする
I Rで十五分ほど恋に堕ち
恋をしなさいとお説きになる尼僧
母ちゃんの恋のはなしがマンガめく
片思い冷凍保存して嫁ぐ
どさくさに紛れて恋が成就する
おばちゃんの変髪を染め爪を染め
佳
ラブゲーム終り男が泣いている
いつからか横顔ばかり見せる恋
楷書では恋という字が書けません
たった一度のくちづけでした通夜の席

洋
利昭
夕胡
則彦
一步
昭
惠美子
信子
一箇
美代子
良知
咲二
修
六助
太郎
真理子
希久子
葉
天笑
保州
月子
完次
義
たつお
楓楽
信子
正和
美子

恋の字を書く時今も赤くなる

(志) 千代

逢うてただ手をとるだけの年となり

耕 治

小走りて来た恋人の靴が脱げ

見 清

恋の字がまるくやさしく書きました

義 昭

初恋の話は妻にはせぬものだ

宿題「鳴る」

河内 天笑選

雷鳴がとどろきかつと梅雨明ける

淳 司

コンチキチン祇園の夏のお通りだ

いとお

ほんとうの鴉鳴いてる村芝居

保 州

鐘の鳴る丘が育てた逞しさ

幸 雀

耳鳴りが居候して十五年

千恵子

一つの音で鳴る百挺の津軽三味

洋

子の悲鳴届かぬ距離にある絆

郁 夫

一点リードへ藤川の腕が鳴る

正 明

江戸風鈴寅さんの声聞こえそう

満 作

地球上あつちこつちに修羅離子

文 雄

ひらめきがケイタイ鳴ってふいになり

好 雄

釣鐘の中へキツツキ逃げ込んだ

一 筒

呱呱の声開幕ベルが高らかに

三喜夫

百歳になれば鳴らしてファンファーレ

富美子

商魂が上手に鳴らす鉦太鼓

(矢) 五月

鹿寄せの笛ラッキィにでくわした

美代子

なぎさ

改札機鳴って犯罪者のように
古時計一番先に鳴っている

楽 生

ゴング響いて今人生の七周目

は じ め

先生が下駄を鳴らして小料理屋

扶美代

正確な体内時計が鳴っている

完 次

父さんの裸をねらうカミナリだ

泰 子

指揮棒の動き音楽器に変わる

惠美子

進軍ラッパの幻聴消えぬ熱帯夜

雅 文

ビートルズ鳴らしひとりの時満たす

良 知

むかし腕いまでは背骨を鳴らしてる

楓 楽

鐘二つ鳴らし留守番たのみます

六 助

人間の驕りへ鐘が鳴り止まぬ

美 龍

妻の小言鳴りをひそめていて不気味

夕 胡

トンボリの顔と言われたことがある

玄 也

定年バイザイギター掻き鳴らす

咲 二

お手でつないでゆつくり歩か靴が鳴る

淳 司

ゴールド免許クラクションなど鳴らさない

耕 治

梅雨晴れ間ウエディングベルに和まれ

桜 竜

木魚ボクボクぼつくり寺は欲まみれ

幻四郎

ピーヒヤラドンで終章がやってくる

寿 子

鈴が鳴り老母のおむつを取り替える

扶美代

山が鳴るもう人間は手を出せぬ

昭

離婚願望来年へ胸鳴らす

萩原典呼

平成18年度「第42回」加古川市文化まつり川柳祭

第3回 加古川川柳大会

日時 9月24日(日) 午前11時開場

※昼食は各自お済ませ下さい

場所 加古川青少年女性センター

4Fホール

加古川市加古川町北在家2717

079-422-8188

079-422-8188

079-422-8188

079-422-8188

079-422-8188

079-422-8188

079-422-8188

079-422-8188

079-422-8188

079-422-8188

079-422-8188

079-422-8188

079-422-8188

079-422-8188

079-422-8188

079-422-8188

みづのり

毎月24日締切・30句以内厳守

編集部

ローズ川柳会

山崎

君子報

あせつてるブッシュに冷えた麦茶でも
やさしくしめす点線の道しるべ
点を結び子供の敵を捕えねば
改めて世界地図知る大相撲

雨の日は雨と話して逆らわず

哲子
トミエ

メントクサイ目下の敵と四つに組む

貴代子

欠点も個性にかえる絵の具皿

美龍

欠点が時に魅力に見える人

いわず

不揃いの皿捨てがたく暮らしおり

年代

石庭の点に心をいただけり

義子

最高の母の日でした温い風

君子

むらくも川柳会

毛利

幸報

不景気で財布の口をかたくする

幸

いつ見ても財布の重み赤字吹き

安男

財布にはアイディア生み出す知恵袋

彰

幼な子も財布欲しがる恵比須顔

定子

奮闘った財布だけれど札がにげ

信夫

おはようの声も大きく新人生

美保

師の指導七草会の丸い句座

昭子

支え合う人という字が大好きよ

喜美

散歩道さくらトンネル屋台店

英男

若芽出て畑の草もいきいきと

秀子

母の日の花に静かに論される

義良

世渡りのヒントが浮ぶコップ酒

惠美子

一日を励ます朝のいい電話

ます美

花粉症マスク忘れず街に出る

俊夫

ポストンに入れて帰った旅の恥

秀夫

真つ白いノートにペンの恥がある

蘭水

飴玉の功罪信じ世を渡る

かずこ

春逝こう隣のおばば花の下

雄々報

川柳塔みぞくち

小西

雄々報

人生のドラマが変わるダイエツト

弘子

新聞へ好きなドラマをまずさがす

鈴枝

掛け橋に韓国ドラマ株上がる

公美枝

いいドラマ演じ終わる花野まで

久子

ドラマにも嫌われ役が一人いる

信雄

振り返る道へドラマの二つ三つ

和代

貧に耐え一緒にドラマ繰り返す

静江

幾山河越えただろうか八十路坂

正光

迷宮のドラマへ地球回るのみ

雄々

川柳塔おっぱい吟社

木村あきら報

いい湯だともう時間だとバスが急ぐ

貞月

姿見に嘘はつけない夏衣

八重子

台本にない一日の幕が開く

賢

秤でも判らぬ妻のかくし味

放任

勝つチャンスみんな持つてるグーチョキバ

ひかり

発言は皆の意見の後にする

寿々女

宅急便はどく楽しみ母の愛

いさむ

水中花蝶も飛んでは来てくれず

あきら

雑巾のしほり方にも上手下手

かおり

娘に継がれ母の手料理生きている

よしみ

チンをして冷えた心を温める

初恵

幸せな話聞いてる上の空

文仙

人生は一方通行戻れない

治延

竹原川柳会

時広

一路報

ハネムーン桜がひとつふたつ咲く

蘭幸

新しい名前に戸惑っています

史子

初々し笑顔に薫る新緑よ

汎美

新しい門出を祝う花吹雪

千代美

今日の事姉のかわりに犬に告げ

淑枝

雨が続く犬うらめしく顔を見る

千枝

十七と二十歳の孫の静かなり

太虚

リウォーム店どこか見たような服もある

寿枝

浦島の玉手箱から出たまさか

規代

私にまさかの力残つてた

輝恵

一球の怖さまさかのホームラン

笹舟

雨だれのまさかは岩に穴をあけ

笑子

もう一度女になろうと決めた朝

節夫

決めかねる事おおかりき独り居の

慶子

決めてからは動じなかったふたり道

房子

決めてからは動じなかったふたり道

栄恵

早う決めすぎたと母は言わぬなり
座布団はもめんにかぎる母の位置
新居決まるあなたとわたし白い画布
髪を切る決心少し強気です

要するに誰がおふくろ見るかだ
決めるのは好き決められるのは嫌い
僕が決めると妻が大抵文句いう
ランドセル決めたとおりに歩かない
外食は渚近くと決めている
判決の恐さよ人が人裁く

あかつき川柳会

山本

柳昌報

ナースの一言患者が笑う癒えてゆく
手を上げて笑って合図知らぬ人
気苦労をそつと笑いで終う母

笑わせておいて寂しい貌をする
赤ちゃんが声たて笑う若葉中
九条が子供の笑顔守りぬく

たつぷりの愛をもらつてよく笑う
太陽が笑つて昇るいい朝だ
約束にハートが弾む音がする

指切りは莢豌豆の花の頃
約束はバジツつけたらすぐ忘れ
認知症の母と指切りしています

指切りげまん妻と遍路の風となる
故里とした約束は重すぎる
上からと言えは動けるものらしい

読む内に筋がわからぬ物語
父という筋を通している手酌

青居 敬子 幸子 比呂子 力 半覚 静風 民恵 正宏 一路

保州

筋交いの有無を試しにくる鯨
もう一度努力して見るタイエツト
幸せな内は忘れてる努力
手の豆をつぶした孫の逆あがり

チャンピオンベルトは語らない努力
赤紙にイヤと言わせぬ愛国心
旅行にも行かぬグアムの金を出す
ケータイを片手に食べるハンバーグ
大阪市はつばつ夜逃げ準備する
母の日の母を諭吉で喜ばす

みな焼かれ八月六日白いまま
一人居の自由に生きる気の重さ
追い出して自立支援と胸をはる

川柳ふうもん吟社

夏目

一粋報

異変です君と紡いだ愛が枯れ
異変などないと思信る西雲
達人も酒を飲んでは弱音吐く

働く汗をかかぬニートに影がない
議員さん言葉ばかりでかすくなく
わたくしの懐刀ボロ辞典

ニートから刺客を志願金バジツ
達人は影をなかなか踏まない
達人と言われその気になります

ちよつとした異変も母は見逃さぬ
少子化とニートお国が減びます
身の丈のくらしに合つ靴を履く

独りとは虫一匹も味方する
豊かさの中でニートの芽が伸びる

欣之 桂子 ただし まつお 重人 文三郎 一規 東吉 宣子 たつお ダン吉 美智子 ゆうこ

裕子

佳句地十選 (7月号から)

板山

まみ子

八十歳まだ恐いのが一人いる
私が笑えば開く扉です

飽食の隣に餓死する人のあり
金銭の外は何でも都合つく

銃声もモーツァルトも聞く大地
レントゲン腹の黒さは写らない

花束と取り換えられた愛娘
本人に言えぬが妻は拾い物

跡つぎが遠く離れてもどらない
さりげなく繰り返し見る裸婦の像

壁の傷かすこきしてる額を掛け
かすこいて盗ったお金の軽いこと

達人は名前だけでも飯が食え
達人と言われ孤独な日々送る

この俺も達人気取り木の剪定
釣銭をかすこかれてもはした金

恋をして息子鏡とにらめつこ
引け際に達人だった誉めたてる

飢餓の国ニートで生きる手段ない
どう死ぬか達人だから悩み抜く

拉致家族異変の風よ吹いてくれ
遠隔操作で母の異変をキャッチする

行男 金祥 あしび 諏訪男 孝子 蟹郎 善夫 春名 孝男 益子 由美子 かをる 志げ緒 はつ江

知れば知るほど迷いだすいい女 一 粹

川柳塔唐津 仁部 四郎報

草露を踏みジョギングのあとの飯
永年の飯面とうとう肉につき
きつちりと昼寝のタイムすがすがし
二の腕の白さに負けた風鈴屋
支払いの頃は決つてお手洗い
傍からは人に好かれる山頭火
堂々と紙いっぱいに天の川
パンドラの箱も浦島開けるかな
最後まで名前出てこぬ長話
対岸の火事は扇で煽りたて

晴翠
勝視
實

うぶみ川柳会 小谷美ツ千報

指折つて勘定しつ作句する
勘定は黒字生活みみちい
ひよつとして大物かもね我を曲げぬ
割り勘の予想が狂ううまい酒
ひよつとした事でも転ぶ歳となる
クロッカス水仙みんな勢揃い
ひよつとして鳥二羽は仲間かも
誘われてひよつと期待が甘くなる
ひよつとして標的私なのですか
山椒が萌える季節だ鯖恋し
ひよつとでたひと言葉に戻らない
古池がゆらゆら月を遊ばせる
ひよつとした拍子迷子になる言葉
葉桜もよしおしゃべりははずんでる

くにお
黙光
天人
天雀
かつみ
和子
睦子
睦子
よしえ
美知江
幸恵
芳江
あづま
和
雄人

尼崎いくしま川柳会 春城武庫坊報

ふたりからひとりになって春の池
山椒の芽が出た今日は鰯煮る
日だまりの萌える蓬と芹を摘む
来年も元気で逢おう葉桜に
箱庭の池でお産をした蛙
勘定があわぬ大学出のバート
すれちがい今のはひよつとしておのこ
ひとり来て立つとひとりの池になる
お日様を葉桜食べているだろう
万物が萌えるこたつのしまい頃
花びらで埋まる天女が降りた池
葉桜になつても思い出し笑い
六十歳まだ葉桜というところ
うちの池竹島隠岐の島がある
春風に池は笑つてばかりいる

美ツ千
ひろこ
京子
龍枝
玲子
重忠
孔美子
季芳
修
玲坊
芳光
螢
完司
石花菜
宣子

しゃばん玉飛ばそ小さな夢込めて
生きている人の数だけ夢の色
明け方の夢より覗く深い穴
柔かいお手々を握るかたい手で
手作りと念押し渡す硯箱
手垢つく辞書が歳月物語る
若者がレスカと呼んで悪語る
新緑に疲れ目癒やす山歩き
物差しが違うお方で計られぬ
少年にもどつて飛ばす枇杷の種
梅酒とろり遠いあの日が鮮やかに
駐車違反車は都市に住みにくい

東園
守弘
薫
千恵
しづ子
宏一
昭三
純
幸子
武庫坊
紀乃
勝巳

川柳塔わかやま吟社 牛尾 緑良報

その手には乗らぬ目線を確かめる
空調掃除終えて入梅待つてます
悲しげな顔とこらえたキタキツネ

翔ぶ勇氣奇跡の風が背を押す
コップ一杯あすの命に繫ぐ水
一抜け二抜けやがて一人の傘の中
気になつて男鬼門に花活ける
私にもやれた奇跡の逆上がり
運だけじゃないのさこれは奇跡だよ
奇跡の扉開けよう自分信じきり
負けるが勝ちやがて奇跡のドラマ生む
古い師の呪文が効いてくる奇跡
巡り合い奇跡と思う赤い糸
北側に奇跡の起きてほしい国
死の宣告奇跡を信じ死線越え
明日のいう奇跡を持っている若さ
むずかしいことは言わぬいマクカッ
コップ伏せ内部告発するつもり
ポイ捨ての紙コップにも自負がある
妻というコップの中で泳がされ
おしどりがコップの中で痴話喧嘩
一つ傘開かれる鬼を身のうちに
大地に起つ男に傘は似合わない
母の傘しずくは他所へこぼさない
君となら地の果てまでも落下傘
夜目遠目傘が一番合うわたし
雨上がる心の傘を開いたら

寛之
年代
久子
紀子
登美代
大輪
精子
三喜夫
泰女
千代子
輝子
順子
克子
佐一
緑良
夕胡
朱夏
富美子
豊太
利治
あきこ
寿子
裕美
保州
英子
小雪

寿海

生きようと頑張る鯉もてあまし

鱧鰻穴子大好き長い魚

大掃除済んだら昔鯉并

愛あれば鯉の寝床も至福

居直って美はの後を期待する

幼児に弱み握られお小遣い

おさな子の寝顔見ながら抱く不安

口答え幼いけれど射る

祝盆に頬を染めてる幼な妻

幼いね人事不満でござるとは

幼子のカメラに入る老い二人

ここだけの話の穴場筒抜ける

川柳塔鹿野みか月

土橋

腹の虫風船吹いて吹き飛ばす

風船で世界旅行のプランたて

風船が飛ぶよにあの世逝けたらね

母さんと夜店で買った紙風船

風船が流れた方に味方する

風船飛ばそう阪急タイガース

風船をキュッキュと曲げて猫にする

新鮮な産声という宝です

新鮮な夢を見たので出直せる

アドバラン貧富の格差見てござる

決断へ風が後押ししてくれる

足の裏見せて喜ぶ田植え終え

しずしずと睡蓮咲いてモネにあう

民族の違いでもめている地球

野添

浅子

ふみよ

幸子

岩夫

俊昭

和美

珠子

仁緑

蛙城

狸村

東吉

久枝

武子

菊乃

彩子

茶子

石花菜

実満

きみ子

忠良

盛桜

弘子

和子

小鹿

睦子

しずしずと最尾で煙草取り出した

風船をふくらし飲酒はれてくる

風船をついてリハビリひふうみい

年玉へ喜ばせたい金を貯め

喜んで素直になった今日の風

肺活量一気に風船と勝負

喜びも悲しみわびし紙一重

嫁さまに従いて春着を購つてくる

敷藁へカボチャ喜び這いまわり

喜んで迎えてくれる人がある

ふる里に帰って山を喜ばす

喜びを私の指にくれたひと

喜んで自分探しをやっている

喜びがいっぱい初夏の山になる

喜びを力いっぱい握りしめ

川柳茶ばしら

板山まみ子報

一万歩歩いてケーキ一個分

遅刻したお詫びレシート持つて立ち

アイフルはどうもしません三日間

逆ついても援けを呼んでる子

校門の前に住んでも日々遅刻

厚塗りの化粧遅刻もいとわな

遅刻した会議扉も開けられず

お聞きにしてと昆布茶に促され

言い訳は何にしようかまた遅刻

川柳塔なら

坊農 柳弘報

何億のその中にいる君と僕

孔美子

房子

公子

保子

永子

和枝

かつ乃

汲香

節子

宣子

はるお

八重

富久江

照彦

螢

つましい母は浄土の隅に居る

白寿にもなれば子供のような母

爽やかな靴音立てて新人社

爽やかな目ざめその日の幸を呼ぶ

爽やかな汗かいてます万歩計

爽やかな笑みで脇腹つつかれる

どうしても母が居る方向にいて

母強し大統領へ限り込み

髪切つて少女ひらりと夏を舞う

むらさきが好きと言うのも何か縁

遠景にふるさとを置き母を置き

いい人とランチ程度のおつきあい

春の雨黄砂を洗い青い空

生きねばと思うドナーの分までも

喧嘩ばかりしてるあいつと腐れ縁

義理の母でしたやさしい母でした

心地よいみどりの風を切るペダル

日替りランチなら僕だって北新地

核ゼロに活字が躍る朝になる

嘘すこし足して結んでる縁

もう父を赦して同じ星に棲む

蝶結び男結びのお付き合

ランチでは納得しない交際費

裏釘母の支えが身にしみる

遺句集に子等も驚く母の恋

山辺の道で縁を食べている

週一回ランチで医者が来る孤島

み仏の縁で少年灯に戻る

東吉

茂雄

春雄

芙佐女

千梢

ふりこ

芳香

章久

富子

春蘭

六助

真理子

弘風

良一

岳人

美千子

隆盛

恭昌

ダン吉

道子

國治

秋雄

重人

孝子

理恵

卓

寿美

弥生

川柳ささやま

遠山

可住報

通帳を見てはほくほくしてる人
成長ホルモンも少し欲しい孫の丈
上気顔美味い話輪に咲いて
星くずに未来を招く夢がある

精一
純子
美緒子
文子
美紗子
多美子
照代

あの店も牛の病でつぶされた
ほくほくの土に馴染んだ野菜苗
青葉揺れ自然の扇心地良い
野に山に青葉の元氣も心地良い

かほる
つや子
富子
二英
哲男
可住

今日もまた幸せだった星見上げ
お地藏さん花一ぱいにはくはくと
アタマにもホルモン注射してほしい
満天の星だ明日は孫嫁ぐ

かほる
つや子
富子
二英
哲男
可住

はるばるのツバメ青葉に迎えられ

かほる
つや子
富子
二英
哲男
可住

はるばるのツバメ青葉に迎えられ

かほる
つや子
富子
二英
哲男
可住

尼崎尾浜川柳会

山田

耕治報

なれそめは下手な芝居で二階借り
チョット待て妻の言葉になぞがある
人見知りもなれてきたと場を仕切る
やもめにもなれて十年飲んでます
のみ仲間今日もいいわけ考える
メンバーを見れば行先までわかる
どのネジを締めれば直るおひとよし
なれてみれば互いの癖も丸く住む
奥さんに嫌な顔され飲み仲間
陸橋を黄色い傘が一線に
紫陽花に一雨天の化粧水
被災地の棚田へ仲間ボランティア

晴美
五月
きよし
朋月
よし子
耕治
里江
宏一
美代子
昭三
勝巳
亀子

なれそめは下手な芝居で二階借り
チョット待て妻の言葉になぞがある
人見知りもなれてきたと場を仕切る
やもめにもなれて十年飲んでます
のみ仲間今日もいいわけ考える
メンバーを見れば行先までわかる
どのネジを締めれば直るおひとよし
なれてみれば互いの癖も丸く住む
奥さんに嫌な顔され飲み仲間
陸橋を黄色い傘が一線に
紫陽花に一雨天の化粧水
被災地の棚田へ仲間ボランティア

晴美
五月
きよし
朋月
よし子
耕治
里江
宏一
美代子
昭三
勝巳
亀子

なれそめは下手な芝居で二階借り
チョット待て妻の言葉になぞがある
人見知りもなれてきたと場を仕切る
やもめにもなれて十年飲んでます
のみ仲間今日もいいわけ考える
メンバーを見れば行先までわかる
どのネジを締めれば直るおひとよし
なれてみれば互いの癖も丸く住む
奥さんに嫌な顔され飲み仲間
陸橋を黄色い傘が一線に
紫陽花に一雨天の化粧水
被災地の棚田へ仲間ボランティア

晴美
五月
きよし
朋月
よし子
耕治
里江
宏一
美代子
昭三
勝巳
亀子

なれそめは下手な芝居で二階借り
チョット待て妻の言葉になぞがある
人見知りもなれてきたと場を仕切る
やもめにもなれて十年飲んでます
のみ仲間今日もいいわけ考える
メンバーを見れば行先までわかる
どのネジを締めれば直るおひとよし
なれてみれば互いの癖も丸く住む
奥さんに嫌な顔され飲み仲間
陸橋を黄色い傘が一線に
紫陽花に一雨天の化粧水
被災地の棚田へ仲間ボランティア

晴美
五月
きよし
朋月
よし子
耕治
里江
宏一
美代子
昭三
勝巳
亀子

なれそめは下手な芝居で二階借り
チョット待て妻の言葉になぞがある
人見知りもなれてきたと場を仕切る
やもめにもなれて十年飲んでます
のみ仲間今日もいいわけ考える
メンバーを見れば行先までわかる
どのネジを締めれば直るおひとよし
なれてみれば互いの癖も丸く住む
奥さんに嫌な顔され飲み仲間
陸橋を黄色い傘が一線に
紫陽花に一雨天の化粧水
被災地の棚田へ仲間ボランティア

晴美
五月
きよし
朋月
よし子
耕治
里江
宏一
美代子
昭三
勝巳
亀子

なれそめは下手な芝居で二階借り
チョット待て妻の言葉になぞがある
人見知りもなれてきたと場を仕切る
やもめにもなれて十年飲んでます
のみ仲間今日もいいわけ考える
メンバーを見れば行先までわかる
どのネジを締めれば直るおひとよし
なれてみれば互いの癖も丸く住む
奥さんに嫌な顔され飲み仲間
陸橋を黄色い傘が一線に
紫陽花に一雨天の化粧水
被災地の棚田へ仲間ボランティア

晴美
五月
きよし
朋月
よし子
耕治
里江
宏一
美代子
昭三
勝巳
亀子

はたる川柳同好会

水野

黒兎報

熟年は高値になると旅案内
寅さんほどのロマンスはなしひとり旅
丁寧座席ゆずれられ歳を知り
丁寧書いてはあがが誤字脱字
グルメ旅お国訛が隠し味
一人旅方言で道教えられ
俄か雨軒に飛び込む国訛
巣穴まで連なる蟻の遠い旅
思ひ出の品に囲まれ狭く棲む
ひと雨を待つあじさいもわたくしも
転勤に次ぐ転勤の一人旅
雀卓を囲んだ仲間今一人
丁寧洗え畳めの家事指南

契子
蛭柳
禮子
見清
黒兎
雪子
宇乃子
肋骨
春代
桂子
柳童
信男
勝

契子
蛭柳
禮子
見清
黒兎
雪子
宇乃子
肋骨
春代
桂子
柳童
信男
勝

契子
蛭柳
禮子
見清
黒兎
雪子
宇乃子
肋骨
春代
桂子
柳童
信男
勝

契子
蛭柳
禮子
見清
黒兎
雪子
宇乃子
肋骨
春代
桂子
柳童
信男
勝

契子
蛭柳
禮子
見清
黒兎
雪子
宇乃子
肋骨
春代
桂子
柳童
信男
勝

契子
蛭柳
禮子
見清
黒兎
雪子
宇乃子
肋骨
春代
桂子
柳童
信男
勝

契子
蛭柳
禮子
見清
黒兎
雪子
宇乃子
肋骨
春代
桂子
柳童
信男
勝

契子
蛭柳
禮子
見清
黒兎
雪子
宇乃子
肋骨
春代
桂子
柳童
信男
勝

契子
蛭柳
禮子
見清
黒兎
雪子
宇乃子
肋骨
春代
桂子
柳童
信男
勝

契子
蛭柳
禮子
見清
黒兎
雪子
宇乃子
肋骨
春代
桂子
柳童
信男
勝

契子
蛭柳
禮子
見清
黒兎
雪子
宇乃子
肋骨
春代
桂子
柳童
信男
勝

契子
蛭柳
禮子
見清
黒兎
雪子
宇乃子
肋骨
春代
桂子
柳童
信男
勝

契子
蛭柳
禮子
見清
黒兎
雪子
宇乃子
肋骨
春代
桂子
柳童
信男
勝

契子
蛭柳
禮子
見清
黒兎
雪子
宇乃子
肋骨
春代
桂子
柳童
信男
勝

契子
蛭柳
禮子
見清
黒兎
雪子
宇乃子
肋骨
春代
桂子
柳童
信男
勝

契子
蛭柳
禮子
見清
黒兎
雪子
宇乃子
肋骨
春代
桂子
柳童
信男
勝

京都塔の会

都倉

求芽報

石段も修業ですと鞍馬路へ
叡山電車 新緑の枝窓たたく
少々は歩く覚悟の旅支度
京にきて田舎と同じ無人駅
朝目覚め身体をの声を聞いてやる
耳元で鍵の置き場所そつと言ひ
半音をおとして楽な老夫婦
ばあちゃんの声になつて孫の守り
要注意 妻が黄色い声を出す
大きな声ご無用あやめ咲きます
枯山水ゆつくり石の声を聞く
ぼくの骨最期は箸で挟まれる
遊び心少し挟んで翔んでる
煮え切らぬ男を挟み討ちにする
天使達 若菜の風と鬼(こ)こ
エンゼルは休憩中です梅雨曇り
心地よい言葉だ天使かも知れぬ
天使にも夜叉にもなれた子育て記
天使の座る隙間を空けて待っている
忙しい天使平和はまだ遠し
名に惚れてエンジェルフィッシュ飼っている

昌乃
寿美子
冬葉
五月
満子
功一
シマ子
益子
楓楽
義子
啓子
たもつ
宏子
義
ふりこ
萬的
光子
百合子
和子
哲子
孝一

昌乃
寿美子
冬葉
五月
満子
功一
シマ子
益子
楓楽
義子
啓子
たもつ
宏子
義
ふりこ
萬的
光子
百合子
和子
哲子
孝一

昌乃
寿美子
冬葉
五月
満子
功一
シマ子
益子
楓楽
義子
啓子
たもつ
宏子
義
ふりこ
萬的
光子
百合子
和子
哲子
孝一

昌乃
寿美子
冬葉
五月
満子
功一
シマ子
益子
楓楽
義子
啓子
たもつ
宏子
義
ふりこ
萬的
光子
百合子
和子
哲子
孝一

昌乃
寿美子
冬葉
五月
満子
功一
シマ子
益子
楓楽
義子
啓子
たもつ
宏子
義
ふりこ
萬的
光子
百合子
和子
哲子
孝一

昌乃
寿美子
冬葉
五月
満子
功一
シマ子
益子
楓楽
義子
啓子
たもつ
宏子
義
ふりこ
萬的
光子
百合子
和子
哲子
孝一

昌乃
寿美子
冬葉
五月
満子
功一
シマ子
益子
楓楽
義子
啓子
たもつ
宏子
義
ふりこ
萬的
光子
百合子
和子
哲子
孝一

昌乃
寿美子
冬葉
五月
満子
功一
シマ子
益子
楓楽
義子
啓子
たもつ
宏子
義
ふりこ
萬的
光子
百合子
和子
哲子
孝一

昌乃
寿美子
冬葉
五月
満子
功一
シマ子
益子
楓楽
義子
啓子
たもつ
宏子
義
ふりこ
萬的
光子
百合子
和子
哲子
孝一

昌乃
寿美子
冬葉
五月
満子
功一
シマ子
益子
楓楽
義子
啓子
たもつ
宏子
義
ふりこ
萬的
光子
百合子
和子
哲子
孝一

昌乃
寿美子
冬葉
五月
満子
功一
シマ子
益子
楓楽
義子
啓子
たもつ
宏子
義
ふりこ
萬的
光子
百合子
和子
哲子
孝一

昌乃
寿美子
冬葉
五月
満子
功一
シマ子
益子
楓楽
義子
啓子
たもつ
宏子
義
ふりこ
萬的
光子
百合子
和子
哲子
孝一

昌乃
寿美子
冬葉
五月
満子
功一
シマ子
益子
楓楽
義子
啓子
たもつ
宏子
義
ふりこ
萬的
光子
百合子
和子
哲子
孝一

昌乃
寿美子
冬葉
五月
満子
功一
シマ子
益子
楓楽
義子
啓子
たもつ
宏子
義
ふりこ
萬的
光子
百合子
和子
哲子
孝一

昌乃
寿美子
冬葉
五月
満子
功一
シマ子
益子
楓楽
義子
啓子
たもつ
宏子
義
ふりこ
萬的
光子
百合子
和子
哲子
孝一

昌乃
寿美子
冬葉
五月
満子
功一
シマ子
益子
楓楽
義子
啓子
たもつ
宏子
義
ふりこ
萬的
光子
百合子
和子
哲子
孝一

白衣をぬげば天使も魔女に早変わり
アスバラの好きな天使で罪がない
片言の天使まわりを和ませる
ルイヴィトンで天使が翅を買った
病臥して天使のように見えた妻
エンジェルがやすやすと眠る乳母車
あの人は天使だ手話が美しい

八尾市民川柳会

宮西

弥生報

種袋未来を話す大きい手
他人事知らないそぶりして居ます
あなたが来るのでイベントになるのです
八起き目の祝いの宴に春もう
君に無理と言われてやる気湧いてくる
源流の一滴汲んでいる命
無理すれば体のパーツが軋み出す
湧き水を汲める自然がある田舎
国宝にオペラグラスが物を言う
全身を洗つてもらふ花言葉
主義主張他人に学ぶことばかり
鍵穴に他人の風が吹き溜まる
世は情け人の助けが身にしみる
他人同士言葉飾つて右ひだり
梅雨明けを心待ちする夏帽子
這えば立て学べと無理なことを言う
山の水汲んでも汲んでもにこらない

はびきの市民川柳会

徳山みつこ報

春 美 龍 葉 子 求 芽 尚 士 富 喜 子 和 友 加 央 里 春 蘭 定 男 一 風 たもつ ダン吉 きらり 柳 伸 浩 三 欣 之 あかり 秋 雄 宏 至 民 加津子 ますみ 弥 生 敏

大空に嬉しい虹のイヤリング
傘たみ虹に見惚れる故郷の夏
泣けばいい後で大きな虹になる
本当に当たれば怖いジャンボクジ
全員が当たる安打に酔うベンチ
女房に当たれば恐い石を蹴る
睨まれて心当たりが二つ三つ
当選に心当たりのないハガキ
糸を垂れ当たりを待っている時間
子宝にやさしく当たる帯の位置
ヤマ勘がおもしろいほどよく当たる
宝くじ当たれば老母と旅に出る
砕ける気どんと正面から当たる
矢車のぐるぐる回る五色鯉
ぐるぐると日本一周旅したい
ぐるぐると一期一会に出会う旅
よその家はかりぐるぐる回る銭
輪廻とや私もやがて地に還る
浮き沈みこの世はメリーゴーランド
小学生髪の後にはリボンつけ
青リボン外す日を持つ拉致家族
わたくしにリボンををつけてプレゼント
運動靴リボン結びが出来ない子
母の日に娘がくれた蝶結び
思い出がこみ上げてくる黒リボン
真心にリボンを掛けてプレゼント
母の日へリボンのついたメッセージ
まな板が欠伸している妻の留守
まな板のくぼみに宿る妻の自負

りつえ 章 司 美代子 一 壺 たけし ヨシ枝 恵 勇 一 知 かつみ 栄 一 いさお 重 人 ダン吉 美 喜 昭 平 悦 点 泰 子 みつこ 保 江 久 仁 子 真 一 フジ 静 子 庸 佑 光 男 耕 策 志 洋 吐 来

大原川柳

山本

玉恵報

優秀のないふた嫁がいる平和
散り際が良し来年め咲く桜
ひと呼吸おいて猫舌箸を持ち
声落とす猫が聞き耳立てたから
猪が食べてから垣してもう
形容詞多めに抱いて逢いに行く
向い風追い風千の坂を越す
スローモーションの動きになって蹴つまずき
笑顔していつも火消しの母がいる
祝福の二人に似合う花吹雪
現代へ続く手織のカスリ館
ゆれていた頃の若さがはすかしい
笑い合う友がいっぱい居てくれる
楽しんだ桜一夜の風に散る
欲捨て無色透明老いの日日
苦勞ばなしも今は笑いの種となる
神様の目からこぼれた願い事
正座してただ渦巻きのとまん中
川柳塔きやらぼく 福代 天雀報
油断大敵ころして暮す
病院見舞いに大きく咲いた白牡丹
好奇心まだうごめいていそがしい
人一人死んでも犬と散歩する
米寿の姑に赤がとつてもよく似合う
ステロイド呑む身代わりに母がなりたい
年金を余すことなく絞られる
玲 子 晶 子 田 鶴 寿々子 那珂子 富美子 初 枝

もういいよ声が届かぬ雪の空
意地通す人の話に刃が立たぬ
旅じたく出来た荷物誰が持つ
沈む陽を拝んで今日の歎洗う
セクハラもいとこ辞任おいこまれ
握り寿司ネタが潮騒聞いている
点一つ辞書のお世話になる始末
吊り橋が誰のせいでもなく揺れる
ひらめきを明日に繋ぐ縄梯子
へそくりの置き場を忘れ困りだす
十年後の日本を見抜く虹を盛る
満開の花の日は判らない
剃刀の耳のかすめる郭公鳥
異常気象地球も悲鳴あげている
食べさせて持たせて母のありったけ

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

天雀 雪江 章江 やえ 亜弥 すみえ 蘭 てい子 日枝子 恵子 瑞枝 なみ ふみ 春枝 千代

強がりと言えば虚しさだけ残り
良心というブレーキが強過ぎる
風強く吹かねば誰も気づかない
どなっても結局妻の言う通り
力強い騎士が欲しい老いの道
インスタント食べて当座はしのぎます
二人から受けておりますプロポーズ
困りますケータイ夢中の乳母車
困ってもとことん自分で工夫する

高知川柳社

川竹 松風報

腹を切る覚悟忘れたお役人

圭二

狂言の傷は浅めに切っておく
切り傷に塩がすり込まれる修羅場
思い切り泣いて別れに句点打つ
合併で切り捨てられた過疎の里
主役より演技が上手い切られ役
紙一枚で切れる夫婦と言う絆
指切りの指から洩れている秘密
献血に参加ができた若い頃
功名を焦る若さが勇み足
若者の怒りが消えている日本
若者の未来信じて出すエール
前向きな夢へ向かつて行く若さ
理不尽を怒る若さよう一度
ひと色で若さアピールするルージユ
若返る秘訣は友と趣味がある
若い芽が春のいぶきで伸びてくる
まだ若いとおだてに乗ってやけどする

川柳藤井寺

高田美代子報

暖 孝雄 快風 功 圭風 千鳥 左門 悦子 正躬 京子 和江 てるみ 美々 哲史 図美絵 良雄 典雄 春蘭 恵勇 昭子 あかり 淳司 浮点 静子 みつこ 扶美代 庸佑

立春立夏そんな暦にある不思議
妻と子には生まれ孤立しています
核心に触れて男は立ち上がる
筆も立ち弁も立つのにあかんたれ
軸足はセンターラインや左
立つ時はヨイショ座ってドッコイショ
腹の立つ言葉も水に流して
アハハハ後から腹が立つてくる
てっぺんに立つと下界が見えにくい
不況風老舗の屋号また消える

三幸川柳教室

三幸川柳教室

古久保和子報

九号が着れなくなった古棉の鬱
幾千の号泣を知る被爆絵図
伝統の屋号に秘めた舞台裏
号外の出る誕生を待っている
怖いほど似てる親子の飲みっぷり
音のない部屋でノックする深夜
眼光に射竦められた金縛り
暗号を解いたらきつと怖くなる
少年の群れと出合った午後十時
びくくりが怖さに変わる厚化粧
カゴメカゴメ後ろの正面首がない
殺人鬼かも知れぬまんじゅうの十個
ひとりじめしたいと怖い事をいう
狸より怖い鬼の泥の舟
聖書のことを知り過ぎている女
ペディキュアの赤百年を生きる足
巡り合い切れてなかった赤い糸
ライバルに恵まれながら伸び悩む
六法に遠い夫婦で慎ましい
腹立ててみてこの世でケリが付き

いさお 鐘造 アヤ子 シルク 栄一 弥生 欣之 雅枝 重人 悦子 半蔵門 美子 瑠美子 葉進 一筒 志洋 一知 一步 美代子 一步 桂香 幹子 宏夫 みね 次根 保州

ステップはタンゴのリズム花吹雪
 ビートルズよりも祭りの笛太鼓
 夫振るタクトイントロ抜けている
 コーラスの邪魔をしたのは僕の声
 鍵盤を走る指から湧く泉
 キッチンに母の音楽室だった
 蒼天へ五月五日の鼓笛隊
 滑り込みセーフで閉まる自動ドア
 へそくりを隠した場所をみつけれ
 あわててた見落としばかり若かった
 あわてます老いの一年早すぎる
 伴奏があとから走ると自慢
 汚すだけ汚し地球があわてだす
 上擦った声で落ち着け言われても
 雨の日もラッキーマンにして文庫本
 ラッキーマンともた葉の副作用
 さくら麗し日本人である至福
 ラッキーマン空間がある春の午後
 ラッキーマン丈夫な妻が居てくれる
 忘却もラッキーマンだと膝の猫
 ハンドルの遊びくらの運の良さ
 運だけの男背伸びをして転ける
 去る人がありラッキーマン風が吹く

川柳塔まつえ吟社

三島 淞丘報

正治 昇 三子 武 朱夏 起世子 和子 孝義 信子 イセ かずみ 町子 当代 千秀 幸 章子 徑子 碧 智三 孝子 登美代 准一 公子

夏の雲ひょうきんなことばかり言う
 首根っこ押さえるように重い雲
 疲れたら雲の寝床で昼寝する
 雲ひとつないのに傘を持つて出る

畔 芳山 宏 喜美子

雲掴むような話に騙される
 高低の気圧に雲が乗りたがり
 ロマンには男やり遠い昼の月
 世のロマン男と女居る証し
 男いっぴき涙見せないのもロマン
 神々のロマンを映す水鏡
 移り行くロマン街道初夏を見る
 遮断機の向こうでロマン風化する
 ぼろぼろの昭和の櫛が欠けてくる
 ぼろぼろになるまで恋の服を着る
 ぼろぼろになって心に薄化粧
 ぼろぼろのアルバム若い母がいる
 ぼろぼろになっても切れぬくされ縁
 ぼろぼろな息子の胸を父は撫で
 仲間を輪抜けて見ている茜空
 仲間を輪抜けて見ている茜空
 抜け道を一つ残して話し合う
 抜け道に聞える母の笑い声
 抜け道はたんとあります生き上手
 抜け道はここだここだ森の声
 抜こうにも抜けない棘が今もある
 向い風受ける覚悟の改革路
 正論で真正面から立ち向かう
 アと呟で初心貫く向かい風
 よくやった孫の勲章向こう傷
 ゆっくりと西へ向かっている電車
 七人の敵へ向かつて門を出る

南大阪川柳会

吉川

寿美報

幸 小生 和歌子 注湖 螢 雪代 房子 紫見 陽次 柳歩 礼子 薫 たいし 幸子 久子 政治 治代 知恵子 多喜 桂子 長吉 静恵 多賀子 茂美 昌枝 淞丘 ルイ子

蒼翠の山に迷いの雲一つ
 八百万ひとつ選べば山の神
 しなやかにモデル気取りで試着する
 しなやかに生きて尻尾は掴ませぬ
 しなやかにソッテイチエリの描いた裸婦
 小京都春しなやかに柳の芽
 イナバウアーに負けぬしなやかな驚娘
 しなやかにデンクリ返りする光子
 何かある突然妻がしなやかに
 おばさんは見合写真と来て粘る
 来客がおばだとわかる賑やかさ
 ははの味食べたくなつて叔母の家
 神様が見つけてくれるまで耐える
 見つけたが拾うか迷う一円貨
 天牛でやつと初版とめぐりあい
 衝動買い後悔はないみづけもの
 欲しい物見つけるまでは燃えている
 見つからぬように闇闇と隠れんば
 六十億たつた一人の妻見つけ
 鏡台の奥に女の密かごと
 夫には内緒値札を取って置く
 娘の部屋の鍵が気になる老夫婦
 合鍵の秘密金魚が知っている
 やさしさにポロリこぼした過去の傷
 大空に時どき秘密ぶつちやける
 山盛りの愛ですどうぞご自由に
 昔のわたし見つけてウフフ日記帳
 へそくりを見つけて受け取り入れて置く
 ひよつとことおかげで秘密などはない

たよし 昌紀 更紗 楓 祥昭 萬昭 利昭 栄子 弘泰 柳伸 東吉 遠野 集一 弘子 憲太郎 シマ子 福世 尚士 たもつ 寿美 叙子 郁夫 雅文 千里 ダン吉 とし子 弘風 重人

川柳大坂 長井 善純報

くどいほど言われた母の火の用心
財布には新札ばかりキザな奴
誕生日今日は三合ゆるさるる
万策がついても笑顔忘れない
香水をブンブンさせている打算
いい話聞かため買った指定席
一日一善ひと缶拾う駅の前
真剣な顔で税務署門潜る
地獄見た男あれから跳ねている
あれもしてこれもしたいと予定表
わがままをそのまゝ背負い来た老い路
千枚田千の生命が夏に跳ね
父として互角になれぬ意地がある
今に知る勝負の精神心技体
切磋琢磨互角で成長したい友
衣擦れの音に反応する夫
負け将棋口で勝つから五分と五分
ライバルと互角なるため化粧する
アメリカへ誰が互角に旗をふる
ガソリンが上がつて小遣いまた下がり
外遊の議員は公私どちらです
年金に馴れて来た頃また目減り
ぶつちやけたらあんた助けてくれまっか
心音を聞いておなかの子が育つ
北の国互角に拉致の席に就け
薄雲り元気に開く花水木
法の下皆平等という平和

東吉 照月 五月 一步 重人 孝一 川童 洛醉 ダン吉 かよこ 信醉 宏 柳昌 紀雄 美花 珠生 勝広 芳香 まつお 隆司 ひろゑ 功 一風 青道 彦太 福世 柳弘

靖国で味噌つけたまご引退
八つ当たりして跳ねあがる雨しぶき
ボリユームを下げてひとりで聞く演歌
鉄心 美籠 善純

川柳塔みちのく 小寺 花峯報

一億を一夜で使う夢をみる
カルメンの薔薇はとほけて刺を抜く
散財をした分夜は粗食とす
散財をした甲斐がある母子旅
エプロンにおはぎ隠して隣より
隠しても隠しきれない過去がある
郭公の声が緑を深くする
ケチケチと貯めて豪華に船の旅
死んだ子の悲しみ隠しきれぬ母
きのこ雲の陰永遠に隠せない
主張する語尾に本音が隠される
大人になる音で少年セロリ囃む
計量になじまぬ老母の隠し味
切り札はポケットに置くジョーカー
摘果する脚立に落ちる実のリズム
お好みの美女に捻抜くナポレオン
散財をかけたな友よ蕎麦の味
花粉症緑の風が恐ろしい
一呑 風蝶 誠子 洋子 てる 隼人 ヒサ子 愁女 順風 花匠 銀波 黙人 岳水 花峯 慕情 一花 五楽庵 岬柳會 八十田洞庵報 俣子 とみ みやこ 茂平

億狙う顔顔のくじ売り場
ダイエツト時間限ると続かない
限りある資源知りつつ使い捨て
逆らわずだまるに限る妻の乱
浮かれてたバブルの傷はまだ癒えず
シャッターチャンス狙う笑顔は続かない
趣味の道ひたすら作句駄句の山
豆粥に昔話の次々に
ひたすらに生きた証か母ちぢむ
紫陽花の心変わり愛を愛する雨
紫陽花も微笑んでいた御法要
短編がいくつもできる五七五
時変わるサッカー人気も親も
クーラーをかけてくしゃみの初夏の汗
輪車すぐ乗りこなす子供達
むかしむかしの途中で眠る膝の上
核家族子供ひとりを持て余し
警察がしつかりしたら子を生もう
愛国心子供マンガで知っている
子供の頃は正しい人だった
気がつけば一人踊っている私
心臓が踊り出しますラブレター
おてんばが日本舞踊を習つて
タコ踊りふて寝を蛸は決め込んだ
おてもやん踊る私もおてもやん
居留守でも喧嘩するよりいいかもね
避雷針無ければ三度死んでいる

蛙城 珠枝 房枝 年子 里子 令子 和香 洋子 洞庵 和美 富美子 鉄男 貞夫 悦子 茜報 さち子 三郎 博泉 利昭 忠央 弘一 九好 高栄 日出子 たよし とし子 あやめ 勇太郎

三叉路で犬も避けたい道がある
 春愁や避けそこなつた水たまり
 避けられてゐるのに気付かないわたし
 ゆとりないハンドル一二代目行き詰まる
 二度の職ベンハンドルに持ち替える
 マチャリハのハンドル重い古希の坂
 ハンドルを預けてからの高軒
 ハンドルを持つと仏も鬼になる
 妻の留守賞味期限が攻めてくる
 リーダーが代わりマンネリから抜ける
 木漏れ日を浴びて地球の香かく
 決心がついたか扇子動きたす
 タクシーで夫が届く着払い
 母の無い子に母の日はつらすぎる
 老いふたり可もなく不可もなく飲む新茶
 ハンドルはカーナビ任せの迷い恋
 妻の手で踊り疲れている背広

むらくも川柳会

毛利

不順な日つづきさわやか風を待つ
 さわやかな人の温もり癒される
 さわやかと言葉通りのみどり風
 さわやかに歳を重ねてある余生
 さわやかに振舞い周り座が笑う
 ふるさとを離れて三日友の顔
 白髪のかし歴史のある深み
 一日を励ます朝のいい電話
 盗み酒飲めばほのほの妻にバレ
 台所なまけてすぐにつけがくる

麗 茜 恵子 亜成 庸佑 かすみ 朝子 弘風 ルイ子 たもつ 修 仁清 一風 柳弘 頂留子 幸報 信夫 彰子 定子 美保 幸子 秀子 義良 惠美子 ます美 昭子

支え合う人という字が大好きよ
 川柳の長寿の老師想い出す
 いつ見ても財布の重み赤字吹き
 下り防衛せずに談合を
 めきめきと腕を磨いて明日を待つ
 来年もまた花散るさくら十手
 バツと咲くど花びらも光らせて
 盃に花びら浮かせ口説いてる
 城北川柳 吉岡
 入園料ただがふれる菖蒲園
 歓迎のつばめ返しや菖蒲園
 わんどには子亀が顔を見て帰り
 薔薇さ天を仰いで花菖蒲
 群生も単鉢もよし花菖蒲
 千人塚戦しません香を焚く
 菖蒲園浮き世離れの風に合う
 つるつるは昨日や今日の風でなし
 似て来そう養毛剤をふる息子
 似て来そう養毛剤をふる息子
 良い報せ待ってるとき計進まない
 未来見る時計は魔女が持っている
 きつちりと回る時計の色気なし
 悲しみの時間指してる子の形見
 叩いたら動く時計が捨てられず
 明日が来ることを信じてよく眠る
 絶対調針の穴までよく通る
 写経する一字一字に願ひこめ
 アフリカの調で祝った金婚式
 昔日の恋は語らず青いバラ

喜美 寿 安男 英男 伊千子 かずこ 治代 玲子 修報 弘風 一步 麗 東吉 正 朝子 典子 美智子 順三 ルイ子 とし子 高栄 はじめ 集一 たもつ 桂作 倫子 明子

やるだけはやつた夕陽と握手する
 亡き母の夢をやつと見る何故かしら
 労働の汗口ポットがしてくれる
 口八丁おばさん達の腹へあらし
 福耳を持つて哀しい過去がある
 土手ある若葉の風に足はすむ
 ノーと言えぬ真実な口は閉ざさない
 直ぐ溶ける嘘を包んだオブラート
 勘定を頼むと財布ごと渡す
 人生の角で立つたり座つたり
 ネクタイをはずした日からできた距離
 西宮北口川柳会 黒田 能子報
 ネジ一つ夫婦の間往き来する
 一声の助言に若い芽がのびる
 水滴の胸まで沁みるひとりの夜
 一滴の水水琴窟を楽しみます
 友一人増えて一つの知恵貰う
 一滴の涙の苦さ噛みしめる
 ゆつたりと歩くとき心ひろくなる
 おつたりと返す言葉に陰がない
 おつたりと鼻毛抜いてる昼下り
 ゆつたりと生きたる垣根を低くする
 おつたりと夕日の中に首ひとつ
 おつたりと構えているが芯がある
 子の成長柱の傷が物語る
 若者の新語に悩む古帽子
 古き佳き時代を生きた父の海
 手間賃が古新聞が二十円

郁夫 達子 昭子 修 千里 福世 昭 柳弘 利昭 恵子 和夫 求芽 嘉代子 たず子 婦美子 哲子 和子 曙蝶 比ろ志 萬的 トミエ いわゑ 光子 光久 美代子 鹿太 昭三

返信へおぼろに好きと書いておく
返信を出さないうちに次が来る
確りと握りかえしたのが返事
母さんが気に入るように返事書く

六月の暦に父のバラが咲く
日当たりの照る日曇る日ある余生
喚声がため息になるフェンス際
今のとこ愛国心はあり敬具

路駐減りこんなに広い御堂筋
軽鴨の親子に教育基本賞
宇野重吉がまだ棲んでいる父の胸
分つてて墓穴掘つてるお節介

小出しした耳学問に知恵を借り
お見合いに野に咲く花でゆきたいと

サークル檸檬
吉田あずき報

影法師のごろ距離をくれと言う
そんなことそれを言わずにもめた朝
ケータイのメールで保つ愛の距離
距離感を大切にすのブライバシー

悪あがきよそう女が廃るから
イーजीに飛びつきすぐに飽きがくる
嫁姑ほどよい距離で呼吸する
振り向いて欲しくて射程距離にいる

距離おいてあなたはアナタきみは君
イヤリング人の噂を聞きたがる
距離をおきストンと穴に落ちました
戦争でぐれ損なつた青春記

晴美
歳子
松煙
順子
孝一
美龍
いたる
忠
正和
直
石舟
二英
折抗
新太郎

たもつ
哲夫
遠野
扶美代
楓楽
房子
昌紀
美龍
みつ子
光久
義子
あずき

近すぎて恋というには遠かつた
週末という段差があつてけつまずく
笑顔売る時給の職で子を育て

堺川柳会
河内
月子報

三日ほど妻と別れて暮らしたい
とは別に億の保険をかけている
ゆとりなんて知らぬ戦士に育てられ
さつきまで付いてた運が急に逃げ

怖かつた父と思えぬデスマスク
生活にゆとりが出来て病気がち
今日からは寢室別に致しませう
表札は別姓仲の良い夫婦

約定は細かい文字で別にある
ごもつともでございませうとも星条旗
別れたらあの日の我慢無駄になる
逢つた日も別れも知っている眼鏡

結婚式世帯は別と子の希望
区役所に変つただけの指定都市
別々の部屋でおんなじドラマ観る
山菜を摘みにきたのに霧になる

さばさばと妻から離婚切り出され
いい人だつたちよつぱり悔いている別れ
別別に逢つて言い分聞いてやる
韓流にはまつて妻の別世界

三猿を使い分けて喜の祝
気の弱い人がたつぷり献血を
善と悪弱いところに同居する

いわゑ
希久子
棲世

時雄
扶美代
恵勇
玄也
像山
伸子
舞夢
日の出
なきさ
みつこ
さくら
アキ
ルイ子
八千代
萌
つづや
梓
幸雀
半銭
五月
和夫
冬虹
公誠

強がり弱音をほろりこぼしてる
情けには弱い男の空財布
最高のツートンシャツで喜寿傘寿
仲の良い夫婦も別の夢を見る

大きな目の服でゆつたり暮らしてる
弱点を巧みに突いてくるカラス
思い出す日々の暮らしに追われた日

豊中もくせい川柳会
江見
見清報

親切気素直に受けるのもマナー
独り居へ親切売りがたんとくる
マニアとは狂気の沙汰と紙一重
出掛け先杖を忘れるほどの足

デイサービス母を見送りお茶にする
末筆にいつも親切書いてある
着替えて八十路行く先院予約
職安で温かいお茶恵まれる

甘くみたケーキマニアの血糖値
お裾分け貰つて運がつかはじめ
年金の幅で見る夢みなおぼろ
月末のピンチ小粋に梅茶つけ

年寄りと見たか説明くどくなる
親の愛貰つたとは返されず
若い日の亡母は美人に見えました
娘が母になつて出番は妻ばかり

雑学のマニア本当はなんだろう
気にかかる妻に貰つたバラのトゲ
亡き母は黄泉の国でもこっち向き

篤子
鐘造
潤子
俣子
泰子
朋月
希

庸佑
重人
高栄
啓生
和子
慶子
知香子
正坊
則彦
肋骨
満寿巳
都代子
見清
宇乃子
タミ
寅次郎
郁子
巴子
玲子

公誠

冬虹

和夫

五月

半銭

幸雀

梓

つづや

萌

八千代

ルイ子

アキ

さくら

みつこ

なきさ

舞夢

日の出

伸子

像山

玄也

恵勇

扶美代

時雄

希久子

棲世

いわゑ

近すぎて恋というには遠かつた

週末という段差があつてけつまずく

笑顔売る時給の職で子を育て

三日ほど妻と別れて暮らしたい

とは別に億の保険をかけている

ゆとりなんて知らぬ戦士に育てられ

あの世へはタダ券賣うまでゆかぬ
親切が脅しに変わる電話口

反省を肌から貰う温暖化

金なのにギフトカードはすまし顔

仏像を盗み集めているマニア

石マニア一期一会の石拾う

親切にしとこ死んだら化けて出る

模写ばかりし過ぎて自分見失う

恍惚の母にせつない迷子札

若美川柳會

石谷美恵子報

懸命に咲いているのに見てくれぬ

ちぐはぐな話も溶かすいいお酒

憲法の改正ますますちぐはぐに

価値観をちぐはぐにする年齢差

しあわせか不幸かちぐはぐな時計

ちぐはぐで掴みどころのない人だ

ちぐはぐを丸くまとめて区長さん

ちぐはぐのようで最新モードです

腰縄を解きふらふら春の道

気が付けばたった一人の縄電車

胸に住む悪魔を縛る縄をなう

人間が縛うにんげんを縛る縄

極楽へまだたとわぬ縄梯子

皿割ったお縄頂戴致します

いぬわしの夫婦縄ばり主張する

張り縄を越えたばかりに鹿が泣く
初対面精一杯の笑顔まぐ

求芽

早人

美義

萬夢

勇治

寿美子

幸雀

尚士

節子

克枝

よしえ

螢

かつみ

菖子

雅女

完司

茶子

たぬ

忠良

重忠

蟹郎

幸枝

和子

圭一郎

大空に今日も一杯夢を描く
もう一杯もう一杯と手をあげる

一杯の水をのみほし決意する

思い出が一杯里の柿の木よ

青空に竿一杯の笑みが揺れ

腹一杯食うから太る私なの

目一杯おしゃれし花は蝶を待つ

咲く日まで待てず蕾を予約する

川柳塔打吹

野口

節子報

雑草も地球の役にたっている
みどり色地球にいのち産んだ色

いつまでも緑の匂い発したい

秀吉とねねの気分で午後のお茶

初敬老気分るんるとはいかぬ

真つ青な空に飛び込みたい気分

釣り日和と孫の守りする手が動く

水の中肥満を忘れギャル気分

瀧の音が気分洗ってくれました

生ビールいつき呑みしいたい気分

上気分ババのお膝でいいババ

彼からの箱の中身が気にかかる

ブタ箱は銭の亡者で満員だ

箱の中夏座布団が眠ってる

ゴミ箱に入ればみんなゴミになる

ゴミ箱の中をさがさが探し物

びつくり箱開けたら美女が飛びだした
箱入りの娘たつぷり銭を食う

一瑠

はるお

一粋

一京

公乃

公子

美恵子

三津子

玲坊

石花菜

清

孝恵

公恵

照彦

滋

貴恵

和子

美知江

芙美子

完司

善江

芳光

玲子

幸子

楨元

空箱も欲と未練で捨てられず
賽銭箱とこの神社も深いこと

菓子箱の重さをそつと確かめる

放し飼にするのに丁度よい場所だ

園児たち大きくなれと稚魚放つ

小さな欲母の乳房を放さない

目放しがならぬ男が一人いる

ハンドルを手から放せば地獄行き

放課後に安全下校守る婆

可愛い子放して自立の旅に出す

野に放つ荒馬の如狂い度し

肩書きを放してからの人間味

川柳クラブわたの花 井尻

IT化脳の摩耗で勘にぶる

薬飲む習慣だけは几帳面

バイキングうまいもんから順に消え

魚の目の泪 手元を迷わせる

暦の暮らし亡母の残像鮮明に

あつさり華を持たせて手綱引く

面影を大事に包み鶴を折る

かる鴨親子お尻ふりふり官邸へ

娘にすがりあのハチ公に会ってくる

面影に昔むかしの僕がいる

捨てかけて古着迷うてまた仕舞う

皀白髪面影残るクラス会

たつぷりの若葉に心洗われる
魅せられて匠の技にうっとり

美代子

茂夫

よしえ

かつみ

和枝

佳女

螢

紀美江

久美代

たけ代

克枝

節子

民報

君江

宏

幸枝

晴美

俊子

浩三

(本)たえ子

(赤)妙子

ますみ

いづみ

義明

ふり子

知佐子

いい顔を過ぎて妻に勤ぐられ
面影が底に沈んでいる涙壺
かわいがる度に反応示す猫
深酒に反応にぶく胃が痛む
路地裏で仲よし子よしかくれんぼ
うっとりとした時も有る妻の顔
うしろ姿見せて女それつきり
ケイタイの见えない紐に縛られる
結婚に迷い離婚にまた迷う
花園で昔娘が美女に見え
胸の中あつさり言えない事もある
あの頃はうっとり聞いた妻のぐち

川柳さんだ

北野

哲男報

民
宏至 愛子 和子 博子 正晴 耀一 はじむ ミッ子 莊治 克美 八寿子
雅司 藤朗 章子 紀乃 朋月 光久 忠
キヨミ 開子 和代 歳子 順子 二英 哲男

田植機を洗い三日の労をとる
脱いで着てまた着替えてるこの暑さ
富柳会 池 森子報
残り火を燃やそう今ならば赤い
母の日を亡母に知らず墓参り
針小を棒大に書く週刊誌
自動化に動じぬ父の床柱
母の日を忘れず詣る花手桶
火の鳥はどこへ行ったか割草着
自動化の真んまん中で組む座禪
堅牢な藁から踊り出たおんな
真つ白なカーネーションにあるドラマ
敗者の美学己ひとりの門に酔う
自動ドアに消えた綿毛と風の死語
やはり善人結局は笑顔
何上げててもよろこぶ母でいてくれる
一声で妻が動いたのは昔
天も地も自動でうごく予定表
ひらがなのやさしさが好き春の川
愛でたててでん手毬の手がそれる
サラ金がチワワの相場下げ続け
振りむかぬ影を叱って野を走る
古井戸が涸れて民話が泣いている
全自動あなたを軸にして回る
息子から孫まで乗せた強い膝
青空が欲しいあなたの背を追う
二歳児と遊ぶとつても長い旅

正和 千代 伸雄 隆彦 淳司 一慧 鐘造 冬虹 欣之 和子 紅紫朗 浩子 アキラ
澄子 高鷺 鬼焼 信子 ひろこ 宏至 萩乃 泰女

息継ぎが下手な河童で流される
口惜しくて柱時計の中にいる
母の日もいつも通りが良いと言う
それほどのことで始まる軋み音
翠洋会 谷口
海峡をひとつ渡れば讃岐弁
海鳴りのように格差を嘆く声
母の愛浅瀬になったかも知れぬ
人恋しネオンの海に住む孤独
海山の幸にも負けぬ母の味
情報の海でストレス症候群
大仏を仰ぎ見る度湧く力
男見る眼は娘の方がたしかそう
車内化粧みるに見かねて目を逸らす
絵画展見ると伝わるメッセージ
世の中は片目で見ると悲しい
いつくるか知れぬ地震にみる恐れ
ストレスがたまると海を見たくなり
みるたびに哀しくなってくる鏡
噴水のしぶきも嬉し須磨の風
浜風に包まれ離宮夢心地
敦盛の笛の音哀し須磨の浦
万葉の歌に読まれる須磨の海
ときめきをばらに託して園めぐる
ツィショットなきさの風も優しく
青空にバス一台の小宇宙
バラ園でダイアナに会う離宮園
極楽もかくやバラ園しようぶ園

初太郎 アキ 淳子 森子 義報 千歩 尚士 蕉一 集一 すみ子 正雄 富子 捷也 絹子 希久子 義子 日の出 満作 理恵 みつ子 桃花 恭昌 舞夢 水昇 春 義 啓子 楓楽

柳界展望

なが
永 峰 宣 子
こ

○第28回津山川柳大会は、

6月4日津山市総合福祉会館で142名の出席を得て開催された。当日の本社同人の秀句は次のとおり。

やさしいとみんなやさしく

してくれる 河内 月子

土に生き土に埋もれてい

く因果 小林 妻子

○会報打吹300号記念大会

は6月17日、倉吉交流プラ

ザで120名の参加を得て開催

された。左は当日の天位。

日の丸を掲げる祝いの心

持ち 土橋 螢

あなたから飛び立てそう

な三回忌 福西 茶子

にんげんもほろりほろりと

消えてゆく 福永ひかり

ドボテンドボテンあの頃

の渚

徳田ひろこ

○いずも川柳会80周年記念

川柳大会は、6月25日120名

の参加を得てホテル武志山

荘で開催された。当日の本

社関係者の秀句は次の通り。

三丁目の夕日をザラ紙で

包む 木本 朱夏

死ぬときは上品ぶつてい

られない 松本 文子

▽同人往来△

○天笑主幹は6月4日、第

27回津山川柳大会へ選者と

して出席のため岡山県津山

市行。

○いずも川柳会80周年記念

川柳大会出席のため、天笑

主幹・みつ子副主幹ほか5

名同行。

○みつ子副主幹は、文芸ア

1ト誌「華音」3号で、川

柳作家やすみりえさんと対

談。お互いの人生に多大な

影響を与えた川柳について

語り合った。

○長浜美籠常任理事は、F

M尼崎で6月20日、7月11

日川柳についての話を放

送。最終回は8月22日午前

11時から15分間。

○イオン奈良登美ヶ丘ショ

ッピングセンター内旭屋カ

ルチャースクエア川柳入門

講座が開講する。1日体験

は8月28日(月)13～15時。授

業日は毎月2・4月曜日13

～15時。講師は米田恭昌常

任理事。問合わせ074

3-70-11516

(左頁上段へ)

新同人紹介

(前月承認) 長谷川 康 子
こ

一みつ子・朱夏・充子・方子推薦

(前月承認) 河野 桃 葉
よ

一みつ子・朱夏・充子・方子推薦

(前月承認) 野崎 勝
まさ

一みつ子・朱夏・充子・方子推薦

池田 岩 夫
お

一狸村・東吉・ダン吉推薦

堤 檜 代
よ

一ダン吉・蛙城・東吉推薦

▽訂正とお詫び△

7月号ⅡP123上段18行、銭ばかり教える↓銭ばかり数える 表3左上ワク水煙抄選者、板尾岳人↓奥田みつ子

常任理事会Ⅱ7月7日出席者19名 ①12回川

柳塔まつり任務分担について ②930号誌上大会決算報告 ③主幹・理事長選任途中経過

④特別常任理事会開催詳細打合わせ ⑤二賞選考集合日程 ⑥同人承認3名 プロジェク

トチーム報告

特別常任理事会Ⅱ8月7日(7月号表2参照のこと)

身の丈の倅せでよし福寿草 ひかり

川崎ひかりさん(同人・おっぱこ吟社)

は5月23日、東かがわ市の白鳥中央公園

に句碑を建立した。

立 建 碑 句



句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
高槻川柳 サークル 卯 の 花	17日(木)午後1時半締め切り 手加減・曖昧・がっかり 塗る・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1118 高槻市奥天神町1-26-17 瀧本きよし
岸 和 田 川 柳 会	19日(土)午後1時半締め切り 洗う・今一・占い・お互い	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅徒歩3分 〒596-0807 岸和田市東ヶ丘町808-586 井伊東吉
川 柳 藤 井 寺	20日(日)午後2時15分締め切り 鉢・面白い	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
岬川柳会	20日(日)午後1時半締め切り 試合・馴れ・やる気	岬町 みさき苑ふれあいセンター 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
川 柳 ねやがわ	20日(日)正午から 記憶・ラッキー・責任・自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前下車 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
もくせい 川 柳 会	21日(月)午後1時から 残す・平気・セット・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2-8-4 江見見清
南 大 阪 川 柳 会	22日(火)午後6時半締め切り シャープ・明るい・呼ぶ・迷路	住まい情報センター 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋6丁目③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
川柳クラブ わたの花	25日(金)午前9時半から 決心・断つ・毒・たんまり	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
東大阪市 川 柳 同 好 会	26日(土)午後6時から しっかり・白・走る・浪人	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
はびきの 市 民 会 川 柳 会	27日(日)午後1時から 糸・しんしん・コーヒー・「油」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川 柳 ふうもん 吟 社	27日(日)午後1時より 亡霊・ペナルティー・切腹	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0033 鳥取市二階町3-102-2 植田一京
八尾市民 川 柳 会	27日(日)午後1時締め切り 第53回 八尾市民川柳大会	八尾文化会館(7月号77頁参照) 〒581-0086 八尾市陽光園1-3-12-305 宮西弥生
京 都 塔 の 会	28日(月)午後2時締め切り 波・狂う・土足	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽
川 柳 塔 みぞくち	28日(月)午後8時から ドア・蛙・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3 小西雄々

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6629-6914)へご連絡ください。

8 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
堺川柳会	7月30日(土)午前10時開場 第24回 夜市川柳大会	7月号 P.51参照 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3 河内天笑
川 柳 塔 な ら	3日(木)午後1時から 這う・宿・パワー	奈良市立中央公民館4F (近鉄奈良④出口歩5分) 〒636-0311 奈良県磯城郡田原本町八尾62-6 渡辺富子
尼 崎 いくしま	4日(金)午後2時締め切り 宇宙・腰・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
城 北 会 川 柳 会	5日(土)午後1時半締め切り 中身・うっとり・ごしごし 自由吟	旭区 老人福祉センター3F 地下鉄千林大宮駅3番出口の左隣 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
富 柳 会	5日(土)午後1時から 狙う・白紙・自由吟	富田林中央公民館 (近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m) 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
倉 吉 会 川 柳 会	5日(土)午後1時から 飾り・廃(すた)れる ちょっと	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川 柳 塔 わかやま	6日(日)午後1時から 音色・蟬・シンプル・「履物」	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
川 柳 塔 唐 津	7日(月)午後1時半から 朱・童・燃える	唐津市 栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517-13 宗 水笑
尼 崎 尾 浜 川 柳 会	8日(火)午後1時から スタイル・帰る・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 事務局 〒661-0976 尼崎市潮江5-2-47 田辺鹿太
ほ たる 川 柳 同 好 会	8日(火)午後1時から 音・ふくらむ・もしや	豊中市立蛸池公民館 阪急・モノレール 蛸池駅駅前ビル5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎
川 柳 塔 打 吹	12日(土)午後1時から 鳥・帽子・洗う	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光
川 柳 塔 みちのく	12日(土)午後4時から 花火・受ける・ああそれなのに	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ1階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉館宮元53-1 小寺花峯
川 柳 塔 ま つ え	12日(土)午後2時締め切り 浜辺・線・やがて・祈る	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0015 松江市上乃木9-23-22 三島崙丘
西宮北口 川 柳 会	14日(月)午後1時から 扱う・晴・大事・自由吟	西宮市中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩3分 プレラにしのみや 〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本義子

一 賞選考規定 (要約)

① 路郎賞 川柳塔欄の入選句から5句

川柳塔賞 水煙抄欄の入選句から5句

昨年9月号から今年8月号までの一年間の入選句の中から自選し、8月号に刷込みの応募用紙を使用の上、8月10日必着で本社宛郵送する。

② 第一次選は主幹・理事長・副主幹・副理事長・編集長・選考委員で行い、各賞20編ずつ選出し、第二次選者へ郵送する。

③ 第二次選者は折り返し、路郎賞、川柳塔賞の各選考結果を本社宛通知する。選考には順位をつけ、第一席(五点)、第二席(四点)、第三席(三点)、第四席(二点)、第五席(一点)の五編の番号を予め本社で用意したハガキに記入のこと。

④ 第二次選者

本社関係 主幹・理事長

地方関係 【一】リブロック(一) 選者数

【北海道・東北 関東 北陸(2)】

【京都・奈良(1)】 【大阪(6)】 【兵庫(3)】

【和歌山(2)】 【鳥取(4)】 【島根(3)】

【岡山・広島・山口(2)】 【四国・九州(2)】

計25名

地方関係の選者は、適宜交代制をとり、均衡をはかることにする。

⑤ 川柳塔欄・水煙抄欄に六ヵ月以上出句した人に応募資格を認める。

川柳塔社各賞選考規定

① 川柳塔社には、路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・檸檬抄賞・一路賞・各地柳壇賞の六賞があり、毎年十月に表彰する。

② 自選集の作者は、すべての賞の対象としない。

③ 各賞とも、原則として同一人に同一賞を授賞しない。

④ 路郎賞・川柳塔賞については、準優秀作の場合、上位は差し支えないが、同位または下位には授賞しない。

⑤ 路郎賞・川柳塔賞の選者は、その任期中は路郎賞の対象としない。また、愛染帖・檸檬抄欄の選者も、路郎賞の対象としない。

⑥ 路郎賞・川柳塔賞の選考要領については、別途に定める。

⑦ 愛染帖賞は選者が決定し、主幹の承認を得るものとする。

⑧ 檸檬賞は二名の選者が選出した十句中から主幹が決定するものとする。

⑨ 一路賞・各地柳壇賞は、受賞句を決定し、主幹の承認を得るものとする。

(備考)

この規定は、現行の選考規定を一部改定したもので、常任理事会で承認の上、平成十八年度から実施するものとする。

平成十八年度二賞選考委員

第一次選者（八名）

河内 天笑・板尾 岳人・奥田みつ子・仁部 四郎
小島 蘭幸・西出 楓楽・前 たもつ・木本 朱夏

第二次選者（二十七名）

本社関係 河内 天笑・板尾 岳人

地方関係（二十五名）（一）内は人数 ブロック内五十音順

〔北海道・東北 関東 北陸ブロック（2）〕

大橋 政良・早川 盛夫

〔京都・奈良ブロック（1）〕 高島 啓子

〔大阪ブロック（6）〕

岩佐ダン吉・籠島 恵子・鴨谷瑠美子

長谷川呂万・板東 倫子・藤村 亜成

〔兵庫ブロック（3）〕

亀岡 哲子・黒田 能子・西内 朋月

〔和歌山ブロック（2）〕 田中 みね・玉置 当代

〔鳥取ブロック（4）〕

石谷美恵子・岸本 宏章・白根 ふみ・土橋はるお

〔島根ブロック（3）〕

伊藤 寿美・川本 畔・三島 淞丘

〔岡山・広島・山口ブロック（2）〕

岩本 笑子・古谷 節夫

〔四国・九州（2）〕 岩切 康子・小澤 幸泉

昨年九月から今年八月の間に

誌友から同人になられた方へ

「路郎賞」「川柳塔賞」のいずれか月数の多い方を
選択して応募してください。

ただし、「路郎賞」には川柳塔欄作品から、「川柳
塔賞」には水煙抄欄作品からの応募となりますので、
間違いないようにお願いします。

平成十八年度各賞選者

愛染帖賞 新家 完司

檸檬賞 仁部 四郎 藤田 泰子

一路賞 富士 慕情 古久保和子

各地柳壇賞 山本 義子 吉村 一風

編集後記

☆一賞応募月になりました。120・121頁の選考規定をご覧の上、自分自身の一年を振り返るつもりで句を自選いただき、全員の応募をお願いします。

☆「川柳塔」「水煙抄」の毎月の掲載順序については、次のようになっているのでご了承下さい。「川柳塔」の6句組は選者（主幹）の指定通り。5句組については都道府県を順番に回転させている。今月号のトップの岡山県は9月号では最後尾になり、広島県、山口県……という具合にせり上がる。都道府県内の市は県庁所在地がはじめに来て、あとは五十音順になる。それぞれの市の中の同人は順不同とさせてもらっている。☆「水煙抄」は岳人理事長

の場合は前記の「川柳塔」に準じ、6句組は指示通り。5句組・4句組は各々に順序を回転させている。ただし、みづ子副主幹選は全て指定された順の掲載となっている。

☆メタボリック症候群が話題になり、不安を煽られている向きもあるだろう。つまりウエストが男性85センチ、女性90センチ以上で、①高脂血症・②高血圧・③高血糖のうち2つの症状がある場合、心筋梗塞や脳卒中のリスクが高いという。☆だから食生活を改善し、運動をしましょうと厚生労働省がたまう。どうも病気を予防して、医療費などのコストを下げようという深謀遠慮もあるらしい。統計では小太りの方が長生きだから、気にしすぎてストレスを感じの方が遥かに体に悪そう。

(ふ)

ひとこと

「余生」と「退屈」

退屈な余生に借りも貸しもなし

全日本川柳協会の会長であった吉岡龍城さんの句である。「余生」というものを持つるのは、ありがたいことだと思う。悪戦苦闘の半生を終わってやっと定年にたどり着き、縁あって始めた川柳。退屈しのぎのつもりでのんびりやればいいものを、あれこれと用事をかぶ

って今日に至った。「退屈」にあらがれながら、持って生れた貧乏性で、何もすることがなければソワソワして落ち着けない。

龍城さんは、川柳人生の集大成として著書の刊行を計画されているが、この人もあるいは退屈することが怖くて思い立たれたのではないだろうか。私はいつか余生を終る日、借りも貸しもない人生だったと納得して眼を閉じたい。

(田中 正坊)

○自然のものを自然のまま口に入れることが不可能な時代となった。無添加食品は、自給自足でもない限り得られない。添加物はあまり使われていないイメー

食品には10種類以上の添加物が入っているという。

以外に添加物だから、その表示の少ないものを選ぶ、加工度の低いものを選ぶ、止むを得ない時以外は、自分で調理する等の自衛手段をとるほかない。

ジのコンピニのおにぎり(昆布佃煮入り)でさえ裏にはアミノ酸、グリシン、増粘多糖類、ソルビット、ステビア等、8種類が表示されている。見た目に綺麗、美味し、腐りにくい加工

○低級品のたらこは一晚で、マジックのように、つやつや身の締まったたらこに変身するという。

○一つずつの添加物は、ねずみ等の実験により、無害と証明されているが、複合摂取の害は分かっている。○添加物の知識のない私達は表示をみて、「台所にあるもの(砂糖や醤油等)」

○一つずつの添加物は、ねずみ等の実験により、無害と証明されているが、複合摂取の害は分かっている。

○ついでに簡便に走っている私の一時の反省にはなつたが長続きはしないと知っている。そして快適、便利な暮らしを支えてくれているのもまた化学物質のお陰という矛盾もある。

(希)

二賞選考

応募用紙

路郎賞（川柳塔欄・同人）	川柳塔賞（水煙抄欄・誌友）

○印を入れてください。

月	月	月	月	月
頁	頁	頁	頁	頁

◎下段に掲載月と掲載頁を記載のこと。
◎裏ページの要項を読んで応募してください。

地名

姓・雅号

応募要項

① 川柳塔欄・水煙抄欄に六カ月以上、出句した人に応募資格を認める。

② 平成17年9月号から平成18年8月号までの自分の入選句から5句を選ぶ

路郎賞——同人は川柳塔欄から応募
川柳塔賞——誌友は水煙抄欄から応募

③ 5句と掲載月、掲載頁を楷書で書き、8月10日必着のこと

④ P 120・P 121を参照して下さい。

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(10月号)

地名

都府
道市
県
姓
雅
号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようにお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒545-0005 大阪市阿倍野区三明町2-10-16 ウエムラ第2ビル202



檸檬抄投句用紙

「ぶつかる」 (8月15日締切)

10月号発表

松本 文子 選 — 共選 — 川上 大輪 選

B A

--	--

地名

市都
県道府

姓
雅号

B A

--	--

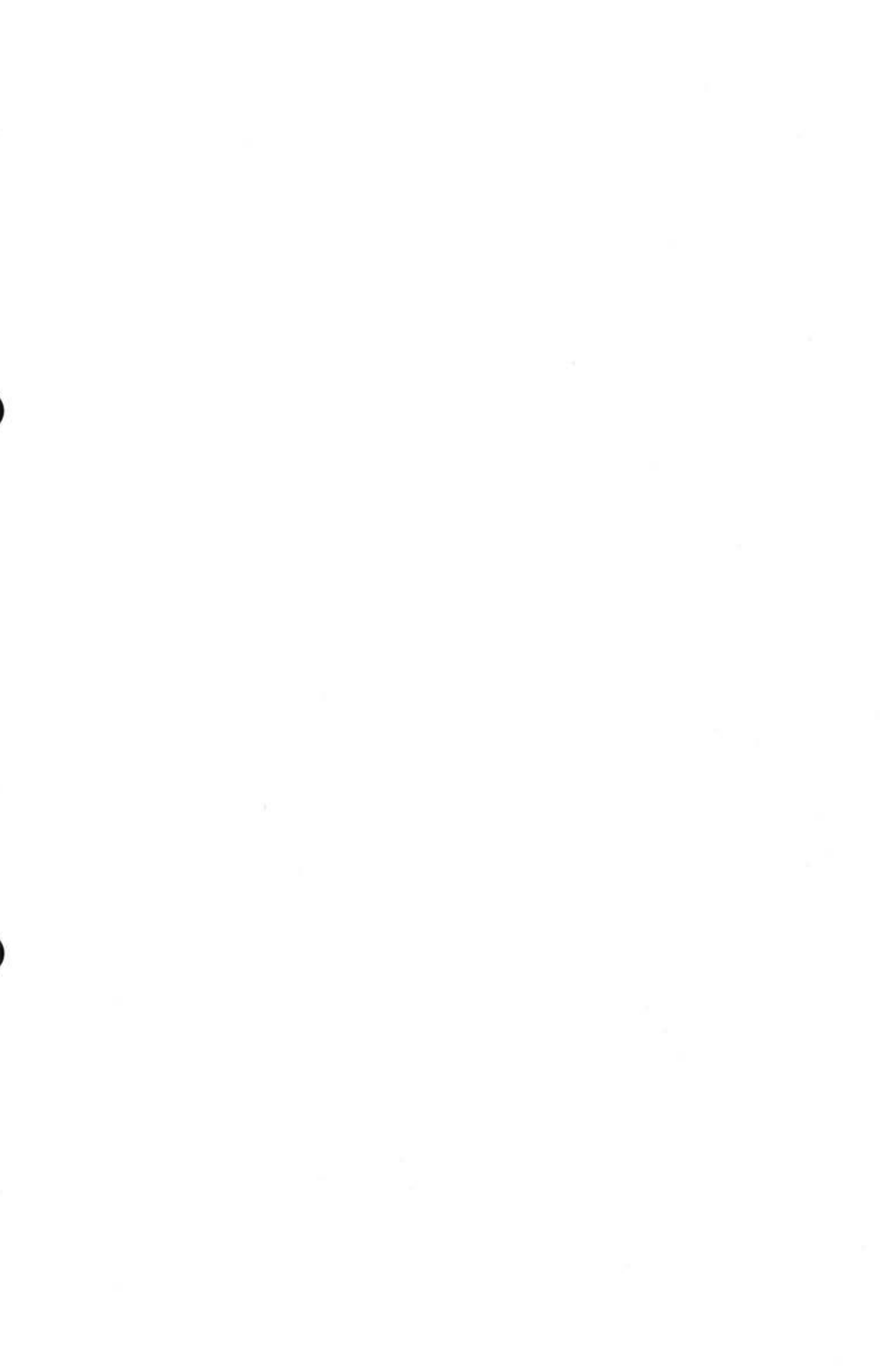
地名

市都
県道府

姓
雅号

切らないで下さい

左右に同じ句を書いて下さい



作品募集

10月号発表 (8月15日締切)

川柳塔 (8句)
河内天笑選

水煙抄 (8句)
奥田みつ子選

愛染帖 (3句)
新家完司選

檸檬抄 (2句)
川上大輪共選

一路集 (3句)
松本文子選

初歩教室
「燃える」 小川崎 ひかり選
「無」 (3句) 三宅保州担当
「童」 源田八千代選

11月号
檸檬抄「シングル」
一路集「鼻」「チャイム」
「痛い」
初歩教室「柿」

本社8月句会

とき 8月7日(月) 午後5時半開場・6時半締切り
—開催時間、締切り時間に御注意下さい。
ところ アウィーナ大阪 4階 金剛
天王寺区石ヶ辻町19-12 電話06・6772・1441

おはなし
兼題 「いちず」 小島笑司選
「年金」 居谷真理子選
「ジャンプ」 黒田能子選
「凭れる」 江見清選
「つまむ」 鴨谷瑠美子選
河内天笑選

席題 1題 当日発表 (各題2句以内)
会費 1000円 投句料 500円

本社9月句会
8日(金) 午後5時半から
兼題 「あべこべ」「昔」「喜ぶ」
「ジंकス」「漂う」

第25年度 夜市川柳募集

第3回「腰」前田咲二選
ハガキに3句 8月31日締切
投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集は川柳塔柳箋(本社事務所取り扱い)、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いたします。

〒545-0005

発行所 川柳塔社
電話 〇六・六六二・九一九四番
振替 〇〇九八〇・五一三三三八番

大阪市阿倍野区三好町二丁目一〇一六
ウエムラ第2ビル202号室

定価 八百円(送料84円)
半年分 五千円(送料共)
一年分 九千八百円(同)
二〇〇六年(平成十八年)八月一日発行

発行人 河内天笑
編集人 西出楓
印刷所 美研アート

鳥取県総合芸術文化祭

第30回 鳥取県川柳大会

とき 10月22日(日) 10時開場 12時45分開会

ところ ホーブスターとつとり JR山陰線「鳥取駅」下車・歩6分

30周年記念講演 「言葉の落ち葉ひろい」

須崎 俊雄氏 (鳥取文芸協会会長)

兼題と選者 (各題2句・席題なし・出句締切11時45分)

「芝居」 奥田 みつ子 選

「情け」 長谷川 紫光 選

「泳ぐ」 金築 雨学 選

「袋」 小林 由多香 選

「耳」 門脇 かずお 選

「打つ」 竹信 照彦 選

事前投句 (ジュニアのみ) 「強い」小西 雄々 選

表彰 鳥取県知事賞ほか

会費 2,000円 (作品集・昼食呈)

欠席投句 1,000円 9月20日締切、用紙自由、小為替

投句先 (問い合わせ先)

〒689-0423 鳥取市鹿野町中園180

森山 盛桜方

第30回鳥取県川柳大会実行委員会 宛

TEL 0857 (82) 1491

主催 鳥取県川柳作家協会・文化団体連合会・鳥取市他

医療法人社団

湯川胃腸病院

・日本医療機能評価機構・ISO9001-2000認証取得

健康保険取扱 看護2A・緩和ケア病棟

- ・消化器科・内科・外科
- ・放射線科・ホスピス
- ・デイサービスセンター

診療時間

月～金 8:30～16:00

土 8:30～11:00

JR桃谷駅徒歩3分

<http://www.yukawa.or.jp>

電話 大阪 (06) 6771-4861(代)